# 東北大学埋蔵文化財調査年報4.5



東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992

# 東北大学埋蔵文化財調査年報4.5

東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992

埋蔵文化財調査年報も4号を重ねるに至った。第1号以来7年になる。 その主要報告内容は、青葉城二の丸跡の発掘調査であるが、明治末期以 前と考えられるビール瓶に対する検討なども述べられており、考古学も 大変に巾を拡げたものと大いに考えを改める必要を感ずる。考古学は、 その出土物自体とその状況の両方から当時を推定する学問だということ を今更ながら覚る思いである。

数十年前には遠見塚の道傍に石棺が放置され、子供達が棺の本体を支点として掛け渡した蓋の両端に乗って傾斜を変えて遊んでいたのを思い出し何とも云えない気持すら持つ。

高感度測定器の開発が進み、考古学は著しく、その程度を高めることとなった。そしてまたその範囲も急速に拡大し、考古学は考過去学とも云うべき状態になって来た。

他方、石器時代など全くないと云われていた東北地方に旧石器時代まであったとされるようになって来た。15万年、20万年前の東北地方の人類文化までが論ぜられるようになった。

このようなことが可能になって来た最大の理由は、科学的手法の導入によって、確実さを著しく増すことが出来るようになったことや、その測定対象もまた急速に開発され新しい量の測定を行うことによって事実を推定する手法が格段を超え革命的と云える程進展をとげたと云うことである。

本調査年報が、新しい手法展開のいくつかの引き金としての役割をも 果して吳れる日を心から待望している。学問で、新しい事実のみでなく、新 しい手法の展開こそ、最も評価されるべき点であると考えるからである。

- 1. 本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査委員会が1986年度および1987年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。両年度の調査量がさほど多くないため、利用の便を考慮し、年報4と年報5を、合冊として一つにまとめたものである。
- 2. 報告される遺跡と略号、発掘調査期間は以下の通りである。

年報4(1986年度調査遺跡)

仙台城二の丸跡第7次調査地点(NM7)

1986年 3 月26日~4 月16日

仙台城二の丸跡第8次調査地点(NM8)

1986年6月2日~8月9日

年報5(1987年度調査遺跡)

仙台城二の丸跡第4次調査地点(NM4)

1985年1月9日~2月6日

1987年7月15日~9月4日

- 3. 調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査委員会の委嘱を受け、埋蔵文化財調査班(1988年より調査室)が行った。
- 4. 本年報の編集は、須藤隆の指導のもとに、佐久間光平(~'90)・山田しょう・藤沢敦('91~)が担当した。
- 5. 本文は、佐久間光平・山田しょう・藤沢敦が分担執筆した。 また陶磁器については本田泰貴氏(東北陶磁文化館)に原稿をいただいた。 執筆者名は文末に( )で記載した。
- 6. 次の方々に各種の遺物について御教示をいただいた(敬称略)。

陶磁器:本田泰貴(東北陶磁文化館)

木簡:田中秀和(東北大学文学部)

骨角製品:富岡直人(東北大学考古学研究室)

石筆石材:蟹沢聡史(東北大学教養部)

皮製品:吉田行雄(ロダン・シューズ)

7. さらに以下の方々から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる。 宮城県教育委員会、宮城県図書館、東北歴史資料館、斎藤報恩会、仙台市教育委員会、仙台

市博物館、仙台市歴史民俗博物館、東北大学考古学研究室

8. 出土遺物は、東北大学埋蔵文化財調査委員会が保管・管理している。

## 凡

- 1. 遺物の実測図及び写真の縮尺は、各々明記した。
- 2. 方位は、真北に統一してある。
- 3. 川内地区の仙台城二の丸跡にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」(縮尺500分の1)を使用した。
- 4. 引用・参考文献は、巻末に一括した。
- 5. 遺物観察表の残存率は、P=100%、 $L=99\%\sim60\%$ 、 $M=59\%\sim30\%$ 、 $S=29\%\sim20\%$ 、S=19%以下を示す。

## 1986年度調査遺跡(年報4)の概要

仙台城二の丸跡第7次調査地点(NM7)

江戸時代:掘立柱建物・溝・ピット

陶磁器・瓦・金属製品・石製品

縄文時代?:石器

仙台城二の丸跡第8次調査地点(NM8)

江戸時代:堀・井戸・ピット

陶磁器• 瓦

明治時代:堀・道路・ピット・木桶

陶磁器・瓦・ガラス製品・石製品・骨角製品

## 1987年度調査遺跡(年報5)の概要

仙台城二の丸跡第4次調査地点(NM4)

江戸時代:溝(17世紀初頭)・掘立柱列・ピット

陶磁器・瓦・木簡・木製品・金属製品・骨角製品

縄文時代?: 土器・石器

#### 整理作業参加者

大内美紀 太田はるよ 小川徳子 庄司一夫 高橋健寿 田中京美 崔熙柱 中村裕 朴栄淑 長谷川チエ子 本多昭子 松川弘子 八重座のり子 渡辺清子

#### 発掘調査参加者

浅野幸治 阿部志う 阿部友衛 石堂幸子 板橋憲一 伊藤千穂 伊藤道子 歌川喜恵子梅沢みえ 相川美子 及川慶治 及川茂 太田すゑ子 太田はるよ 小出正幸 小山さき子管野春枝 菊地スミ子 国安まほ子 小林文夫 小山八郎 佐々木寅男 佐久間光平佐藤広史 高橋理 高橋健寿 高橋富勝 千田祐美恵 東矢高明 富塚信彦 新沼よしえ新野一浩 長谷川チェ子 長谷川範明 菱沼孝志 檜野一子 本田泰貴 前沢聡央松川弘子 丸山伝 宮本約 森嶋秀一 森まきい 山田富士子 湯川亮 横山東市 李蓮陸太進 朱漢英

## 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程

改正 昭和63年1月19日

(設置)

- 第一条 東北大学に、東北大学の施設の整備にともなう埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議するため、東北大学埋蔵文化財調査委員会(以下「委員会」という。)を置く。 (組織)
- 第二条 委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。
  - 一 東北大学施設整備委員会地区協議会委員長
  - 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干人
  - 三 発掘調査地に関連のある部局の長で、その都度委員長が指名するもの
  - 四 事務局長

(委員長)

第三条 委員長は、学長をもって充てる。

(調査室)

- 第四条 委員会に、委員会が定める基本方針に基づき、発掘調査に関する実施計画、実施の細目及び調査報告書に係る事項を処理させるため、調査室を置く。
  - 2 調査室に、室長及び調査員を置く。
  - 3 室長は、調査室の業務を掌理し、調査員は、調査室の業務に従事する。

(委嘱等)

- 第五条 第二条第二号に掲げる委員及び調査員は、学長が委嘱する。
  - 2 室長は、委員のうちから委員長が指名する。

(調査員の出席)

第六条 委員長は、調査員を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(幹事)

第七条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(庶務)

第八条 委員会の庶務は、事務局施設部において行う。

(雑則)

第九条 この規定に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。 附則

この規定は、昭和六三年一月十九日から施行する。

## 東北大学埋蔵文化財調查委員会規程

(昭和58年11月15日施行)

(設置)

第一条 東北大学に、東北大学の施設の整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を 調査審議するため、東北大学埋蔵文化財調査委員会(以下「委員会」という。)を置く。 (組織)

- 第二条 委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。
  - 一 東北大学施設整備委員会地区協議会委員長
  - 二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は助教授 若干人。
  - 三 発掘調査地に関連のある部局の長で、その都度委員長が指名するもの。

(委員長)

第三条 委員長は、学長をもって充てる。

(調査員)

第四条 委員会に、委員会が定める基本方針に基づき、発掘調査に関する実施計画、実施の細目及び調査報告書に係る事項を処理させるため、調査員を置く。

(委嘱)

第五条 第二条第二号に掲げる委員及び調査員は、学長が委嘱する。

(調査員の出席)

第六条 委員長は、調査員を委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

(幹事)

第七条 委員会に幹事を置き、旋設部長をもって充てる。

(庶務)

第八条 委員会の庶務は、事務局施設部において行う。

(2年日11)

第九条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。 附則

この規程は、昭和五八年十一月十五日から施行する。

## 埋蔵文化財調査室運営方針

東北大学埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という)の運営は、東北大学埋蔵文化財調査委員会規程によるもののほか、次の運営方針に基づき行うものとする。

- 1 調査室の運営及び発掘調査の実施方針等に関して審議するため、運営会議を置く。
- 2 運営会議は、次に掲げる委員をもって組織する。
  - (1) 調査室長及び調査員
  - (2) 庶務課長、主計課長及び企画課長
  - (3) 発掘調査地を所管する部局の事務長
  - (4) 専門委員若干名
- 3 調査室は、東北大学構内遺跡の調査及び保護にあたる。
- 4 調査室は、発掘調査による出土文化財の整理と調査報告書の作成にあたり、公開、活用をはかる。
- 5 調査室は、出土文化財・資料(図面、写真等)の保存、管理にあたる。
- 6 調査室は、文化庁長官、教育委員会等への発掘調査に関わる届け出業務(発掘届けを除く) を担当する。

## 東北大学埋蔵文化財調査委員会(1986年度)

委員長	学		長					石	田	名書	拿雄
委員	ШΫ	り地区	区協議	会委員	長	(文学部長)		淹	浦	静	雄
	青萝	丰山邦	也区協	議会才	委員長	(工学部長)		穴	Ш		武
	星隊	吏地区	区協議	<b>美会委</b> 員	長	(医学部長)		Щ	本	敏	行
	片写	戸地▷	区協議	会委員	長	(金研所長)		鈴	木		進
	文	学	部	教	授			渡	辺	信	夫
	文	学	部	助孝	效授			須	藤		隆
	理	学	部	助孝	效授			中	Л	久	夫
	工	学	部	教	授			坂	田		泉
	附	属	図	書(	喜 長			塚	本	哲	人
調査員	文	学	部	助	手			梶	原		洋
	文	学	部	助	手			佐ク	間	光	平
幹事	施	i	殳	部	長			中	野	勝	弘

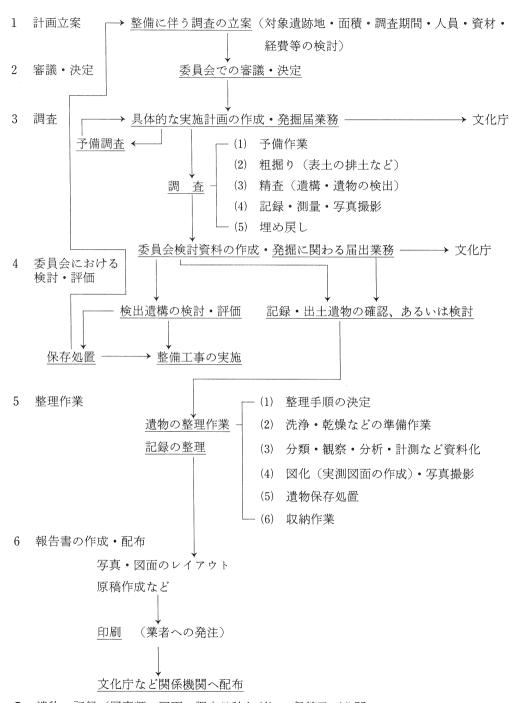
## 東北大学埋蔵文化財調査委員会 (1987年度)

委員長 学 長 石田 名香雄 川内地区協議会委員長 委員 (教養部長) 細 谷 昻 青葉山地区協議会委員長 (工学部長) 大 谷 茂盛 星陵地区協議会委員長 (医学部長) 山本 敏 行 片平地区協議会委員長 (選研所長) 大 森 康男 文 学 部 教 授 (調査室室長) 渡辺 信夫 文 学 部 教 授 羽下 徳 彦 文 学部 助教授 須 藤 降 文 学 部 助教授 今 泉 降 夫 理 学 部 教 授 中川久夫 工 学 部 教 授 坂 田 泉 附 属 図 書館長 哲人 塚本 理 学 部長 小 西 和彦 事 務 局 長 石 田 正一郎 調査員 文 学部 助 手 梶 原 洋 文 学 部 助手 佐久間 光 亚 幹事 施 設 部長 勝弘 中野 庶 務 部 長 坂 本 夫 好 経 理 部長 滝 本 良 雄

## 東北大学埋蔵文化財調査委員会(1992年1月現在)

委員長	学		長				西	沢	潤	_
委員	ШР	勺地区	区協議会	会委員	長	(文学部長)	渡	辺	信	夫
	青季	ま山 ま	也区協詞	義会氢	委員長	(理学部長)	桜	井	英	樹
	星隊	吏地 ▷	区協議会	会委員	長	(医学部長)	平		則	夫
	片写	平地区	区協議会	会委員	長	(遺伝生態研究センター長)	菅			洋
	文	学	部	教	授		羽	下	徳	彦
	文	学	部	教	授	(調査室室長)	須	藤		隆
	文	学	部	助蓼	效授		今	泉	隆	雄
	工	学	部	助劃	效授		飯	淵	康	_
	事	<b></b>	务	局	長		藤	村	和	男
調査員	文	学	部	助	手		Щ	田	しょ	ŧЭ
	文	学	部	助	手		藤	沢		敦
幹事	施	Ē	艾	部	長		Щ	本		努
	庶	矛	务	部	長		堀		道	博
	経	丑	里	部	長		Щ	田		清

## 埋蔵文化財発掘調査及び委員会審議の手順



- 7 遺物・記録(写真類、図面、調査日誌など)の保管及び公開
- 8 委員会への調査終了報告

## 目 次

序

例言•凡例

東北大学埋蔵文化財調査委員会規約 東北大学埋蔵文化財調査委員会組織 東北大学埋蔵文化財調査室運営方針 埋蔵文化財発掘調査及び委員会審議の手順

目次

図目次

表目次

図版目次

## 東北大学埋蔵文化財調査年報4

第I章	1986年度調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1.	はじめに	1
2.	発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
(	.) 川内地区の調査	1
(	2) 青葉山地区の調査	1
3.	このほかの調査班の活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
第II章	川内地区(仙台城二の丸跡)の調査	4
1.	川内地区の立地と歴史および1985年度までの調査	4
2.	二の丸跡第7次調査地点(NM7)の調査	8
(	l) 調査地点の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
(	2) 調査にいたる経緯	8
(	3) 調査方法と調査経過	8
(	4) 層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
(	5) 遺構と遺物	12
	① 遺構	12
	② 遺物	19
	A. 陶磁器·····	19
	B. 瓦······	24

C. 金属製品······	50
D. その他の遺物	50
3. 二の丸跡第8次調査地点(NM8)の調査	55
(1) 調査地点の位置	55
(2) 調査にいたる経緯	55
(3) 調査方法と調査経過	55
(4) 層序	59
(5) 遺構と遺物	59
① 遺構	59
② 遺物	64
A. 陶磁器·····	64
B . 瓦······	82
C. 煉瓦······	85
D. ガラス製品	85
E. 金属製品······	89
F. 石製品······	89
G. 木製品	89
H. 骨製品・骨	90
I . 皮製品	90
第Ⅲ章 考察·····	90
1. 第7次調査地点の調査	90
2. 第8次調査地点の調査	91
(1) 江戸時代	91
(2) 明治(第二師団)以降	93
<b>市业小学研查文</b> 协股细末左却。	
東北大学埋蔵文化財調査年報5	
第 I 章 1987年度調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	95
1. はじめに	95
2. 発掘調査の概要	95
(1) 川内地区の調査	95
(2) 青葉山地区の調査	96
(3) 川渡地区の調査	96

(4) その他の調査室の活動	•96
第11章 川内地区(仙台城二の丸跡)の調査	•96
1. 1986年度までの調査	•96
2. 二の丸跡第 4 次調査地点(NM 4)の調査	.96
(1) 調査地点の位置	.96
(2) 調査にいたる経緯	.97
(3) 調査方法と経過	•97
(4) 層序	100
(5) 発見された遺構と遺物	100
① 遺構	100
A. I⊠1	103
B. II区北半部1	L04
C. II区南半部 ····································	110
② 遺物	115
A . 陶磁器1	115
B. 瓦 ·······1	120
C. 木製品	129
D. ガラス製品	130
E. 骨角器1	130
F. その他の遺物1	130
第Ⅲ章 考察	133
引用・参考文献	
英文Summary	

図版

## 図 目 次

図 1	東北大学と周辺の遺跡2	$\boxtimes 31$	第7地点出土熨斗瓦(2)44
図 2	仙台城と二の丸の位置4	図32	第7地点出土輪違い(1)45
図 3	仙台城二の丸・武家屋敷跡調査地点5	図33	第7地点出土輪違い(2)46
図 4	二の丸第7調査地点調査区の位置…9	⊠34	第7地点出土輪違い(3)47
図 5	第7地点調査区全体図10	図35	第7地点出土面戸瓦(1)48
図 6	第7地点土層柱状模式図11	⊠36	第7地点出土面戸瓦(2)49
図 7	第7地点6~8区検出掘建柱建物跡13	⊠37	第7地点出土伏間瓦•道具瓦51
図 8	第7地点1区・2区平面図・断面図14	⊠38	第7地点出土栈瓦·装飾瓦·
図 9	第7地点3区・4区平面図・断面図15		その他の遺物52
図10	第7地点5区・6区平面図・断面図16	⊠39	瓦の計測値53
図11	第7地点7区・8区平面図・断面図17	⊠40	二の丸第8調査地点調査区の位置…56
図12	第7地点9区・10区平面図・断面図18	図41	第8地点土層断面図57
図13	第7地点11区平面図・断面図19	⊠42	第8地点平面図(8層上面)60
図14	第7地点出土磁器22	図43	第8地点平面図(5層上面)・・・・・・62
図15	第 7 地点出土陶器23	⊠44	第8地点平面図(3層上面)63
図16	瓦分類の手順26	図45	第8地点出土磁器(1)67
図17	瓦の計測部位26	図46	第8地点出土磁器(2)68
図18	瓦屋根復元模式図27	図47	第8地点出土磁器(3)69
図19	第7地点出土軒丸瓦(1)29	図48	第8地点出土磁器(4)7(
図20	第7地点出土軒丸瓦(2)30	⊠49	第8地点出土磁器(5)71
図21	第7地点出土軒丸瓦(3)31	図50	第8地点出土磁器(6)72
図22	第7地点出土軒丸瓦(4)・軒平瓦(1)…32	図51	第8地点出土磁器(7)73
⊠23	第7地点出土軒平瓦(2)34	図52	第8地点出土磁器(8)74
図24	第7地点出土丸瓦(1)37	図53	第8地点出土磁器(9)75
図25	第7地点出土丸瓦(2)38	図54	第8地点出土磁器(10)76
⊠26	第7地点出土丸瓦(3)39	図55	第8地点出土陶器(1)77
⊠27	第7地点出土丸瓦(4)40	⊠56	第8地点出土陶器(2)78
図28	第7地点出土平瓦(1)41	図57	第8地点出土陶器(3)79
図29	第7地点出土平瓦(2)42	図58	第8地点出土瓦(1)8
図30	第7地点出土平瓦(3)•熨斗瓦(1)·····43	図59	第 8 地点出土瓦(2)84

図60	第8地点出土ガラス製品・・・・・・86	⊠72	第 4 地点出土陶磁器(2)119
図61	第8地点出土その他の遺物87	図73	第4地点出土軒平瓦•丸瓦123
図62	石筆のX線回析分析89	図74	第 4 地点出土平瓦·栈瓦(1) ······124
⊠63	絵図による第8地点付近の変遷92	図75	第 4 地点出土桟瓦(2)125
⊠64	二の丸第4調査地点調査区の位置…98	図76	第 4 地点出土桟瓦(3)126
図65	第 4 地点全体図101	図77	第 4 地点出土桟瓦(4) • 道具瓦127
⊠66	第4地点I区平面図・断面図(1) ···105	図78	第 4 地点出土その他の瓦128
図67	第 4 地点 I 区平面図・断面図(2) ···107	図79	瓦屋根復元模式図129
図68	第 4 地点II区平面図・断面図(1) ···109	図80	第4地点出土木簡・木製品131
⊠69	第4地点II区平面図・断面図(2) ···111	図81	第4地点出土その他の遺物132
図70	第4地点II区平面図・断面図(3) ···113	図82	絵図による第4地点付近の変遷 …134
図71	第 4 地点出土陶磁器(1)118	図83	旧地表面と整地層の関係136
	表		次
表1	1986年度調査概要表1	表13	第8地点出土陶磁器集計表64
表 2	第7地点出土陶磁器集計表21	表14	第8地点出土陶磁器観察表(1)80
表 3	第7地点出土陶磁器観察表23	表15	第8地点出土陶磁器観察表(2)······81
表 4	第7地点出土瓦集計表25	表16	第8地点出土瓦集計表82
表 5	第7地点出土軒丸瓦観察表33	表17	第8地点出土その他の遺物集計表…85
表 6	第7地点出土軒平瓦観察表33	表18	第8地点出土その他の遺物観察表…88
表 7	第7地点出土丸瓦観察表35	表19	1987年度調査概要表95
表 8	第7地点出土平瓦観察表36	表20	第 4 地点基本層土層注記表 … 99
表 9	第7地点出土熨斗瓦観察表36	表21	第 4 地点出土陶磁器集計表116
表10	第7地点出土輪違い観察表49	表22	第4地点出土陶磁器観察表117
表11	第7地点出土面戸瓦観察表49	表23	第 4 地点出土瓦集計表121
表12	第7地点出土その他の遺物集計表…54	表24	第4地点出土その他の遺物集計表…131
	図版	目	次
図版 1	第7地点全景145	図版 5	5 第7地点発掘区(8·9·10区)···149
図版 2	第7地点発掘区(1·2·3区) ···146	図版 6	第 7 地点出土陶磁器150
図版 3	第7地点発掘区(4·5·6区) ···147	図版 7	· 第7地点出土軒丸瓦(1) ······151
図版 4	第7地点発掘区(7·8区) ·····148	図版 8	第7地点出土軒丸瓦(2)·軒平瓦(1)

	152	図版25	第8地点出土磁器(3)169
図版 9	第7地点出土軒平瓦(2)•丸瓦(1) 153	図版26	第8地点出土磁器(4)170
図版10	第7地点出土丸瓦(2)•平瓦(1) …154	図版27	第8地点出土陶器(1)171
図版11	第7地点出土平瓦(2)155	図版28	第8地点出土陶器(2)・瓦(1)172
図版12	第7地点出土平瓦(3)156	図版29	第8地点出土瓦(2)173
図版13	第7地点出土平瓦(4)157	図版30	第8地点出土その他の遺物174
図版14	第7地点出土平瓦(5)・熨斗瓦 …158	図版31	第 4 地点全景• I 区遺構(1) ·····175
図版15	第7地点出土輪違い159	図版32	第 4 地点 I 区遺構(2) ······176
図版16	第7地点出土面戸瓦160	図版33	第 4 地点 II 区遺構(1) · · · · · · · · 177
図版17	第7地点出土伏間瓦·道具瓦·	図版34	第 4 地点 II 区遺構(2) · · · · · · · · 178
	桟瓦161	図版35	第 4 地点出土陶磁器(1)179
図版18	第7地点出土桟瓦・その他の遺物・	図版36	第4地点出土陶磁器(2)•軒平瓦•
	瓦器面調整162		丸瓦・平瓦(1)180
図版19	第8地点全景・3層上面検出遺構	図版37	第 4 地点出土平瓦(2)・桟瓦(1) …181
	163	図版38	第 4 地点出土桟瓦(2)182
図版20	第8地点5層上面検出遺構164	図版39	第 4 地点出土桟瓦(3)・その他の瓦
図版21	第8地点8層上面検出遺構165		183
図版22	第8地点8層上面検出遺構・	図版40	第4地点出土その他の遺物184
	深掘区断面166	図版41	仙台城絵図・模型185
図版23	第 8 地点出土磁器(1)167	図版42	仙台城絵図186
図版24	第 8 地点出土磁器(2)168		

# 東北大学埋蔵文化財調査年報 4

## 第 I 章 1986年度調査の概要

#### 1. はじめに

1983年度、学内に埋蔵文化財調査委員会が設置されて以降、東北大学では大学構内の遺跡の調査・保護を組織的に行ってきた。特に、近世の仙台城二の丸・武家屋敷跡である川内地区、旧石器時代~弥生時代の遺跡がある青葉山地区の継続的な調査では多くの成果があげられており(東北大学埋蔵文化財調査委員会1985・1987・1990)、構内遺跡の重要性があらためて認識されるに至っている。

1986年度においても、仙台城二の丸跡の調査を中心として調査が行われ、新たな資料を提供することになった。本報告書は、これらの調査成果についてまとめたものである。

#### 2. 発掘調査の概要

1986年度は、本調査2件、試掘調査1件、立会調査1件、計4件の調査を実施した。これらの調査の内訳は、川内地区(仙台城二の丸跡)においては本調査2件、立会調査1件、青葉山地区(旧石器-縄文)では、試掘調査1件である(表1)。

#### (1) 川内地区(仙台城二の丸跡)の調査

1986年3月26日~4月16日には、記念講堂前で植樹に伴う事前調査を実施した。当地区は、二の丸に隣接した「勘定方」の区域にあたる。調査の結果、掘立柱建物跡や溝などを確認した(第2章-2)。

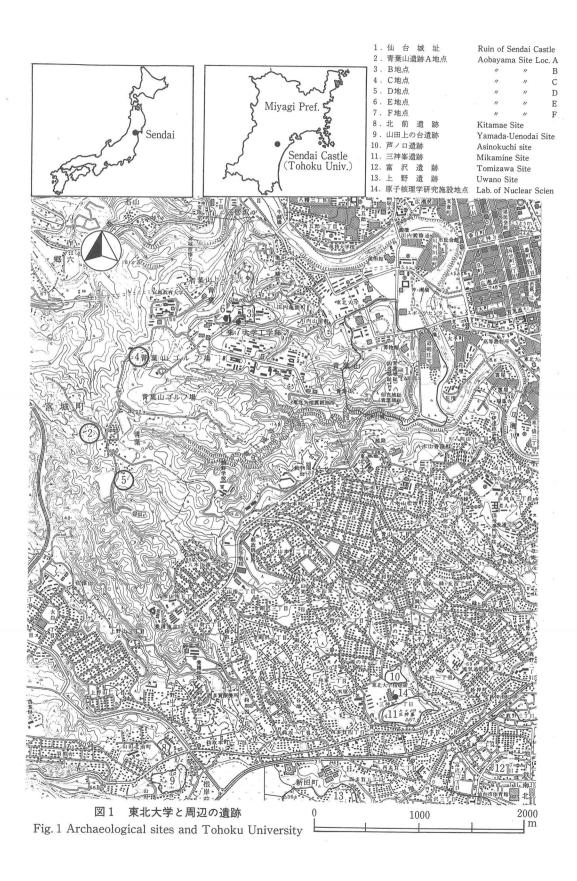
1986年 6 月 2 日~ 8 月 9 日には教養部文科系教官棟の新設に先立ち調査を行った。調査区は、二の丸北端を画する堀にあたる場所と考えられたが、推定を裏付けるように堀の北辺が検出された。この結果から、二の丸北辺部分について現地形と古絵図の対比がより正確にできるようになった(第 2 章 - 3)。

これらの本調査のほかに、文学部心理学動物実験・飼育室(プレハブ)の設置にあたり立会 調査を実施した。工事による掘り下げは30~60cmで、大学・米軍による盛土内にとどまるため、 本調査は行わなかった。

表 1 1986年度調査概要表

Tab. 1 Excavations on the campus in the fiscal year 1986

調査の種類	調査地点	原 因	調査期間	面積	時期
本 調 査	仙台城二の丸跡第7地点(NM7)	記念講堂前庭植樹	3/26~4/16	56 m²	近世
	仙台城二の丸跡第8地点(NM8)	教養部文科系教官棟新築	6/2~8/9	355 m²	近世
試掘調査	青葉山地区工学部情報工学科	工学部情報工学科実験研究棟	10/ 3~11/12	87 m²	
立会調査	仙台城二の丸跡心理学動物実験室地点	文学部心理学動物実験飼育室	3 / 9	10.5m²	_



#### (2) 青葉山地区の調査

当地区では、工学部情報工学科実験研究棟新営に伴う試掘調査のみである。1986年10月3日 ~11月12日の約1ヶ月間、87㎡について調査を行った。一部は礫層まで掘り下げたが(深さ約2.5m)、結局、遺構や遺物は検出されなかった。しかし、調査区は削平を受けていたものの愛島軽石層(約6~8万年前)より下位の堆積状態は良好で、青葉山B地点で検出された前期旧石器の包含層も確認された。青葉山地区では今後もこうした試掘調査を継続していく計画である。なお、当地点では、建設予定の全域を対象とした本調査は実施していない。

#### 3. この他の調査班の活動

1986年度調査の第7地点・第8地点の調査は、いずれも限定された範囲内での調査であったこともあり、現地説明会などは行っていない。そのため、第8地点の調査成果を中心に、『東北大学学報』第1182号に「仙台城二の丸跡の調査(その4)」を寄稿し、調査の成果を広く学内の方々に知っていただくように努めた。

(佐久間光平)

## 第11章 川内地区(仙台城二の丸跡)の調査

#### 1. 川内地区の立地と歴史および1985年度までの調査

東北大学文系 4 学部、記念講堂、教養部などが置かれている現在の川内地区は、藩政時代の 仙台城二の丸跡、周辺の武家屋敷跡などに相当する。

仙台城は、仙台市街地の西方、広瀬川を渡った、通称青葉山の東端に位置している(図1)。 本丸は、三方(北・東・南)を広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた海抜115~140mの急崖上に立地 しており、また、北側の二の丸、北東の三の丸もそれぞれ海抜61~78m、40mの階段状の河岸 段丘面上にあり、自然地形を巧みに利用した配置となっている(奥津1967)。この中で東北大学

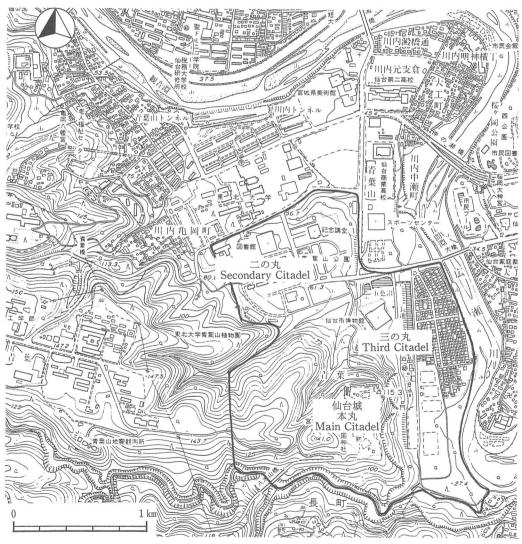


図2 仙台城と二の丸の位置

Fig. 2 Distribution of Sendai Castle

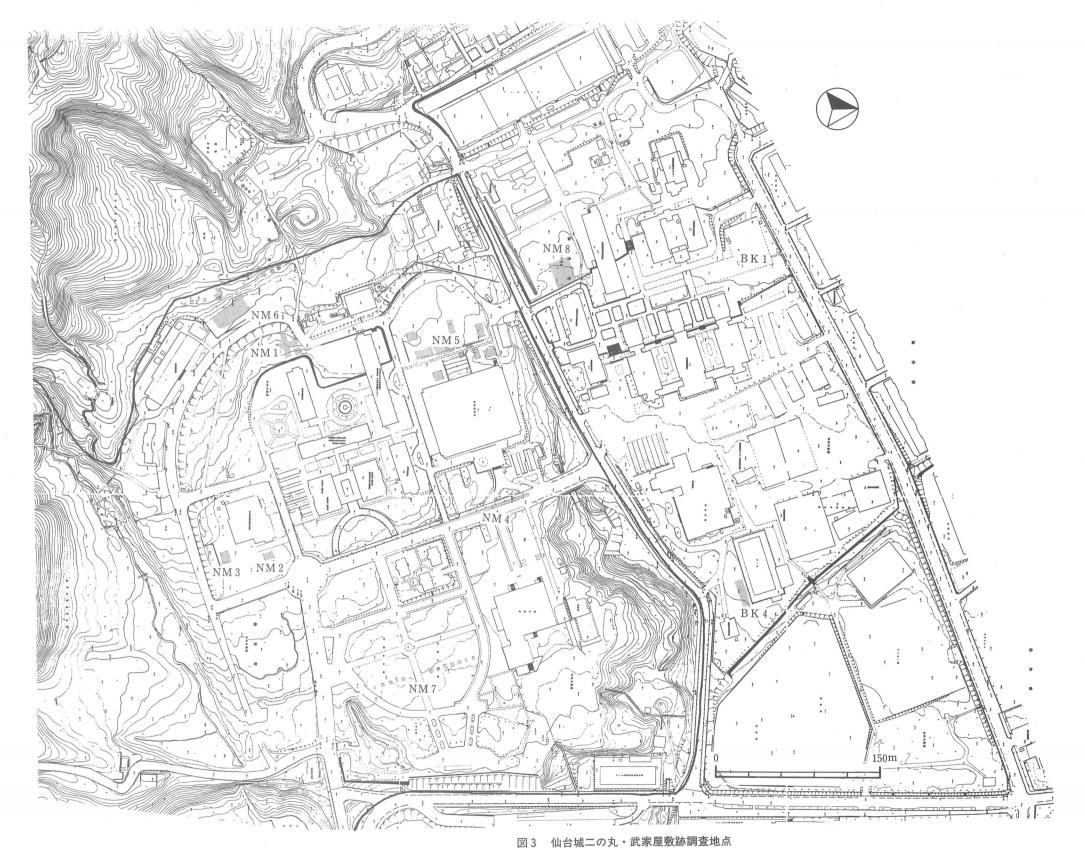


Fig. 3 Location of excavations until 1987 at Ninomaru (NM i.e. Secondary Citadel) and samurai residence (BK)

構内の二の丸は、東方を蛇行する広瀬川に向かって緩やかに傾斜する上町段丘上(武蔵野面相当)に位置する(図2)。

仙台城は、17世紀初め伊達政宗によって築城が始まり本丸部分が完成されるが、幕藩体制の安定とともにその山城的な立地は何かと不便になり、2代藩主忠宗は、寛永15年(1938年)、その麓(川内;現東北大学構内)において二の丸の造営を始める。これ以前、当地には政宗四男宗泰(のちの岩出山領主)の屋敷、その北隣には長女五郎八姫の居住する「西屋敷」が置かれていたことが知られている。この地に二の丸が完成して後、仙台藩の政治・諸儀式の中心はここに移され、さらに2代藩主以降その居館ともなる。その後、二の丸は配置・構造上にいくつかの変遷を経ながらも、事実上幕末まで仙台城の中枢として機能していく(仙台市教育委員会1967)。

版籍奉還の明治2年(1869年)には勤政庁が置かれ、明治4年(1871年)の廃藩置県後は、仙台城が明治政府・兵部省の管轄下に移るとともに東北鎮台(後に仙台鎮台と改む)が置かれる。この頃、本丸の建物群は取り壊されるが、二の丸の建物群は依然として残っている。しかし、この二の丸建物も明治15年(1882年)の火災によってことごとく焼失してしまう。その後、当地には陸軍第二師団が置かれ、戦後は米軍の駐留地となる。そして、昭和32年(1957年)、米軍より返還されてのち東北大学がこの川内地区に移転してくるのである。

仙台城二の丸・武家屋敷跡である川内地区の発掘調査は、仙台市教育委員会、東北大学考古学研究室によって小規模の面積が行われたことがあるが、組織的・継続的に行われるのは、東北大学に埋蔵文化財調査委員会がおかれる1983年度以降のことである。委員会による川内地区のこれまでの発掘調査は6地点を数える。この中で特に、二の丸中心の小広間の近くを調査した第2地点では、礎石建物跡が発見され、良好な保存状況と遺構の重要性から調査後は保存されることになった。また、その後、二の丸の南外郭(第3地点)、北東部外郭(第4地点)、西外郭(第6地点)にかかわる遺構が検出されており、現在の地形上で二の丸の範囲がほぼ推定できるようになった。さらに第5地点の試掘調査では、中奥の一角にあたる遺構群を確認している。

#### 2. 二の丸跡第7次調査地点(NM7)の調査

#### (1) 調査地点の位置

第7地点は、川内記念講堂前庭のほぼ中央部に位置し、芝地として整備されていた場所である(図4)。

この地点は、厳密には二の丸の範囲外で、二の丸の東側に隣接する区域になる。具体的には、二の丸の表玄関たる「詰の門」の前面に位置する「蔵屋敷」、のちの「勘定方」の屋敷が置かれた区域である。現在推定される詰の門の位置から考えれば、蔵屋敷(勘定方)のなかでも最西端にあたり、享和二年之御家作御絵図(1802年)にみられる南北に展開する「七十間御兵具蔵」の付近と推定される。この長大な蔵は元禄年間の絵図にも描かれている。さらに時代を遡って、二の丸造営間もない頃の様相を伝える正保二・三年図(1645・46年)では、この近辺には蔵屋敷の西端を画する塀が認められる。つまり、第7地点は、二の丸時代には一貫して蔵屋敷「勘定方」の西端にあたり、塀あるいは蔵が置かれていた区域とみることができる。

#### (2) 調査にいたる経緯

川内記念講堂前庭(南側)の整備に伴い植樹を行うことになった。事前に当地点の江戸時代の遺構面までの深さを確認したところ、浅いところは20cm~30cm程度であった。植樹の際の工事深度、盛土などの対応が協議されたが、遺構面の深さ以上の工事を行う植樹は、ケヤキ12本分であった。そのため、この植樹の区域のみを対象として調査を実施することになった。

#### (3) 調査方法と経過

植樹は、南北方向に約7 m間隔で12地点で行われる計画であったので、この地点にあわせて  $2 \, \text{m} \times 2 \, \text{m}$ のグリッドを12ヶ所設定した(図5)。南から北へ1区~12区とグリッド名を付した。 遺構が確認された場合には、面積を拡張したグリッドもある。調査深度は、各グリッドによって異なり、 $40 \, \text{cm} \sim 110 \, \text{cm}$ である。深さ $30 \sim 40 \, \text{cm}$ 程度で地山面になるグリッドもあったが、層の堆積状態を把握するため1区のみはさらに掘り下げ、礫層まで調査を行った。1 m以上掘り下げても盛土・整地層が続くグリッドもある。これらは途中で調査を終了した。なお、12区は、1 m以上の深さまで撹乱が及んでいることが判明したので、それ以下の調査は行わなかった。

#### (4) 層序

各グリッドによって層序が異なる。整地層、盛土層、遺構埋土が複雑に分布しているためであるが、概ね図6のような対応関係になるとみられる。1区~7区の3層、8区~10区のIV~VII層が、江戸期~明治初頭頃の整地層と推定される。1区・5区では、整地層下に江戸期の造成工事以前の旧地表土と考えられる黒褐色土も確認された。

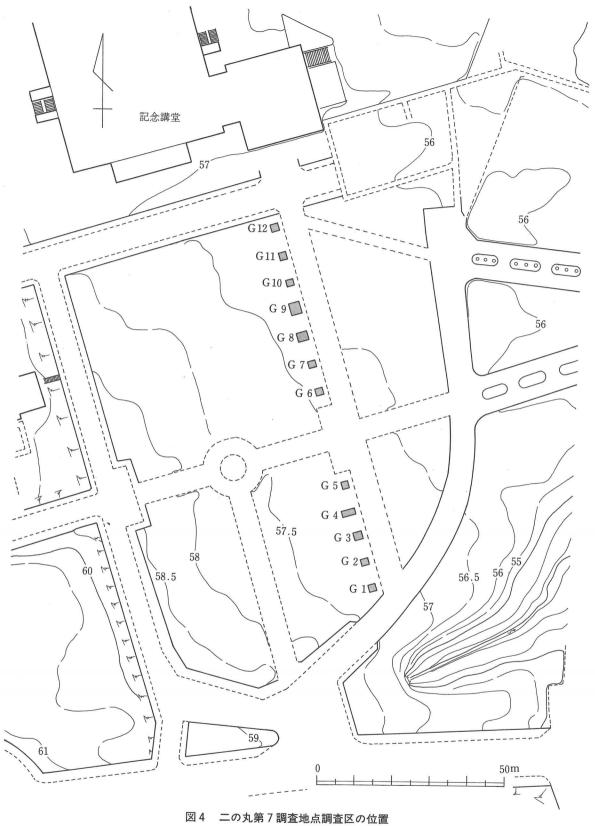


Fig. 4 Location of NM 7 NM 7 i.e. Location 7 of *Ninomaru* (Secondary Citadel)

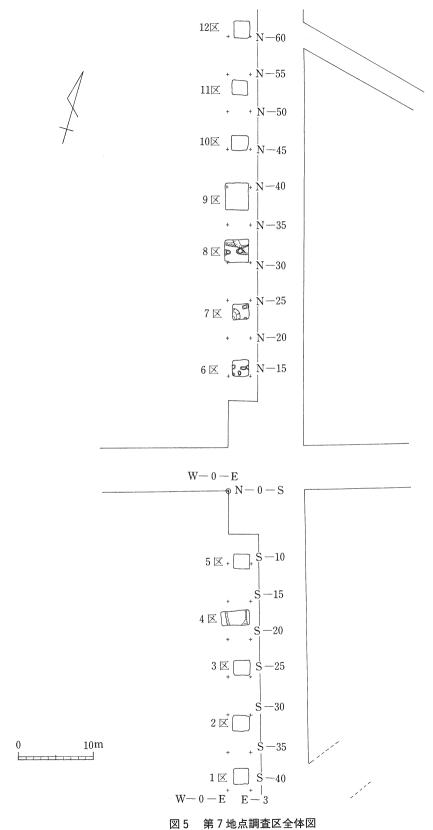


Fig. 5 Distribution of excavations

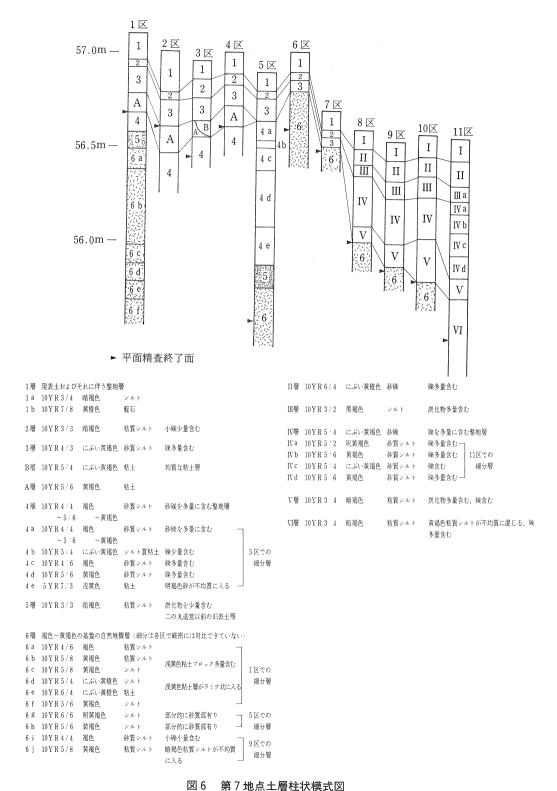


Fig. 6 Schematized profiles of NM 7

#### (5) 遺構と遺物

#### ① 遺構

溝、柱穴などが検出されている。しかし、調査区がそれぞれ狭く離れているため、検出された遺構の性格・構造はつかみきれない。

#### 溝

4 区では 3 層下で南北方向の 1 号溝が検出された(図 9)。幅2.7m、深さ0.6mをはかる。南の 3 区、北の 5 区ではこの溝の続きは検出されていないので、1 号溝は鈎型に屈曲するのであるうか。

8区の北側に 2 号溝の肩の一部が検出された(図11)。地山面確認。ビット 5 に切られる。深さは約 $60\sim70$ cmである。 9 区・10区のVI層以下、11区のIX層以下の整地層はこの溝の埋土の可能性がある。この場合には、ちょうど 8 区付近で鈎型にまがる南北方向の溝か、あるいは幅の広い東西方向の溝とみることができる。

#### 掘立柱建物跡

6 区  $\sim 8$  区 の 地山面 で 掘立 柱建物 が 確認 された (図 7)。 桁 行き が 8 間以上の 南北棟 になる だろう。 1 間は 6 尺 3 寸(約 190 cm)、 柱穴は 確認 できなかった。 2 号溝 との 時間 的な 関係 は 不明 である。

#### その他

8 区のピット 1 は、瓦溜めともいえる、瓦が多量に含まれる深さ50~60cmの楕円形のピットである(図11)。また、 3 層、IV層の整地層を中心として瓦の出土が多かった。特に、 2 区、 3 区、 9 区、10区では、人頭大の礫とともに瓦が集積していた(図 8 ・ 9 ・ 12)。

(佐久間光平)

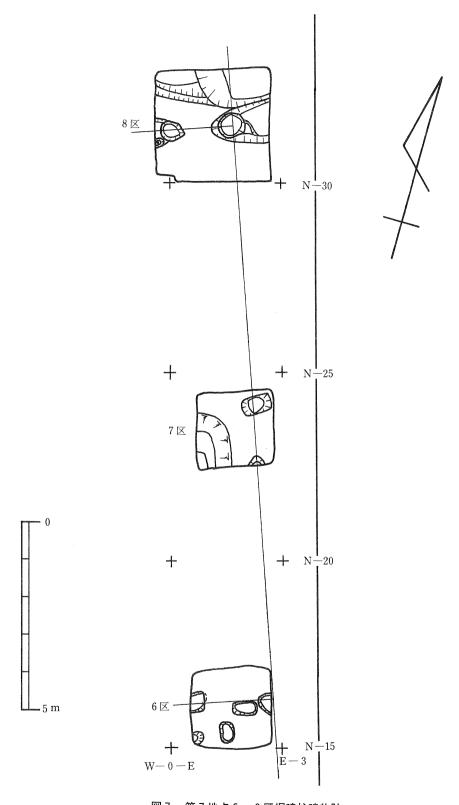
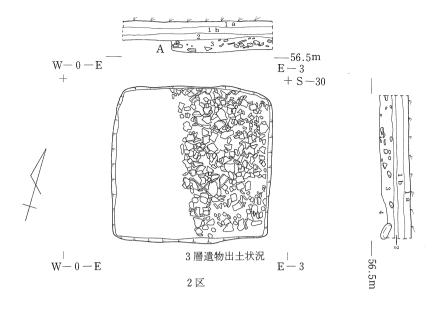


図7 第7地点6~8区掘建柱建物跡 Fig. 7 Post holes of building at Grid 6,7 and 8, NM 7



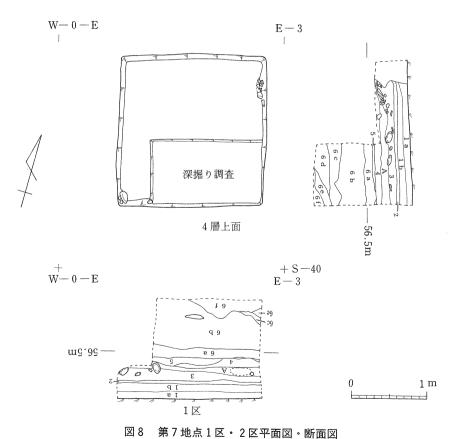
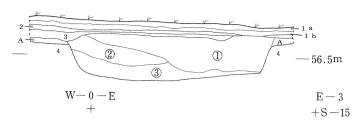
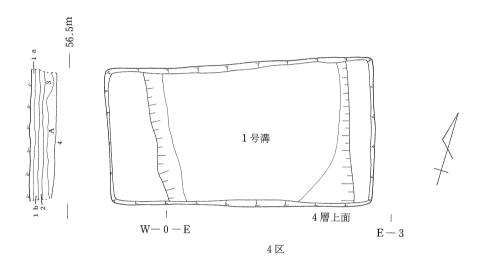


Fig. 8 Plans and cross sections of Grid 1 and 2 at NM 7



- ① 10 Y R % 黄褐色 砂礫を多量に含む
- ② 10 Y R % 黄褐色 砂 小礫・炭化物少量含む
- ③ 10 Y R % 黄褐色 砂②よりやや暗色小礫・炭化物少量含む



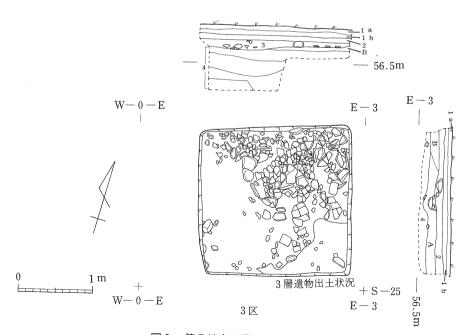


図9 第7地点3区・4区平面図・断面図 Fig.9 Plans and cross sections of Grid 3 and 4 at NM7

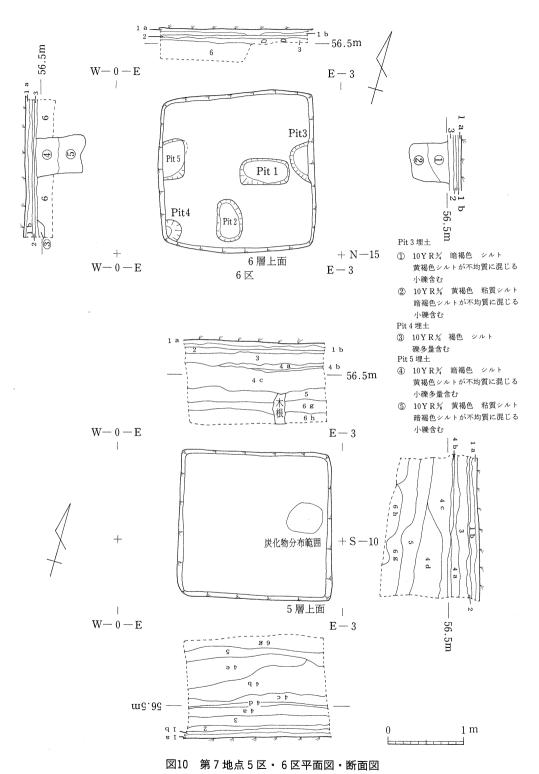


Fig. 10 Plans and cross sections of Grid 5 and 6 at NM 7  $\,$ 

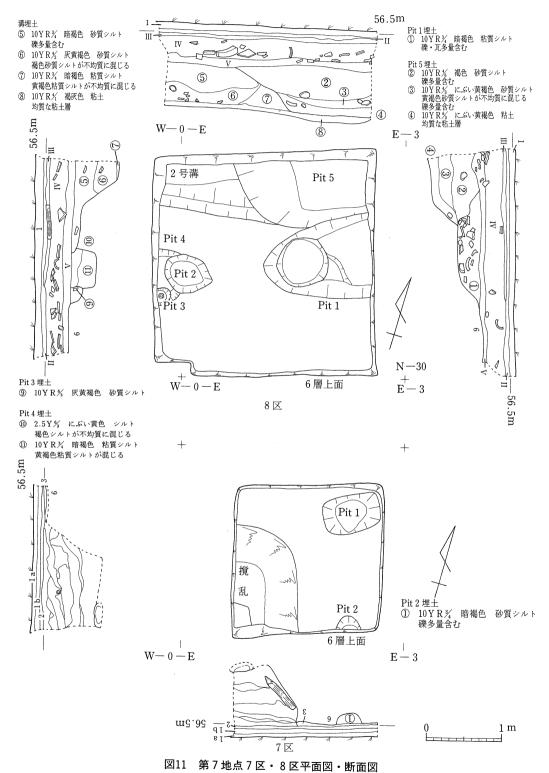


Fig. 11 Plans and cross sections of Grid 7 and 8 at NM 7

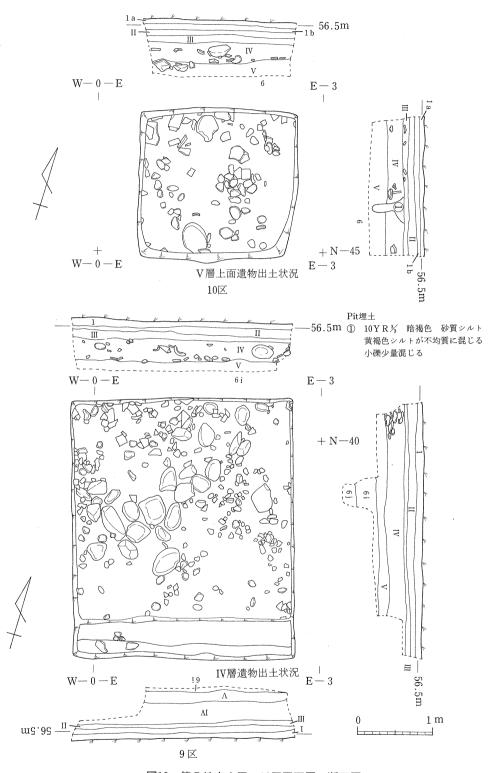


図12 第7地点9区・10区平面図・断面図 Fig. 12 Plans and cross sections of Grid 9 and 10 at NM 7

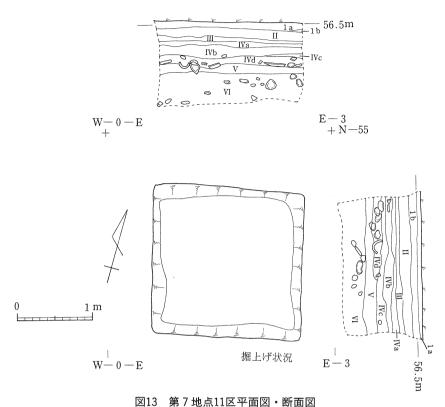


Fig. 13 Plan and cross sections of Grid 11 at NM 7

## 2 遺物

当地点出土の遺物の種類・数量は、表  $2 \cdot 4 \cdot 12$ に示した。全般に、 $1 \times 7 \times 7 \times 3$  層、 $8 \times 10 \times 10$  図の $1 \times 10 \times 10$  を地層を中心に遺物が出土している。特に、瓦がこれらの整地層に多く含まれる。これは、付近の建造物が廃絶され、整地されるとともに瓦がまとめて捨てられたことを示唆するのであろう。陶磁器もおもにこれらの整地層から出土している。瓦・陶磁器以外は目だった遺物はない。

(佐久間光平)

## A. 陶磁器

接合作業後の総破片数は、1577点を数えるが、資料のほとんどは細片であり、全体形を把握できるものはわずかである。破片も含めて観察すると、時期的には、江戸期から昭和初めまでのものがみられるが、多くは幕末前後である。出土状況は、8~10区のII~V層に集中して出土している。層位別に見ると、II・III層の資料では、磁器は瀬戸や平清水等の東北産と思われるものが、肥前産よりやや多くなる。陶器は、そのほとんどが大堀相馬・堤などの東北産で占

められる。また、第二師団で使用されたと思われるものも多く、染付はコバルトによるものが多い。一方、IV・V層では、磁器は瀬戸・東北産と思われるものより肥前産の占める割合が高くなる。染付は呉須によるものがほとんどで、コバルトによるものは少ない。陶器は、II・III層と同じく東北産で占められる。V層以下では、江戸期の肥前・大堀相馬産などで占められるが、出土数はきわめて少ない。各層を通じて、全体的な器種構成の大きな変化は認められない。用途別では、碗・皿・土瓶類などの食器類が大半を占め、擂鉢・焙烙などの台所製品の数は少ない。それ以外の火入・香炉・灯明皿などや、水滴などもわずかであった。ここでは比較的特徴の明かな資料について示す。

#### 磁器 (図14)

1~4は、コバルトによるやや盛り上がった濃い染付がなされる。これらは、胎土の光沢が強く、肥前以外の産地が考えられる。5は幕末前後の平清水の隅切小皿で、型抜きで卍崩文が施される。6は18世紀後半以降の肥前産の皿で、山水文が施される。7は肥前産の飯茶碗で、見込みに鷺文がある。8は角形の水滴で型押しで菊花文が施される。9は山に武田菱文の飯茶碗で平清水産。この山に武田菱文の飯茶碗は、二の丸跡第2地点で同様のものが出土している(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985)。また第2地点では、同じく山に武田菱文を施した皿も多く出土しており、二の丸跡出土陶磁器の特徴の一つであるが、今のところ産地を含め他の遺跡では出土例を見ない。10は徳利の胴部で、19世紀の肥前産で、器厚が薄い。11はよろけ縞文の飯茶碗で平清水産。12は見込みに菊花文のある二重編目文の飯茶碗で、18世紀の肥前産。高台裏に変形した渦福文が施される。13は若松文の半筒型の猪口(小碗)で18世紀の肥前製品。陶器(図15)

14は灰釉の土瓶で、胴部二面に銅緑釉を流掛ける。胎土は薄い黄白色の緻密なもので、明治 以降の大堀相馬の製品である。15は大堀相馬の灰釉の飯茶碗で、口縁部の内外に鉄釉が横方向 に流掛けられる。16は緑灰色のやや厚い灰釉が掛けられた堤産の火入である。焼締は良く、底 部は無釉糸切りで粘土粒の三足が付く。見込みには火を受けた跡が残る。

## 炻器 (図15)

17は炻器の鉢で、明治以降のもので、第二師団が使用していたものであろう。

## 土師質・瓦質土器 (図15)

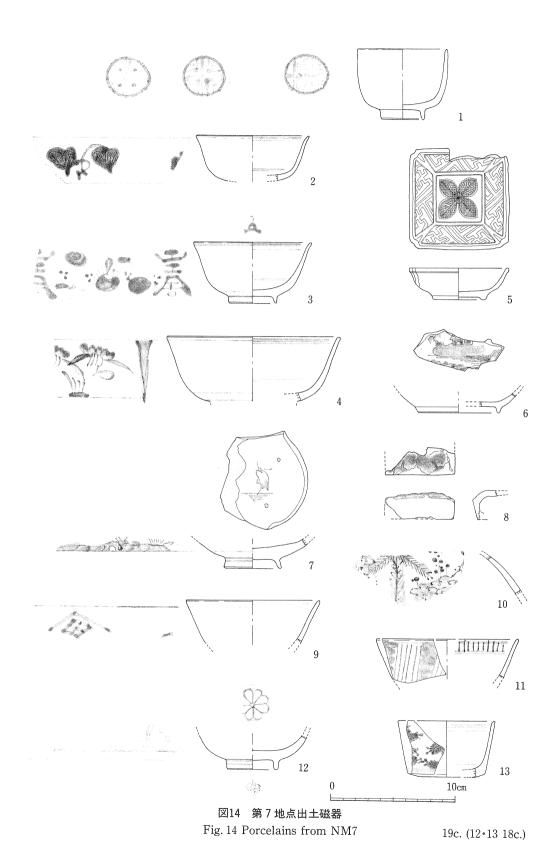
18・19は土師質の皿である。土師質土器は各区より多量に出土しているが、大部分が細片で、全体の特徴が判明するものは、この2個体しかない。20は、堤産の植木鉢と思われるもので、焼成最終段階で炭素を付着させてある。

(本田泰貴)

# 表 2 第 7 地点出土陶磁器集計表

Tab 2 Distribution of ceramics at NM7

									1 a	b. 2 Dis	str	ıbυ	iti(	on	01	ce	era	mı	cs	at	: IN IVI (				
1	111 1 346.44	Г			Į	数		꿆		***************************************				陶						器		炻 器	瓦質	土師質	合計
/	出土遺物		ħ	宛		Ш	碗皿	蓋	徳利	その他	碗	Ш	碗	翁	<b>本</b>	壷	甕	土瓶	徳	焙	その他				
		碗	小	湯	不	1	1		利				1	擂	そ			瓶	利	烙					
titi			型	湯呑	明		類				ĺ		類	鉢	0										
地区	出土地点		够								İ				他										
1		1		1	3	t	<u> </u>		$\vdash$		1							3							8
	2層					1			$\vdash$		_													不明 2	3
	攪乱	1					T																		1
2	1層	2					<b>†</b>		T		_														2
	2層	3		_							1							2				鉢類2			8
	瓦溜中			$\vdash$	1	1	†		T		<u> </u>		-	_				Ē						碗皿類2	3
3	1層	2		l		3			1					2				1			鉢類2			碗皿類3	13
	3層上面	1	_	<del>                                     </del>		1	$\vdash$		H		1		-					m	1		71,7,1			19 0 11111	3
	3層					1	$\vdash$						_	5			-								5
4					_	1	$\vdash$		$\vdash$		_	-										M. M		碗皿類1	1
	3層上面	$\vdash$		1		1	$\vdash$		1		-													19 0 1111/9 ( 1	1
	溝1埋土1層	1	<del>                                     </del>			-	<del>                                     </del>	<u> </u>	1					-							香炉 2		鉢 2	碗皿類13	18
	溝1埋土2層	1		$\vdash$	<del>                                     </del>	-	-	-	-		-	-			-		-		_		11/1/2		不明 2	碗皿類3	1
	溝1埋土	<del>                                     </del>	-	-		<del>                                     </del>	+	+	1-		-	1	-	2	-	H					火入1		1 71 6	碗皿類14	18
5	1層	$\vdash$	<del>                                     </del>	-	1	1	-	1	+		-	-	-		-		-				////1			P/G-III-75K14	1
J	2層	1	-	-	-	1	-	-	+		-	-	-		-		-			-		鉢類1			2
6	1層	5		-	<del>                                     </del>	-	2	-	+-		-	-	3	-	-			1	-			S4.13K T			11
U	ピット5	-	-	-		-	+-	-	+		-		1	-	-	-		1		-				不明3	
7	1層	11	-	-	-	-	-	-	-	不明1	-	-	-	-	-		-	8			<b>不服 1</b>	谷 新 0		小男う	24
1	工厂	11								41,64 I								0			不明 1 油差し 1	鉢類2			24
	2層上面	6	-	-	-	1	-	-	-	乌石91	-	-	-		-		-	1			旧左し1				-
	ピット	2		-	-	1	-	-	-	急須?1	-	-	-	-	2		-	1							9
0		-		<u> </u>	-		├	-	-		_	_	_												5
8		5		_	ļ	<u> </u>	-	-	-		_		-		_			6		_					11
	II層	11		<u> </u>	<u> </u>	<u> </u>	-	<u> </u>	_		_	L-					<u> </u>	2				A1 /77 - 0	AL a	and ma ster	13
	III層	92			1	1		1		不明1		5	28		6		1	54		1		鉢類13	鉢 3	碗皿類14	250
										鉢1												蓋物?2	不明 7	不明17	
	TYPE	- 00	<u> </u>		_	ļ	-	١.,	-	猪口2	-	-		_	-		-	0.1						role ma viert	-
	IV層	22						1		盃1 猪口1			4		3			24		2			不明2	碗皿類 4 不明 2	66
	V層	36	<u> </u>	1		5	1	1	<u> </u>	水滴 1	1	2	4	1				43		12	仏花器1		不明4	碗皿類8	145
		00		1		ľ		^		734/110 2	-	_		1				10		15	豆甕 2		1 55 1	不明23	110
	ピット1	1																						碗皿類1	2
	ピット5	T		<del> </del>			$\vdash$	<u> </u>			<u> </u>		<u> </u>											碗皿類1	1
	溝2埋土1層	1	T	<u> </u>		1	$^{\dagger}$	T	$\vdash$		-	1	_											碗皿類1	4
	溝2埋土2層	T-			<b>-</b>	H	t	H	1		-	_	_	_	-		-				不明			碗皿類 4	5
	不明	-	-	<u> </u>		-	<del>                                     </del>	<u> </u>	<u> </u>			-	-	1	-		-				1.20			P/GAIL/SK I	1
9	I層	_	<del>                                     </del>	-		<del>                                     </del>	6	<del> </del>	t					1					1	-	袋物 5	鉢類1		不明 4	19
,	II層		-	-	<u> </u>	-	۲	<del> </del>	$\vdash$		-	-		-	-		-	-		_	32700	247X I	不明 6	不明 1	7
	III層	64	+	-	<del> </del>	3	-	-	+	水滴1	-	19	-	-	-			36			蓋?1	鉢類 6	11.610	碗皿類4	156
	111/6	04				1 3	1			VIV(III) I		19						30			蓋 : 1   土鍋 1	針炔 0		碗皿類 4   不明21	136
	IV層	62	-	-	-	-	+-	-	+		-	9	-	3	1		-	50	1		火入1		不明1	不明 4	132
	V層 V層	4	+	-	2	-	+-		9	水滴1	-	4	-	1 3	-		-	17	1	1			炭櫃1	碗皿類 5	37
	1号溝VI層	1	-	-	<del>  -</del>	-	+-	-	+-	VIVIINI T	-	4	-	-	-		-	11		1			DC 184 T	19出血機 ひ	1
	授乱	6	-		-	-	-	-	+		-			-				7	-	-				7. BH 1	
10		19			0	-	-		-		-	1	-	1	-		-	-		-		◇上米四11	7.0P 1	不明1	14
ΤÜ	II層	132	-	-	2	-		-	-	鉢類 9	12		-	1	2	-	-	19		-	7. HB 4	鉢類11 唇針 1	不明1	碗皿類2	63
	11月	152				7			Ι'	郵短9	13	1					3	17			不明 4	擂鉢 1	鉢2	碗皿類11 不用97	248
	IVE	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-		-		-			-	-		不明14	不明27	10
	IV B	12		-		-	-	-	-	-1- intr 1	-		0	_	-		-	_	-	-			A+ 1	碗皿類2	10
	V層	12								水滴1			8		2			9	1	1			鉢1	碗皿類8	60
	VIE	-	-	-	├	-	+	-	-		-	-	-	-	-			_	-				不明3	不明14	<u> </u>
11	VIM VIM	١.	├-	_	-	-	-	-	┼	ļ	-	-	-		-	_	-	2		_		AL see:		碗皿類3	5
11		1		<u> </u>	_	<u> </u>	2	<u> </u>	ļ		_		ļ		_			L.		_		鉢類 4			7
	III層	6			_	_	-			01.5	_	_			_			2				鉢類 5		碗皿類1	14
	IV層	23			_	_		<u> </u>	_	鉢1	3		L	2	_			21				不明1		碗皿類2	53
	VI層	1	_								1												不明2	碗皿類8	12
	VIII層						3			猪口1	L	1				1		3					不明 4	碗皿類24	37
	IX層	2													1			1						碗皿類18	45
											L													不明23	
12	I層				L	L				レンゲ1	L														1
7.	明	3																1		1		鉢類 5		碗皿類3	13
1		547				27	13	3	9	24	,	44	-	18		1	-	331	4	18	23	54	55		1577



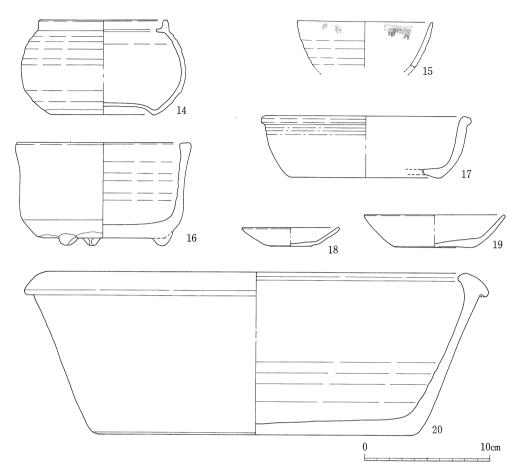


図15 第7地点出土陶器 Fig. 15 Ceramics from NM 7

19c.

表 3 第 7 地点出土陶磁器観察表

Tab. 3 Notes on ceramics at NM7

番	器形	出土場所	種	残	法		量	-4-	74-	Art-	釉	薬	T., .	T	T .	1	写真
号		山土物川	類	存	口径	底径	器高	文	様	等	種類	貫入	胎土	焼成	産地	時 期	図版
1	湯吞茶碗	8区V層	磁	L	72	33	56.5	染付団円文、	コバルト		石灰	X	やや密	良	不明	明治	6 - 3
2	小型碗	8区V層	磁	S	91	_	_	染付葵文?、	コバルト		石灰	×	やや密	やや良		19C	6 - 2
3	飯茶碗	8区V層	磁	M	95	36	49	染付宝珠喜文	で字文、コバ	ルト	石灰	×	やや密	やや良		19 C	6 - 4
4	飯茶碗	8区V層	磁	.S	139	_	_	染付菖蒲文?	、コバル	١	石灰	X	やや密		平清水	19 C	6 - 5
5	隅切小皿	8区V層	磁	L	80	42	25	型抜卍崩文			石灰	×	やや密		平清水	19C	6 - 1
6	小皿	9区III層	磁	S	-	66	-	染付楼閣山水	文、呉須		石灰	×	やや密	やや甘		18C後半~19C	6 - 8
7	飯茶碗	9区Ⅲ層	磁	S		46	_	染付山水文、見	. 込鷺文、呉多	1、目跡有	石灰	×	やや密	やや甘	肥前	18C後半~19C	6-6
8	水滴	9区V層	磁	S	-	_	_	染付型抜菊花	文、呉須'	?	石灰	X	普	普	瀬戸?	19C	6 - 7
9	飯茶碗	9区V層	磁	S	106		_	染付山に武田		Ą	石灰	X	密	良	平清水	幕末前後	6 - 9
10	徳利	10区II層		SS				染付若松梅文			石灰	×	やや粗	普	肥前	19 C	6 -12
11	飯茶碗	10区II層		SS	114		_	染付よろけ結			石灰	X	やや粗	やや良	平清水	幕末前後	6-11
	飯茶碗	10区II層	磁	S		40		染付二重網目文		に渦福文	石灰		普	やや良	肥前	18 C	6 -10
13	猪口?	11区畑層	磁	S	78	45		染付若松文、	呉須		石灰		普	やや甘	肥前	18 C	6 -13
15	土瓶	7区II層上		M	104	86		銅緑釉流掛			灰釉			普	大堀相馬	明治	6 -16
	飯茶碗	11区VI層		SS	109			鉄釉流掛			糠白	0	粗	やや良	大堀相馬	19 C	6 -14
16	火入	9区IV層		M	140	96		無文、目跡3	ケ所		灰釉			やや良	,	19 C	6 -17
17 18		11区1層	炻	S	168	120		無文			石灰		やや粗		瀬戸?	第二師団	6 -15
	ш.	8区V層		M	78	32		無文			_			やや甘		不明	6 -18
-	植木鉢	11区IX層	土	S	112	64		無文						やや甘		不明	6 -19
40	但小鈡	4区溝1埋1	瓦	M	372	252	130	無文			炭素	_	粗	やや甘	堤	19 C	6 -20

## B. 瓦

#### a:分布

発掘区全体の層序は概ね対応づけられるが(図6)、各調査区間の距離がかなりあり、廃棄の単位が異なる可能性が強いので、地区・層ごとに集計をした(表4)。これらの資料のうち、特に量が多く、出土状況から一括性が強いのは、8区IV層、同V層同ピット、4区溝出土の各資料である。ただし、第7地点の瓦は全体として8区V層出土の「山に武田菱」文の茶碗、III・IV層から出土する洋釘から、いずれも明治初期に廃棄されたものと考えられる。分析してみると、層・地区によって瓦の組成に若干の違いがあるが、いずれも平瓦と丸瓦が主体であり、以下では全体を一括して扱う。

### b:分析方法

瓦は一般に出土量が多く、その大半が平瓦の破片(近世では桟瓦の場合も)であることから、報告書作成上の時間などの制約もあり、軒丸瓦、軒平瓦など、特徴的なものだけを抽出して記述するにとどまる場合が多い。また、発掘時に採集資料の選択がなされる場合もある。目的や現実的問題から資料と分析方法の選択がなされるのは当然としても、できるだけまず発掘資料全体の何等かの記述をし、それと分析のために抽出した資料の関係がわかるのが望ましい。

近世の瓦は種類が多く、それぞれの種類について、時代、地域、個々の建築によって形態的にかなりの変異があることが予想される。実際これまで仙台城二の丸跡の調査では、地点ごとに瓦の種類にかなり違いがあり、これは、ある程度近隣にあった建物の瓦の違いを反映していると考えられる。

遺跡出土の瓦の量を種類ごとに記述する場合に問題なのは、資料の大半が破片であり、破片の特徴から種類を同定しなければならない点である。そのためには、各種類の完形品が基準資料として把握されてなければならない。しかし、仙台城二の丸では、どのような種類の瓦が用いられていたかを、これから調べなければならない段階にあり、最初から破片の特徴で細かい種類まで同定し、資料全体を記述することはできない。調査地点ごとに、異なった建物の近隣を発掘するわけだから、こうした状態は少なくとも当分続くと考えられる。また、存在し得る瓦の種類がリスト・アップされていたとしても、破片からはひとつの種類を特定できない場合がある。たとえば、軒丸瓦の瓦当部が失われた破片は、丸瓦の破片と識別困難である。

以上の点を踏まえて、作業員を使って、統一した基準でかつ迅速に資料全体を記述するために、図16のような整理の基準を用いた。まず、資料全体を破片の特徴から簡単に識別し得るいくつかの種類に大別する。この段階で大別した種類ごとの数量を記述する。次に、可能な物については平瓦、丸瓦等の種類のレベルに細別を進めるが、大量にあるものについては(今回の場合、平瓦類と丸瓦類)、基準を設けてある程度以上の大きさのものを抽出して観察し、細別を

# 表 4 第 7 地点出土瓦集計表

Tab. 6 Distribution of roof tiles at NM 7

						,							ĮĄ	皮片数・	重量	(単位kg	) の順に表	示]
地区	層遺構	平	瓦 類	# 1	瓦 類	軒平	Z Tr	紅	丸 瓦	栈	75		そ	の		他	I .	n
	10 24 117	i '	26 M	1 7.	-L 794	Ŧ1 1	PL	#1	<i>시</i> 교	100	瓦	輪違い	面	戸その	他	小 計	7 ^ !	明瓦
1区	1層	3	0.4	1										+	2	2 0.2	10	0.3
"	2 層	22	2.9	9 26	2.9	2	0.3		W.			-			2	2 0.0		2.6
"	撹乱	1	0.2	2 2	0.1							<u> </u>	-	-	+	D 0.0	5	0.2
2区	1層	3	0.5	5									<b>!</b>	_	+		9	0.2
"	2 層	7	1.0	13	1.1	1	0.03			1	0.2		<b>†</b>	-	+		149	4.5
"	瓦溜中	22	3.9	21	4.9			2	0.7					1	1		101	2.5
"	3層	502	82.€		28.6	4	1.1	4	0.5					4	10	14 1.2		17.6
3 区	1層	2	0.2	-	0.1			1	0.04						1	1 0.0	5 40	1.1
"	3層	402	72.5		48.7			13	4.0					1	5	6 1.0	577	25.5
"	5層	3	1.0		4.0												1	
4 🗵	1・2層	63	9.3		4.8 8.4			1	0.07				-		2	2 0.5		2.4
"	3層	49	7.6		4.8	1	0.4	3	0.6				_		1	1 0.0		4.2
"	2層溝埋土	43	7.7		3.6	1	0.4	2	0.0					+	-		186	7.9
"	溝埋土1層	156	29.5	+	26.2	2	0.2	7	0.8	1	0.04			3	27	30 4.4	84 144	6.7
"	溝埋土II	6	1.0	-	3.4			1	0.4	1	0.3			,	1	1 0.1	17	0.7
"	溝埋土III	2	0.3	-	0.07					<del>                                     </del>					+	2 0.1	6	0.7
5区	1層	2	0.5		0.04			1	0.2						+		21	0.8
"	2層	189	41.2		18.8	3	0.4	4	1.0								233	15.2
"	3層	113	24.7		12.2	2	1.7	13	4.0					1	1	2 0.4	48	2.6
6区	1層	3	0.5	+	0.9												29	1.2
"	pit 1			1	0.8					-								
7区	pit 2 埋土 1 層	5	0.9	3	0.1										1	1 0.2	4	0.1
//	2層上	2	0.9		0.1												29	1.4
"	3層	11	1.6		0.1									+	2	0 0.5	5	0.1
8区	II M	13	3.2		0.4			2	0.2							2 0.5	28	1.3
"	III層	24	3.7	45	3.4	1	0.05	1	0.1					-		1 0.0	117	4.2
"	IV層	721	257.2	194	56.6	6	1.9	14	11.4			69	1	-	2 1		480	24.0
"	V層	88	39.8	31	16.6			13	9.4			8		-	_	2 5.3	47	2.6
"	VI層	10	2.4	3	0.2										$\top$		6	0.3
"	pit 1埋土1	134	51.6	60	18.8	1	0.1	2	3.6			1			1	2 0.7	122	6.1
"	pit 2埋土1	1	0.2					2	0.6								2	0.1
"	溝1埋土1	16	3.7	12	2.5				***************************************								15	0.9
"	溝1埋土2 II層1号溝内 pit 5	28	0.2 5.7	4	0.4		0.00		0.08						1		4	0.2
9 ⊠	I層 I 与海内 pit 3	3	0.8	13	0.6	1	0.02	1	0.07			1		1	1	3 0.7	31	1.8
"	II層	11	1.8	5	0.3									+	1	1 0 1	19	0.8
"	IIII	6	1.0	12	0.7									+	+-	1 0.1	32	1.5
	IV層	158	37.6	148	24.2	1	0.9	6	1.9	2	0.4	12		3	1 1	6 3.9	230	1.8
"	V層	5	2.6	8	2.8							15			_	2 0.9	18	0.5
	VI層 1 号溝上部	2	0.4	2	0.04									1	1		3	0.2
	VII層埋土	1	0.2														1	0.02
	VIII層	2	0.2	2	0.4												2	0.1
	その他撹乱ピット	2	0.5	5	0.6												6	0.2
	I 層	12 5	2.3	10	0.9									-	2	2 0.2	26	1.4
	III ME	59	0.7 19.7	43	0.3 8.1	3	1.6							-	_		25	0.7
	IV層	20	5.0	21	1.8	აა	1.0	1	0.06			1			-	4 1.2	60	2.4
	V層	39	10.3	41	8.0			1	0.05			1			-	2 0.3	52 34	2.2
	VI層	10	3.5	17	2.2			2	0.03					-	+	1 0.0	20	1.7
11区	I層	4	0.8	9	1.7										+-		11	0.9
	III層	2	0.3	1	0.2										1	1 0.1	3	0.3
	IV層	20	4.4	15	3.2	2	0.4						1	_		1 0.2	36	2.2
	VI層	54	11.4	65	10.1	1	0.8	3	1.51	1	0.5		]			1 0.07	54	4.0
	WIFE IVE	36	10.0	25	6.7	2	1.1	1	0.08	1	0.5	1				2 0.6	44	3.1
12区	IX層	76	18.3	37	7.0	1	0.03	3	0.2					4		1 0.1	82	5.0
FE.		9	1.9	3	0.04	11	0.2								1		4	0.3
不明	1 /8	36	10.0	23	3.4		-					10		-		0 0 0	5	0.2
不明と	表採	30	10.0	3	5.0	1	2.0	2	2.1			10	]	-	1 1		19	1.0
	ā†	3,268	812.0		363.0	36	13.2	106	44.0	7	1.9	104	34	12		1 0.6 8 66.0	4,131	190 70
完形平均		2,3		2.2			10.2	100	77.0		1.3	104	0.625	-	20	U UO.U	4,131	189.72
	- 平均重量	340		161							-	-	0.020	+	+			
										***************************************								

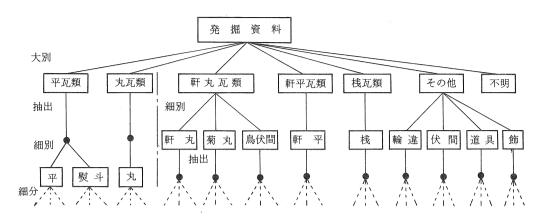


図16 瓦分類の手順

Fig. 16 Operation flow of roof tile analysis

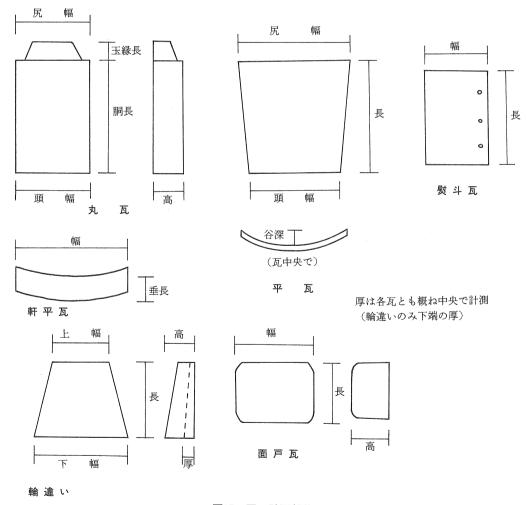


図17 瓦の計測部位

Fig. 17 Points of measurements on roof tiles

行う。細別は、各種類の固有な特徴および大別時の経験にもとづいた基準で分類する。もちろん最初から細分できれば、それに越したことはないが、細別不能な破片も多く、複雑な基準は作業員の間で混乱や不統一を生じるので、実際的な方法を採用した。

次に細別した資料の中から、ある程度以上の大きさの資料を抽出し、各種類内での大きさの変異の把握、および製作法上での分類が可能かどうかをみるため計測や細部の観察を行う(細別以前に抽出を行ったものは、それをそのまま計測・観察の対象とする)。瓦の場合、形態に部分的な変異が多いので、実際に細片まで細かく観察してみても、瓦全体の他の部分の特徴との組合せが摑めないので、まず、ある程度以上の大きさの資料を使って、分類の基準を作らなければならない。しかし、今回の第7地点のように結果として抽出できた資料、すなわちある程度以上の大きさの資料が少ないと、量的保証がないため、種類内での大きさや製作技法上の細かいグループ分けができない。結局、接合しない瓦の細かい破片は、あまり分析に使えないことになる。

### c:瓦の大別

次に、上述した分析方法における大別の基準を述べる。今回の分析の分類・名称は、軒巴瓦を考古学で一般的な軒丸瓦にした以外は、概ね坪井利弘1976『日本の瓦屋根』に準拠する(図18)。

## 軒丸瓦類

丸い瓦当部を持つ瓦の総称。鳥伏間、掛瓦、菊丸など、棟に使うものの破片も含む。直径90mm程度のものは軒桟瓦の瓦当なので、桟瓦類に分類する。

### 軒平瓦類

四角い瓦頭部を持つ瓦の総称。棟に 使う掛唐草や、軒桟瓦の丸い瓦当部が 失われたものも含まれ得る。

#### 丸.万.類

丸瓦と同じく、内面に布痕を伴う湾 曲度の強い胴部や玉縁を持つもの。軒 丸瓦類の瓦当の失われたもの、掛瓦、 輪違いなどの細片が含まれ得る。

数量が多いので、長さ・頭部幅・尻 部幅のいずれかが残っているものを抽 出した上で、種類ごとに細分する。今 回は「丸瓦」のみ抽出された。

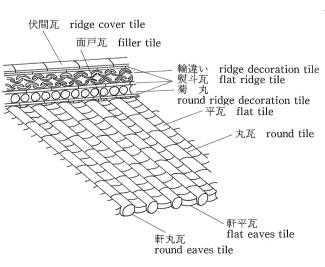


図18 瓦屋根復元模式図 Pl.18 Restored illustration of a roof at NM 7 (坪井 1976 図28より作製)

## 平瓦類

板状の部分を持つ瓦の破片の総称。平瓦、桟瓦類、熨斗瓦、軒平瓦類の瓦当部から外れた部分、装飾瓦の装飾から外れた部分などが含まれ得る。50mm未満の破片で他の項目に分類できる特徴のないものは、「平瓦類」に含まれる可能性が高いが、厳密を期して「不明」として扱う。

数量が多いので、長・幅いずれかの完全に残っているものを抽出した上で、形態的特徴から 細分した。当地点では平瓦と熨斗瓦の一種が区分できた。

### 桟瓦類

桟部分が識別できるもの。桟瓦葺きに使われる全体がS字状に波うつタイプと、塀桟瓦、棟 桟瓦など板状の桟の部分を張り付ける桟瓦含む。

### その他

熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、道具瓦類、装飾瓦類などで最初から細分できる特徴を備えたもの。 以上の大別作業の途中で、形態的特徴の他に、釘穴、刻印、櫛目、水切り溝の有無も確認した。次に、種類ごとに細分した上で、計測や細部の観察を行い、それぞれの種類の中での変異を分析する。胎土による分類も考えられるが、これには充分な基礎研究に基づく有効な観察基準をもって観察しなければ意味がないので、今回は行わなかった。

## d:各種類の特徴

### 軒丸瓦 (図19~22)

丸瓦部の完形品は3点のみなので、実際には菊丸と鳥伏間を除く軒丸瓦類を含むことになる。 瓦当部の周が4分の1以上残存しているものを抽出し、計測観察の対象とした。

紋様:九曜紋が最も多く、次いで三引両紋、巴紋となる。 8 区では、三引両紋はおもにIV層以上で、九曜紋はV層以下で出土する。他に 4 区の溝より桐紋が1 点出ている。それぞれの紋様についていくつかの笵があるようだが、同笵の認定は難しい。

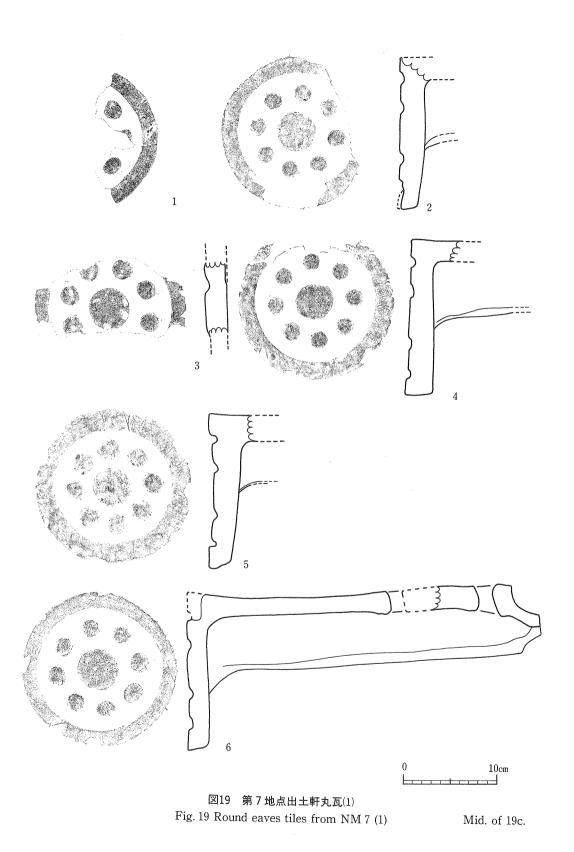
形態:瓦当部の直径は概ね $165mm \sim 175mm$ で、 5.5寸の瓦と考えられる。 5寸と考えられる一回り小さい瓦当も 2点みられる。文様ごとに直径に差は無い。周縁の幅は、三引両がやや狭い傾向がある。

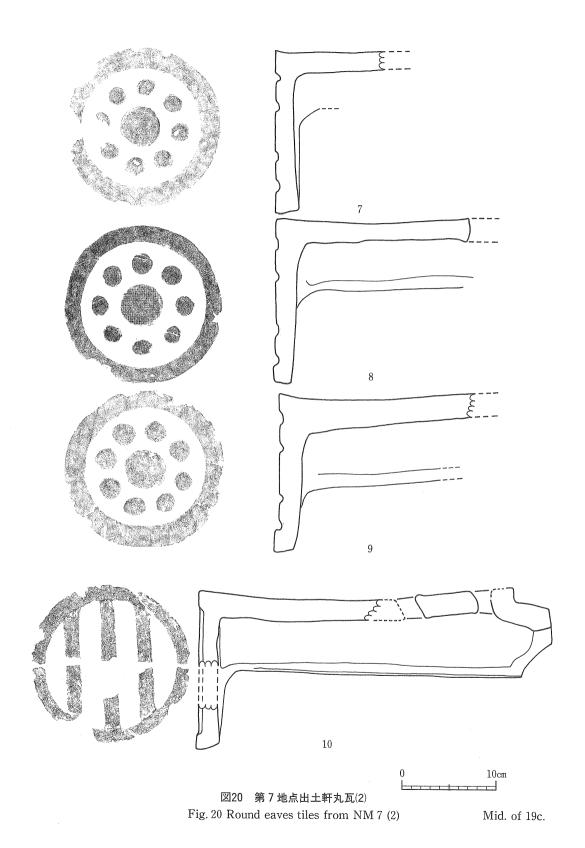
## 菊丸 (図21・22)

直径約120mmの瓦当で、大きさから菊丸と推定されるものが、 $2 \boxtimes 3$  層と $5 \boxtimes 3$  層に各2 点みられる(図 $21 \cdot 22 - 17 \sim 20$ )。瓦当部を欠いているが、大きさから菊丸の丸瓦部と推定されるものが $8 \boxtimes IV$  層より3 点出土している(図22 - 23)。同じく組棟に使われる輪違いと比べると量が非常に少ないので、輪違いと同じ屋根には使われなかった可能性もある。

#### 鳥伏間 (図22-22)

表採品が1点確認されている。





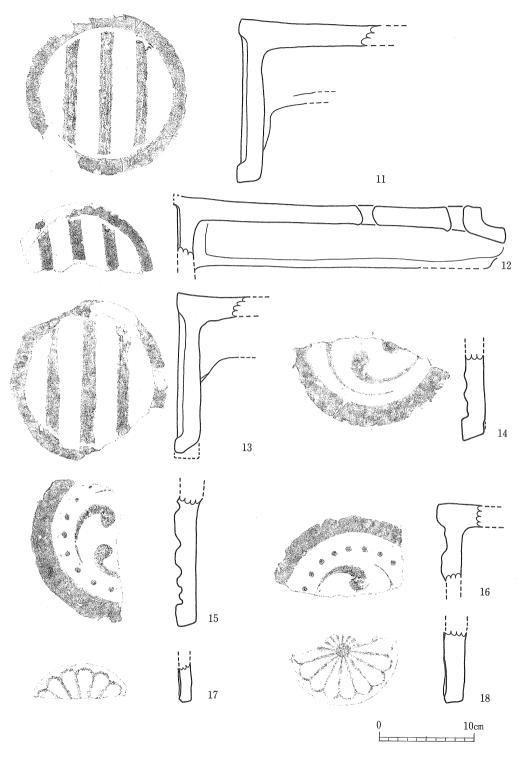


図21 第7地点出土軒丸瓦(3) Fig. 21 Round eaves tiles from NM 7 (3)

Mid. of 19c.

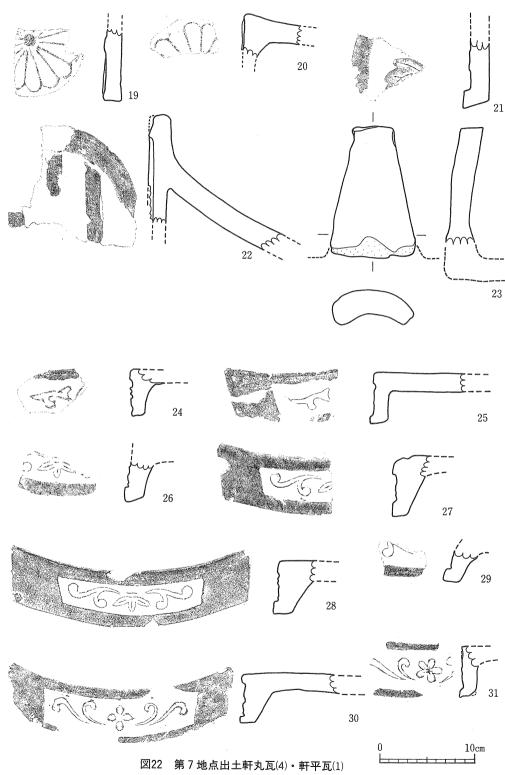


Fig. 22 Round eaves tiles and flat eaves tiles from NM 7  $\,$  Mid. of 19c.

#### 軒平瓦 (図22・23)

亙当部の模様から次の9種類が識別できた。

I 唐草+三枚笹;破片だが、唐草の形が、三枚笹を組合せた表採品の軒桟瓦(図38-98)、 仙台城三の丸出土の軒平瓦の文様と共通し、かつ笹文の一部が確認できる(図22-24・25)。

- II 唐草+雪持笹 (図22-26~29)。
- III 唐草+四弁花 (図22-30、図23-32)。
- IV 唐草+梅(図22-31、図23-33・34・36)。

V~VⅢ 細片のため、模様の全体形不明(図23-35・37・38・39)。

IX 菊+?;形態が他の軒平と異なる。2点有り、同笵である(図23-40・41)。

資料数が少なく、瓦が最も多い8区でも軒平瓦は9点のみである。したがって文様・形態と 出土地点・層との関係は論じられない。

表 5 第 7 地点出土軒丸瓦観察表

Tab. 5 Notes on round eaves tiles at NM 7 単位mm( )は復元値、平均値等は復元値を含む

図	文 様	地区	層遺構	径	周縁
1	九曜	5区	2 層	(148)	17
2	"	"	3層	160	20
3	"	"	"	161	17
4	"	8 ⊠	IV層	167	16
5	"	"	"	166	22
6	"	"	V層	166	20
7	"	"	"	171	22
8	"	"	"	170	18
9	"	"	pit 1,埋 1	170	22
10	三 引	"	IV層	(168)	16
11	"	"	"	175	18
12	"	"	"	(147)	11
13	"	11区	2 層	172	16
14	E	2区	3 層	(172)	23
15	巴+連珠	8区	IV層	(171)	25
16	"	"	V層	(174)	20
17	菊丸・菊	2区	3層	(114)	_
18	"	"	" .	(119)	_
19	"	5区	"	(121)	
20	"	"	"	(122)	_
21	桐	4区	溝埋1	(174)	19
22	鳥伏間・三引	4区	溝埋土	(172)	23
23		8区	IV層	_	_
	九曜・三引・巴の 軒丸瓦のみ		n m a x . m <u>i</u> n .	30 176 147 168.4	

表 6 第 7 地点出土軒平瓦観察表

Tab. 6 Notes on flat eaves tiles at NM 7

				車1火	111111
図	文 様 型	地区	層遺構	垂 長	幅
24	I	5 ⊠	2 層	52	
25	"	8区	IV層	53	_
26	II	3 ⊠	3 層	windows	_
27	"	4 ⊠	"	62	_
28	"	10⊠	III層	58	254
29	VIII	3 ⊠	3 層	_	-
30	III	9区	IV層	53	239
31	IV .	5区	2 層	52	_
32	III	11区	VIII層	54	_
33	IV	5区	2 層	54	
34	"	"	3層	52	_
35	V	8区	IV層	48	_
36	IV	11区	VI層	54	_
37	VI	4区	溝1埋土1層	_	_
38	V	1区	2層	_	
39	VII	8区	IV層	53	_
40	IX	2区	3層	_	_
41	"	"	"		_

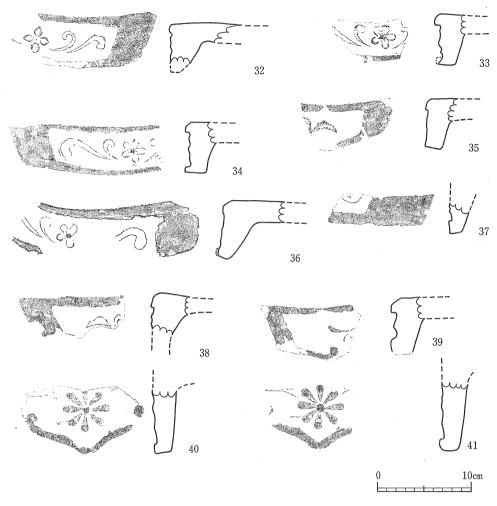


図23 第7地点出土軒平瓦(2) Fig. 23 Flat eaves tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.

## 丸瓦 (図24~27)

形態:胴部長は、おおよそ255mmから280mmまで分布し、平瓦よりやや短いのがわかる。他の部位の計測値及び相互の関係を比較しても、さらに細かいタイプは見いだせない。

製作・調整痕:全ての瓦に基本的に共通した特徴がみられる。すなわち、表面胴部は縦方向のヘラナデ、胴部両端と玉縁部はヨコナデである。内面は横方向のコビキ(粘土板の切り離し痕)に、型起こしの際についた布痕が重なる(図版 $18-5\sim8$ )。これに加えて内面に型から離す際についたと推定される紐痕と棒痕が見られるものがある。

## 平瓦 (図28~30)

形態:幅が分かる資料が少ないので、長さで比較してみると、おおよそ $265 \, \mathrm{mm}$ から $300 \, \mathrm{mm}$ (9 寸から $1 \, \mathrm{R}$ )まで連続して分布している。 $1 \, \mathrm{点}$ のみ $237 \, \mathrm{mm}$ (8 寸相当)のものがある。長幅比に強い規格性は見られない。 $59 \cdot 60$ は谷に使う瓦だろうか。形態と出土地点・層との関係は特に見い出せない。

製作・調整痕:表面は主に横方向のナデで、側辺近くは縦方向のナデとなる。裏面は無調整が多いが、軽いナデがある場合もある(図版18-9)。

## 熨斗瓦 (図30·31)

「平瓦類」の中から前述した基準で抽出したものの中に15点確認した。いずれも8区出土である。

形態:湾曲が無く、1辺に釘穴が並ぶことから、熨斗瓦の一種と考えた。釘穴の間隔と配置に2タイプあるようである。釘が残存する例もある。

製作・調整痕跡:表面は方向が一定しないが、縦もしくは横方向のナデで、裏面は無調整(図版18-10)。

## 桟瓦

4区より、板状の貼り付け桟の破片1点が出ている。また水切り溝の付いた破片が8・9・10区のIV層、10区のI 層より各1点出土している。第6地点の例(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 pp. 30~36)からすると、塀桟瓦の可能性がある。

表 7 第 7 地点出土丸瓦観察表 Tab. 7 Notes on round roof tiles at NM7

単位mm·kg

Ø	地区	層遺構	胴 長	玉樑長	頭幅	尻 幅	高さ	厚さ	重き
42	8区	IV層	263	34	144	161	76	22	_
43	"	"	269	24	149	153	74	19	2.20
44	"	"	272	33	_	159	62	19	_
45	"	"	259	23	_	151	70	25	_
46	"	V層	259	21		151	75	22	_
47	"	Pit 1	_	48		167	79	22	_
48	"	IV層	288	34	_	160	78	25	_
49	"	V層	269	39	166	165	77	24	2.30
		n	24	38	10	30	26	49	2
		max.	288	48	166	167	83	28	2.30
		min.	255	21	140	140	62	17	2.20
		x	265.5	32.7	149.4	155.2	73.3	22.1	2.25
		s	8.1	6.4	7.8	7.2	5.8	2.6	_

表 8 第 7 地点出土平瓦観察表

Tab. 8 Notes on flat roof tiles at NM7

単位mm・kg ( ) は復元値 平均値等は復元値を含む

図	地区	層遺構	長	頭幅	尻 幅	谷 深	厚	重	備考
50	8 🗷	Pit 1 埋 1	286	248	270	42	20	3.10	
51	"	Pit 1	276	220	(230)	_	22	_	
52	"	"	281	245	_	_	23		
53	"	IV層	285	(239)	(254)	-	19	_	
54	"	"	302	_	_	-	21	_	
55	"	V層	237	200	(212)	26	18	1.67	
56	"	"	(297)	(229)	(258)	35	17	_	
57	"	"	277	(222)	242	27	20	-	
58	"	"	266	(226)	261	_	24	_	
59	"	IV層			_		21	_	谷瓦?
60	"	"	_	_		_	22	_	"
							The second contract of		L
		n	28	8	9	4	33	2	
		max.	302	248	270	42	26	3.10	
		min.	237	200	(212)	26	15	1.67	
		ž	280.0	228.6	245.4	32.5	20.6	2.4	
		S	14.1	15.5	18.2	7.5	2.2	_	

表 9 第 7 地点出土熨斗瓦観察表 Tab. 9 Notes on ridge tiles at NM7

単位mm

	*******							
図	地区	壓	遺	構	長	幅	厚	釘穴タイプ
61	8区	III層			_	160	20	1
62	"	IV層			242	160	20	1
63	"	"			244	167	19	1
64	"	"			243	157	23	1
65	10区	III層			_	156	21	1
66	8区	Pit 1			258	177	20	1
67	不明	不明			_	155	20	2
								***************************************
		n			4	15	15	
		max.			258	176	24	
		min.			242	153	19	
		x			246.8	162.5	21.0	
		s			7.5	7.0	1.4	

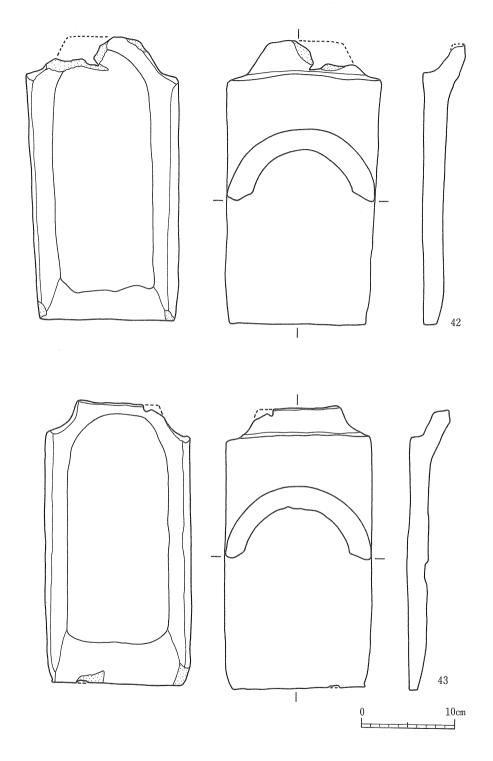


図24 第7地点出土丸瓦(1) Fig. 24 Round roof tiles from NM 7 (1)

Mid. of 19c.

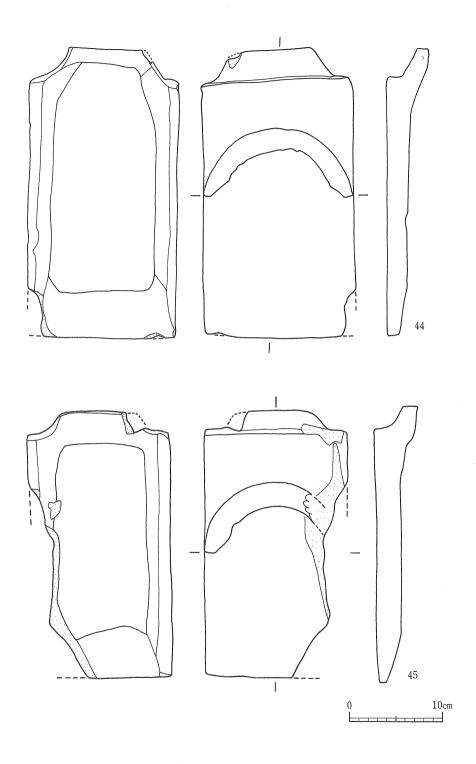


図25 第7地点出土丸瓦(2) Fig. 25 Round roof tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.

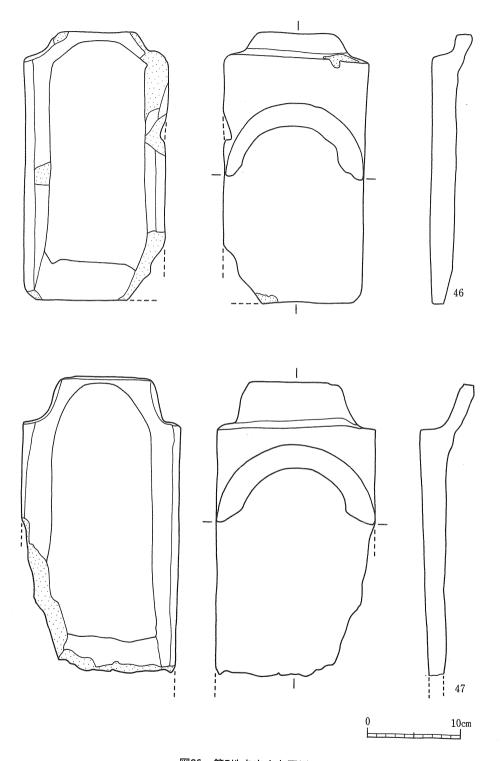


図26 第7地点出土丸瓦(3) Fig. 26 Round roof tiles from NM 7 (3)

Mid. of 19c.

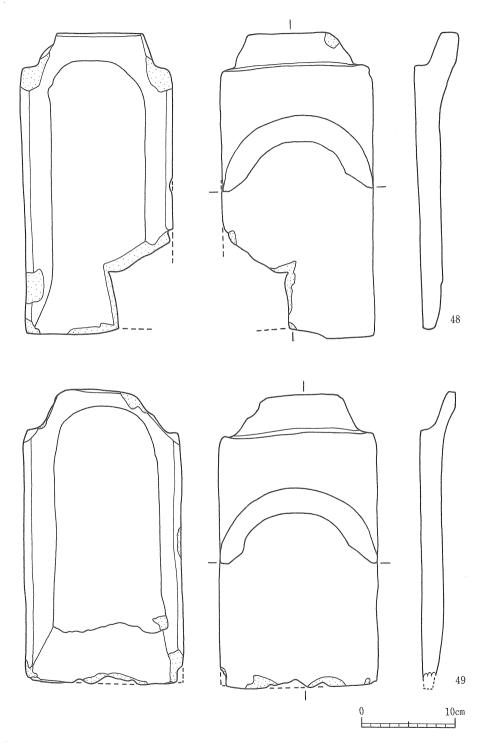


図27 第7地点出土丸瓦(4) Fig. 27 Round roof tiles from NM 7 (4)

Mid. of 19c.

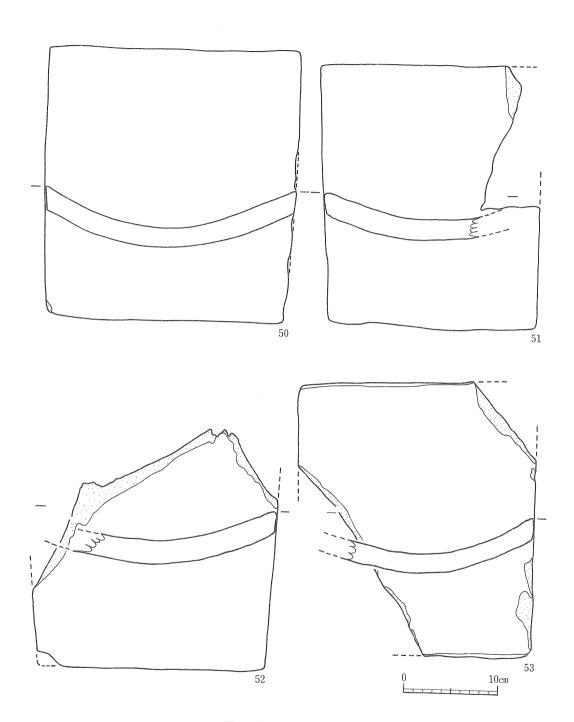


図28 第7地点出土平瓦(1) Fig. 28 Flat roof tiles from NM 7 (1)

Mid. of 19c.

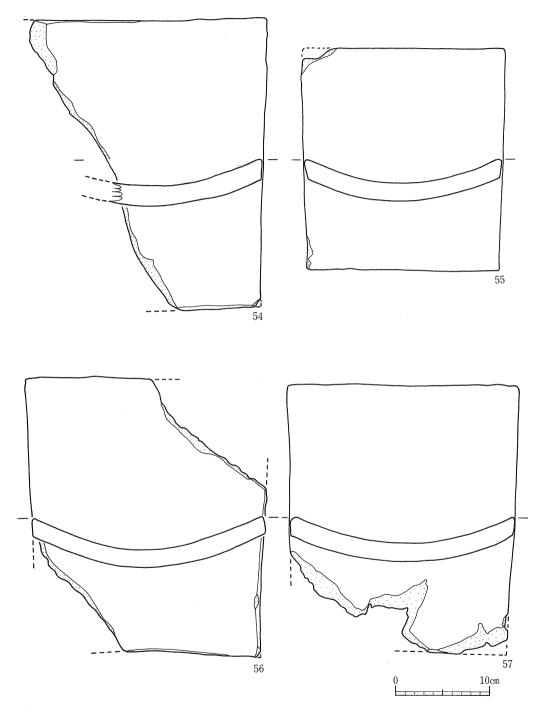


図29 第7地点出土平瓦(2) Fig. 29 Flat roof tiles from NM 7 (2)

Mid. of 19c.

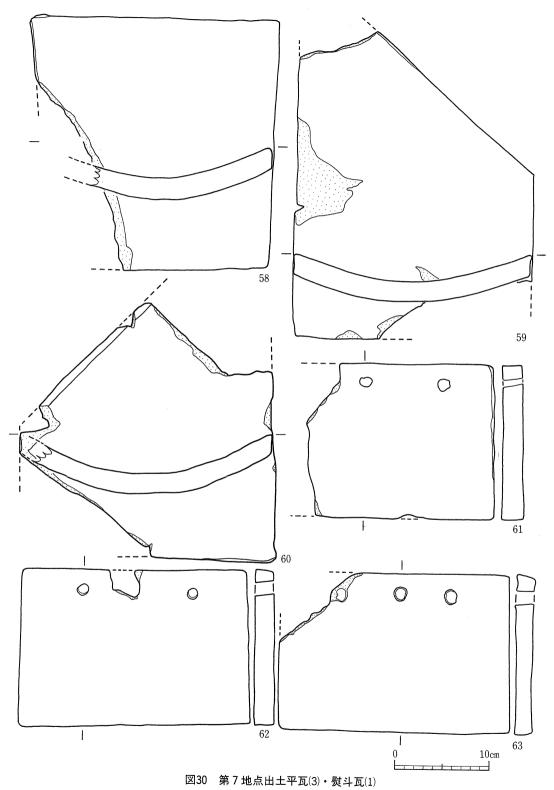
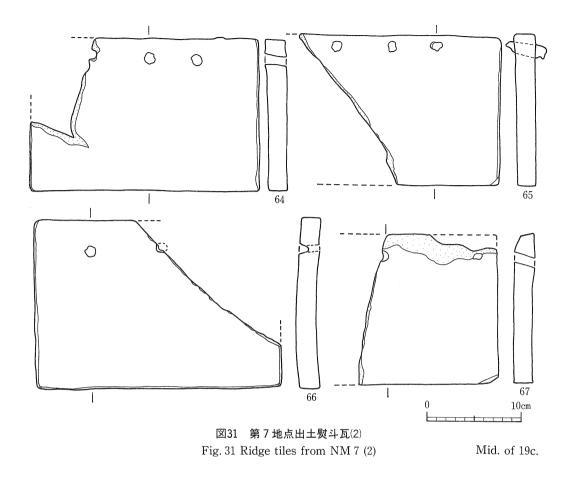


Fig. 30 Flat roof tiles and ridge tiles from NM 7  $\,$  Mid. of 19c.



## 輪違い (図32~34)

組棟に使う装飾瓦で、特に8区より多く出土。長さの測定可能なものを抽出資料とした。

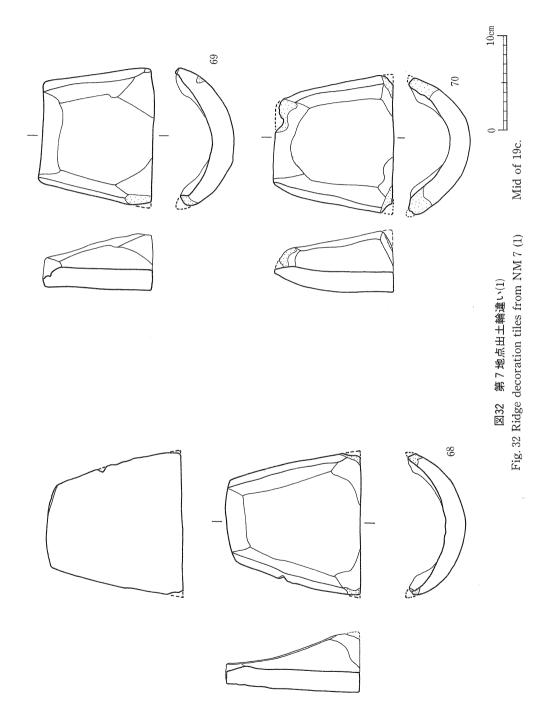
形態:大きさの平均は長さ128mm、上幅95mm、下幅128mmで、全く同じ大きさ・形態の物は無い。側辺が内湾するものが少数ある。

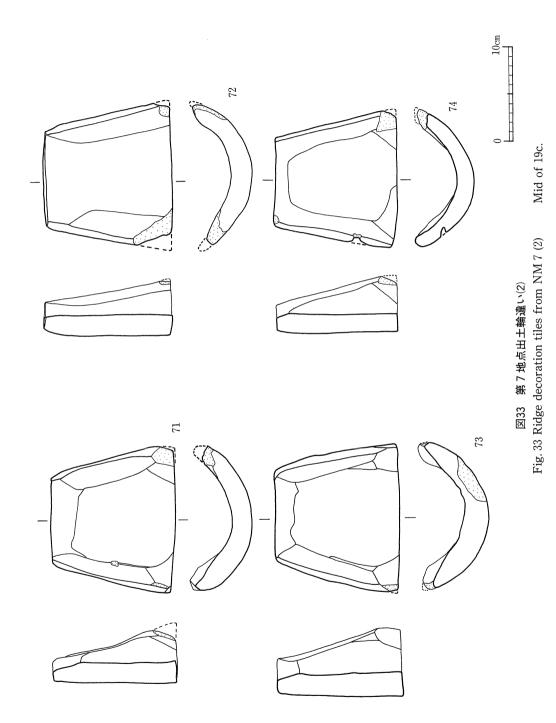
製作・調整痕:表面はヘラナデ・ナデなどの痕跡があるが、丸瓦に比べ、方向が一定せず、 雑である。内面は丸瓦同様にコビキ痕に布痕が重なる。内面の側辺と上辺の接する部分に面を 作りだしているものとないものがある(図版18-11~13)。

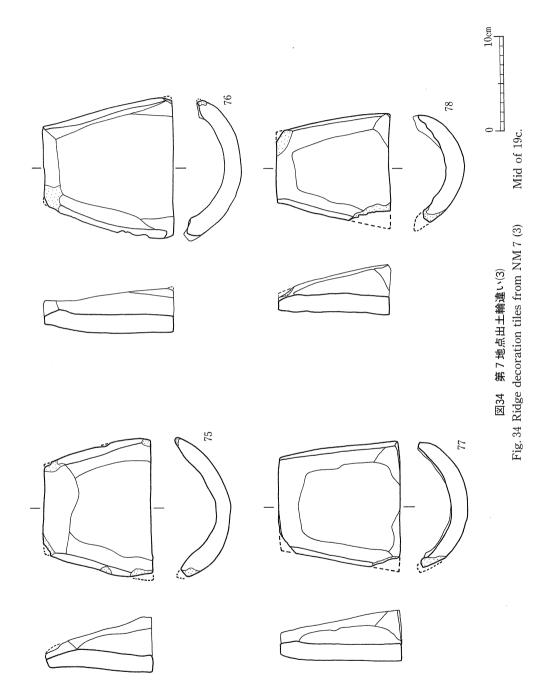
## 面戸瓦 (図35・36)

形態:平瓦を葺いた筋と大棟下部の隙間を埋める瓦である。丸瓦を輪切りにした形で、中央で二つに折れているものが多く、幅が計測可能な物は4点のみである。幅は丸瓦の幅にほぼ合っている。長さはまちまちで、全く同じ形態のものはない。

製作・調整痕:内面は丸瓦同様、横方向のコビキに型の布痕が重なる(図版18—14)。外面は 丸瓦同様の縦のヘラナデが主体だが、横のナデになっているものもある。







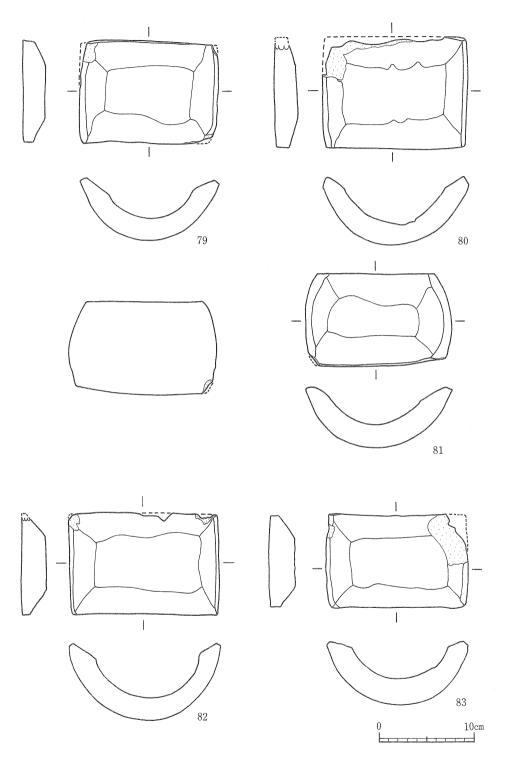


図35 第7地点出土面戸瓦(1) Fig. 35 Filler tiles from NM 7 (1)

Mid of 19c.

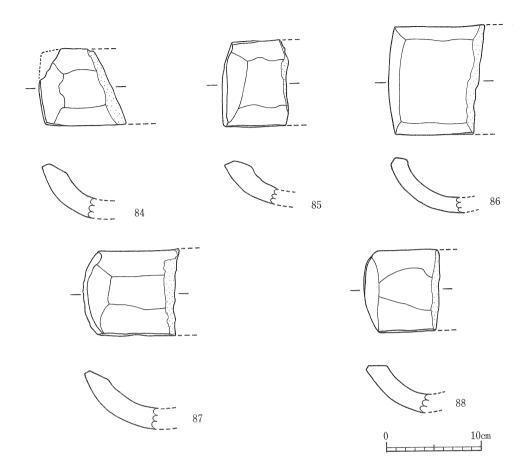


図36 第7地点出土面戸瓦(2) Fig. 36 Filler tiles from NM 7 (2)

Mid of 19c.

## 表10 第7地点出土輪違い観察表

Tab. 10 Notes on ridge decoration tiles at NM7  $$\Psi \omega_{mm}$$  ( ) は復元値 平均値などは復元値を含む

	地区	層遺構	長	上幅	下幅	高	厚
68	8区	IV/@	137	85	(151)	_	22
69	"	"	116	108	(147)		23
70	"	"	125		(146)		23
71	"	V層	127	95	(156)	56	23
72	"	"	133	103	(158)	_	22
73	9区	VM	131		(155)	-	25
74	8 🗷	II層	126	96	(146)		20
75	"	IV層	112		(154)	_	17
76	"	"	140	Market	148	48	19
77	"	"	127	_	(140)	-	17
78	"	"	119		(114)	_	19
		n	54	19	22	17	43
	n	nax.	149	109	(160)	70	26
	Г	nin.	101	80	(114)	(51)	10
		Ř	128.4	96.3	149.0	56.2	20.9
		S	8.4	8.2	9.3	7.0	2.8

# 表11 第7地点出土面戸瓦観察表

Tab. 11 Notes on filler tiles at NM7

						単位mm	• kg
(3)	地区	層遺構	長	幅	高	厚	重
79	8 区	IV₩	106	148	53	24	0.59
80	"	"	115	157	61	23	-
81	"	1 号满内 Pit 5 II 層	91	152	51	25	0.56
82	"	IV層	106	161	71	26	0.73
83	10⊠	V周	98	152	56	28	-
84	8区	IVM	79	-	_	18	
85	"	"	90	-	_	20	
86	3 ⊠	3 層	112		delice	16	
87	8 ⊠	IV PA	89	_		22	
88	4 区	溝、埋土	86	_	_	20	
					,		
		n	15	5	5	23	3
	n	nax.	118	161	71	28	0.73
	r	nin.	79	148	51	16	0.56
		x	99.3	154.0	58.4	22.2	0.63
		s	11.6	5.1	8.0	2.7	0.1

### 伏間瓦(冠瓦)(図37-89~93)

棟の上に乗せる瓦である。完形品が無いので、破片から全体を推定する。類例は元興寺(1982、 図版21) に見られる。

形態: 尻部(89、90)に玉縁形の小さな突起状の接続部と頭部(91、92)にそれを受ける浅い凹みを持つ。胴部は丸瓦状に湾曲するが、湾曲度が小さく、内面に丸瓦のような布痕が無い。そのため胴部破片は平瓦類に分類されがちだが、凸面側が丁寧に調整され、側端の切り方が、より鋭角になっていることにより、平瓦と区別される。胴部中央の稜上に釘穴を持つ破片もある。

製作・調整痕:胴部表面は丸瓦同様、尻頭両端が横方向のナデの他は縦方向のナデである。 裏面は突起部とそれを受ける凹みにナデが有る外は、顕著な調整は見られない。

この形の瓦は二の丸初出で、かつすべて細片のため、最初の大別時には完全に識別できず、「その他」の項目にかかったものを基に、同じ地区から出土した「平瓦類」と「不明瓦類」を再検討し、4区溝埋土1層より27点、2区3層より7点の破片を検出した。この瓦は表4においては分けられていない。

## その他の道具瓦 (図37-94・95)

使用法は不明。仙台城では二の丸第6地点で1点(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 p. 37)、三の丸で4点(結城 1985 pp. 177、315)出土している。

## **飾瓦** (図38-96・97)

中空の球状の瓦で10区III層、11区VIII層より各1個体破片が出土。全体の形は不明だが、推定 直径は122mmと134mm。留蓋にしては径が小さい。

## その他 (図38-99)

滑り止めの筋目をつけた瓦で、平瓦もしくは桟瓦と見られる。第4・第8地点でも確認されているが、細片のためいずれか不明である。

## C. 金属製品

種類が判別できるものは、釘、かすがい、ボタン、キセルが主である(表12)。ほとんどが細片もしくは腐食の著しい物で、計測・図示できない。釘については、 $8 \cdot 9$  区でIV層までは西洋釘が確実に含まれている。ボタンは、第2 地点に類例がある(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 p. 99)。表面と裏面をつなぎ合わせた真鍮製の中空のもので、陸軍の軍服のものであるう(図38-101)。

#### D. その他の遺物

硯の破片 2 点が出土している。そのうち 1 点は側面を印に転用したらしい。彫られた字は「羽田印」だろうか。表にも彫りかけて失敗した字が残っている(図38-100)。また、江戸時代~明治時代の整地・客土層から縄文時代以前と考えられる石器 3 点(メノウ製ピエス・エスキーユ、

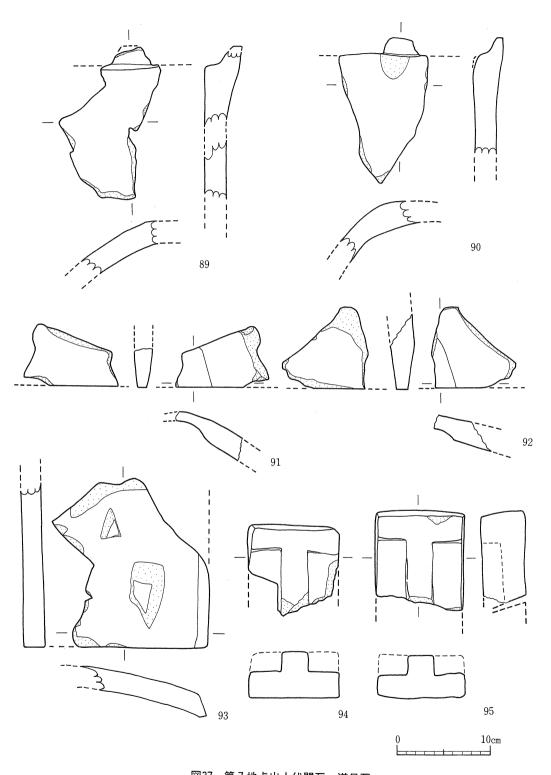


図37 第7地点出土伏間瓦・道具瓦 Fig. 37 Various roof tiles from NM 7 Mid of 19c.

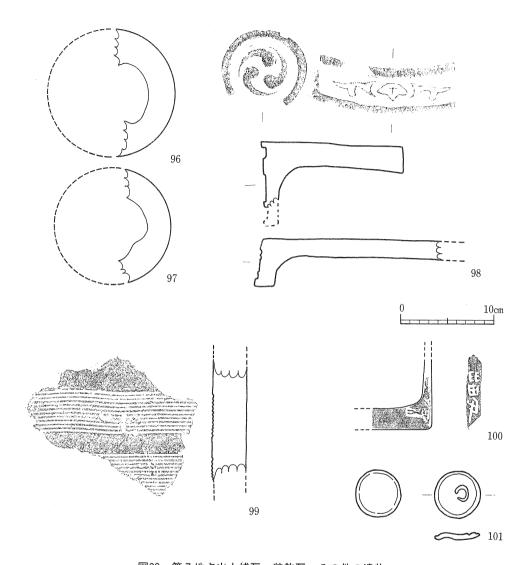


図38 第7地点出土桟瓦・装飾瓦・その他の遺物 Fig. 38 Various roof tiles and other implements from NM 7 Mid. of 19c.

チャート製微細剝離痕ある剝片、チャート製砕片各1点)が出土している。

(山田しょう)

図	種		類	地区	層。	·遺溝	図	種	į	類	地区	層。	遺溝
89	伏	間	瓦	G 4	溝 :	1埋1	96	装	飾	瓦	G10	III	層
90		//		"		//	97		11		G11	VIII	層
91		//		"		//	98	軒	桟	瓦	不明	不	明
92		"		"		//	99	櫛	目化	瓦	G11	III	層
93		//		"		//	100		印		G 8	V	層
94	道	具	瓦	G 10	III	層	101	銅	製ボク	タン	G11	IV	層
95		"		G	不	明							

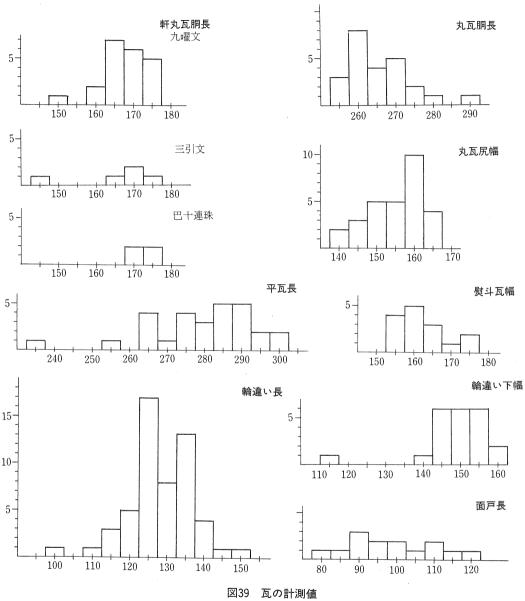


Fig. 39 Histgrams of roof tile sizes from NM 7

単位 mm

# 表12 第7地点出土その他の遺物集計表

Tab. 12 Distribution of various implements at NM 7

地区   一部			T		1311111	ation	or va		mpie	ements at NM 7		<b></b>
「	+44 157	E2 /0.44	ガ	ラ ス				金	Г	属		
注 和 不明   注 和 不明   下稿支え 1   1   1   1   1   1   1   1   1   1		間・ 返愽	板	容器	<b></b>	失 ś	IJ 	銅釘	鋖	その他	不明	硯
************************************					洋	和	不明				1 23	
2区 2 層 1 2	1区	1 層		1						雨樋支え 1		
***********************************	"	2 層									1	
3区   1 層   2 1   3 3   3   5   5   5   1 層   5   1   6   5   1 層   4   24   10   3   3   3   3   3   3   3   3   3	2区	2 層	1	2								
4区   1   層	"	3 層								キセル 1		
5区   1 層	3区	1 層	2	1			3					
6 区	4区	1 層					3					
7区	5区	1 層			1							
**********************************	6区	1 層					1					
****	7区	1 層	4		24		10				3	
Pit	"	2 層		3					1			
8 区 III 層 39 3 8 18 鍵 1 8 2 中空ボタン (銅) 2 4 1 7 7 7 8 1 1 2 1 5 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	"	3 層		1	14		10				2	
IV 層	"	pit		1	1							
V 層	8区	III 層	39	3	8		18			鍵 1	8	
"VI 層       第丸(鉛)1         " 溝埋土II       1         " 名類上溝埋土 3 1 4 2       2         " 不明       1         9区 I 層       3 6 13         " III 層       2 11 1 3         " IV 層       1 4 2         " カクラン       3 3         10区 I 層       1 2 中空ボタン(鋼) 1         " III 層       1 2 中空ボタン(鋼) 1         " IV 層       1 1 4 雨樋支え1 中空ボタン1         " IV 層       1 7         III 層       9         " IV 層       1 7         " IV 層       1 7         " IV 層       1 中空ボタン(鋼) 1         " IX 層       1 中空ボタン(鋼) 1         1 ア IX 層       1 円         1 層       1 日	"	IV 層			8	1	28		2	中空ボタン(銅) 2	4	
プ 清埋土II       1       1       1       1       1       1       1       1       1       1       1       2       1	"	V 層		1		2	15			キセル(銅) 1	5	1
" 2 層上満埋土 3 1 4 2       1         " 不明 1       1         9区 I 層 3 6 13       2         " III 層 2 11 1 3       3         " IV 層 1 4 2       1         " カクラン 3 10区 I 層 1 日 2 中空ボタン(鋼) 1 中空ボタン(鋼) 1 2       1         " III 層 1 2 中空ボタン(鋼) 1 2       1         " IV 層 1 1 1 1 4 雨樋支え1 中空ボタン1 1 7       1         " III 層 9 1 1 7 中空ボタン(鋼) 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	"	VI 層								弾丸(鉛) 1		
" 不明       1         9区 I 層       3 6       13         " III 層       2 11 1 3       3         " IV 層       1 4 2       1         " カクラン       3 3       **         10区 I 層       1 2 中空ボタン(銅) 1       2         " III 層       1 2 中空ボタン(銅) 1       1         " IV 層       1 1 1 4 雨樋支え1 中空ボタン1       1         " IV 層       1 7       中空ボタン(銅) 1         " III 層       5       中空ボタン(銅) 1         " IV 層       1 中空ボタン(銅) 1       1         " IV 層       1 中空ボタン(銅) 1       1         " IX 層       1 中空ボタン(銅) 1       1         " IX 層       1 円       1         IX 層       1 円       1         IX 層       1 円       1         IX 層       1       1         IX 層       1       1	"	溝埋土II					1					
9区 I 層 3 6 13 2 2 11 1 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	"	2 層上溝埋土	3	1	4		2					
" III 層       2 11 1 3       3         " IV 層       1 4 2       1         " カクラン       3       ** **軍製品のフタ (銅) 1         " II 層       1 2       中空ボタン (銅) 1         " III 層       1 1 4 雨樋支え1 中空ボタン 1         " IV 層       1 7         " V層       1 7         " III 層       9         " IV 層       1 中空ボタン (銅) 1	"	不 明									1	
" IV 層     1     4     2     1       " カクラン     3     *** *** *** *** *** *** *** *** *** **	9区	I 層		3	6		13				2	
" カクラン     3       10区 I 層     米軍製品のフタ(銅) 1       " III 層     1       " III 層     1       " IV 層     1       1 7     「中空ボタン1       1	"	III 層		2	11	1	3				3	
10区   I 層	"	IV 層		1		4	2				1	
" II 層     1     2     中空ボタン (銅) 1     2       " III 層     1     1     4     雨樋支え1 中空ボタン 1       " IV 層     1     7     1       11区 I 層     9     1     1       " IV 層     1     中空ボタン (銅) 1     1       " IV 層     1     中空ボタン (銅) 1     1       " IX 層     1     1     1       12区 I 層     1     1     1       F I 層     1     1     1	"	カクラン					3					
11   層   1   1   1   4   雨樋支え1 中空ボタン1   1   1   1   7   1   1   1   1   1	10区	I 層								米軍製品のフタ(銅) 1		
***   IV 層	"	II 層		1			2			中空ボタン(銅) 1	2	
"V層     1 7       11区 I層     9       "III層     5       "IV層     1 中空ボタン(銅) 1       "VII層     1       "IX層     1       12区 I層     1       FI層     1	"	III 層									1	
11区     I 層     9     1       " III 層     5     中空ボタン (銅) 1     1       " IV 層     1     中空ボタン (銅) 1     1       " IX 層     1     1     1       12区     I 層     1     1     1       F     I 層     1     1     1	"	IV 層	1	1		1	4			雨樋支え1 中空ボタン1		
" III 層     5       " IV 層     1       " VII 層     1       " IX 層     1       12区 I 層     1       F I 層     1	"	V 層				1	7					
" IV 層     1     中空ボタン (銅) 1     1       " VIII 層     1     1       " IX 層     1     1       12区 I 層 1     1     1       F I 層     1     1	11区	I 層			9						1	
"VIII 層     1       "IX 層     1       12区 I 層     1       F I 層     1	"	III 層					5					
" IX 層     1       12区 I 層     1       F I 層     1	"	IV 層					1	,		中空ボタン(銅) 1	1	
12区     I 層     1       F     I 層       1	"	VIII 層					1				1	
F I 層 1	"	IX 層					1					
		I 層	1									1
不明 不 明 11 3	F	I 層									1	
	不明	不明					11		3			

### 3. 二の丸跡第8次調査地点(NM8)の調査

#### (1) 調査地点の位置

第8地点は、川内から青葉山地区へと至る現在の扇坂の緩く上る坂の途中にあり、教養部構内の南側に位置する。扇坂面からは2~3m、石垣によって囲まれた一段高い位置にある。

この地点は、江戸初期には、五郎八姫の「西屋敷」北端の「ため池」から侍屋敷付近にあたる。のちに西屋敷が南隣の二の丸に取り込まれて以降も、やはり二の丸北端の、堀・池がおかれていた場所から北側の侍屋敷にかけての付近にあたるとみられる。現地形を見ると、もともとは西側の青葉山から東へ下る自然の沢が流れており、藩政時代には、この地形を利用して外郭の堀や池を造成したようである。この名残である沢が今でも扇坂のすぐ南側を流れている。

#### (2) 調査にいたる経緯

教養部文系教官棟の西側の3m程石垣で高く区画された平坦面に、教養部教官棟新設の計画が出された。当区域は地形からみてかなり厚く盛土がなされている可能性があり、遺構の遺存も良好であろうと考えられたため、当初から建設予定の全域を対象とした本調査を行うことにした。江戸時代以前の遺構・遺物の存在も予想されたので、約2ヶ月間の調査期間を設定し、6月から調査に着手した。

#### (3) 調査方法と調査経過

建物予定区域にそれぞれ余掘り2mずつを加えて、計355m²の調査を行った。

調査区の東側には、機能中の高温水配管が南北方向に通っていたため、この区域はとりあえず調査からは除外した。建物の軸に合わせ、調査区を設定した。グリッドは $4m\times 4m$ である。西から東へ $A\sim F$ 区、北から南へ $1\sim 6$ 区と区分し、グリッドは、A-1区、B-1区などと呼称した。

大学、米軍時代の盛土は重機によって排除し、その後、明治以降の師団時代と推定された面から精査を始めた。調査区の南側には堀、北側には道路面が検出されたが、この時代にも50~60 cmの砂礫の盛土を行っていることが判明したので、これ以下の掘り下げは限定して進め、下層の状況に応じて調査面積を拡張することにした。

調査が進むにつれ、堀からの湧水が激しく、限られた範囲での調査にならざるをえなかった。 8月5日には、豪雨に見舞われ、一部区域が崩れてしまい、地層断面図の作成ができなくなった区域もある。

一部区域は地山面まで掘り下げ、さらに  $2 \text{ m} \times 3 \text{ m}$ の範囲を礫層まで掘り下げて、より下層の堆積状況を把握した。調査期間は、 $6 \text{ 月 } 2 \text{ H} \sim 8 \text{ 月 } 9 \text{ H}$ 日の約2 r月間である。

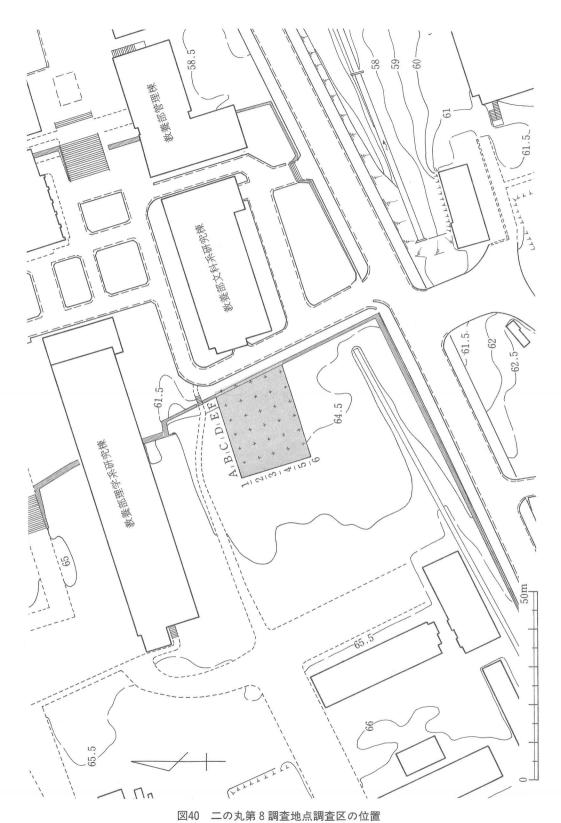
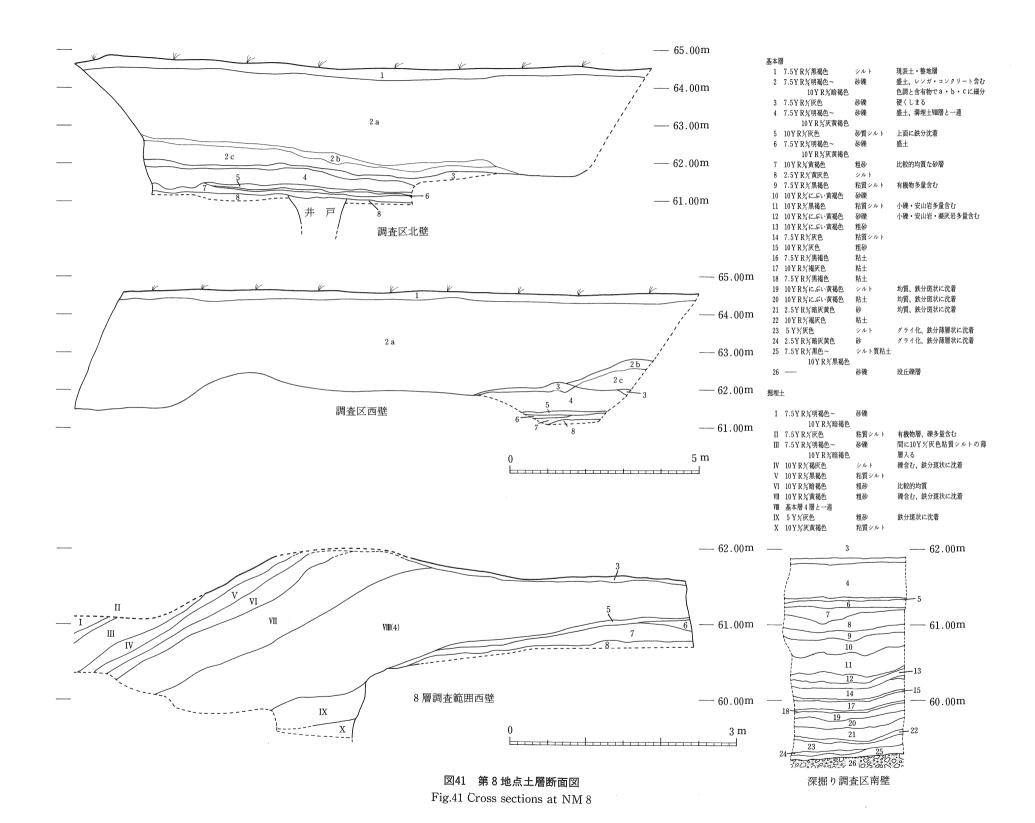


Fig. 40 Location of excavation at NM 8 NM8 i.e. Location 8 of  $\it Ninomaru$  (Secondary Citadel)



57~58

#### (4) 層序

基本層序は、図41に示したようになる。 1~2層は現代~戦後の米軍時代、3層・5層が明治以降~戦前の第二師団時代、8層が江戸時代の生活面と推定される。9層以下は自然堆積層で、砂やシルト~粘土の水性堆積物から構成される。26層が礫層である。

### (5) 遺構と遺物

#### ① 遺構

#### A. 江戸時代(8層面検出遺構)

8層面まで掘り下げたのは部分的であったが、調査区の南側では東西方向の堀、北側では南 北方向の溝、井戸、ピットを確認した。

#### 堀

B-4区で部分的に堀の肩を検出した。他区ではこの堀の続きを確認していないが、3層・5層などの上層では、3列と4列の境付近で東西方向の堀の肩を確認しているので、8層検出の堀も3列と4列を境にした東西方向の堀とみてまちがいないだろう。堀は、湧水が激しく、砂礫盛土の崩壊も頻繁に生じたため、埋土の掘り下げは、堀際約70cmの深さでストップした。埋土IX層の一部 $\sim X$ 層が、8 層生活面時の堆積層と推定される。これらは砂 $\sim$  粘質シルト水性堆積層で、顕著な有機物層は確認されなかった。なお、この堀には、石垣あるいは柵などによる護岸施設は認められなかった。

#### 溝

調査区東側の $\mathbf{E} \cdot \mathbf{F} - 2 \cdot 3$ 区で南北方向の溝が 1 条検出されている。幅約100cm、深さが約20~30cmである。おそらく、南側の堀へ続いていたものと推定される。細砂~シルトの埋土からは、遺物の出土はない。

### 井戸

調査区北側の壁際で検出された。計約180cmの円形の素掘り井戸である。南側に楕円形の浅いピットが附属する。周囲には他にピットなどの遺構は確認されていない。井戸は、120cm程掘り下げてストップした。遺物は、出土していない。

### ピット

B-3区の堀際及び井戸の南側に楕円形のものが計 4 基確認されている。ピット 1 と 3 は、形態的に類似し、間尺も約180cmなので、堀際の塀柱跡の可能性がある。ただし、これらのピットの深さは約20cmで、柱痕跡は確認されていない。

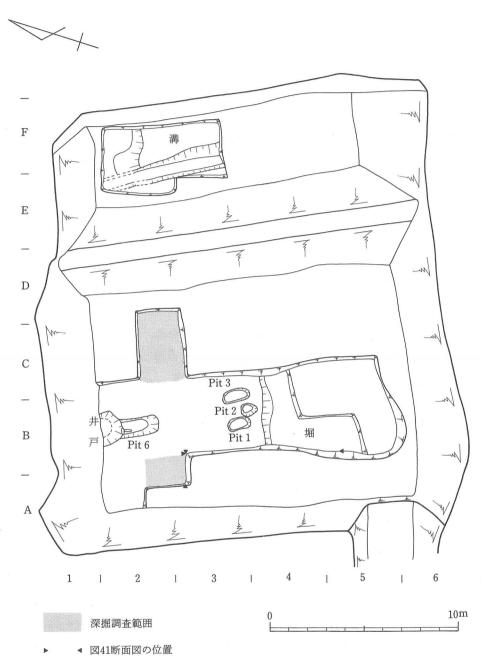


図42 第8地点平面図(8層上面) Fig. 42 Plan of NM 8 (on stratum 8)

Edo period

#### B. 明治(第二師団)以降

### a:5層検出遺構

5層は、7層の砂~シルトの水性堆積層および6層の砂礫盛土層の上部が起源になっているようである。上面は比較的硬く締まっており、上層の4層砂礫盛土とは明確に区別され、一時的に生活面であったことを伺わせる。この5層面も部分的な掘り下げであったが、南側では堀、北側の平坦面では性格不明の落ち込み1基、木樋を検出している。

#### 堀

8層の堀に対応してやはり堀が検出されている。堀の肩のラインは、ほぼ8層検出の堀と変化がないと思われる。埋土はIX層の一部が対応するであろう。

#### 木樋

調査区北東部の5層面がやや北側に傾斜する $E \cdot F - 2$ 区で検出された。幅約30 cm、深さは約12 cmである。底部板と側板の接合部には丸釘を使用している。脆弱で土圧によって変形していた。

#### ピット

 $C-2 \cdot 3$  区に計約 4 m程の円形状の浅い落ち込みがある。当初、 8 層面で確認したが、その後堆積層の検討から 5 層面に帰属する遺構であることが判明した。

深さは約20cm程で、埋め土は非常に軟質のグライ化した砂質シルト層である。遺物の出土はない。

### b:3層検出遺構

この面で確認された遺構は、南側の堀と北側の道路とみられる硬く締まった砂礫層の面のみである。3 層面は、5 層上面に約 $50\sim130$ cmの厚さの砂礫の盛土をして形成された生活面である。

#### 堀

8層、5層の堀に対応する。堀の傾斜面の $C \cdot D - 5$ 区には、木の根の抜根跡とみられる計 5 m程のピットがある。 3層面に対応する溝埋土V層は、水性植物の繁茂していた様子をとどめ、有機物を多量に含んだ堆積層であった。 B-4 区の堀の斜面では、陶磁器が一括して投棄されていた。また、魚骨、種子なども多く含まれていた。

#### 道路跡

堀の北側は、堀と平行して、砂利層が硬く締まった平坦面であった。堀とこの平坦面の境は、 小高く盛り上がっていた。平坦面からは他に遺構は検出されていない。こうした状況から、この平坦面は道路跡と推定した。

(佐久間光平)

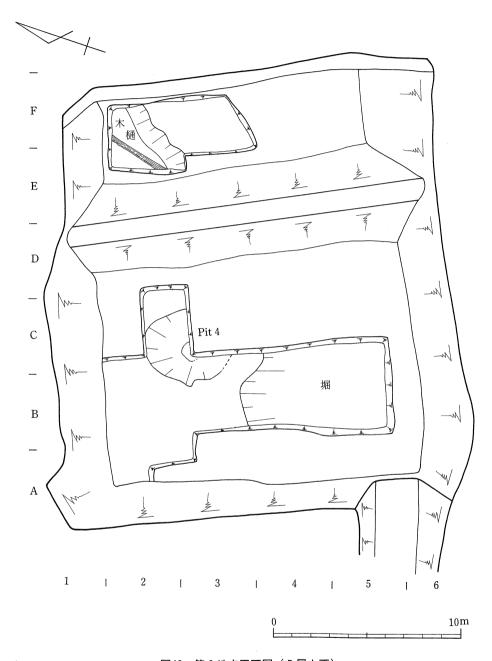


図43 第8地点平面図(5層上面) Fig. 43 Plan of NM 8 (on stratum 5) Meiji period

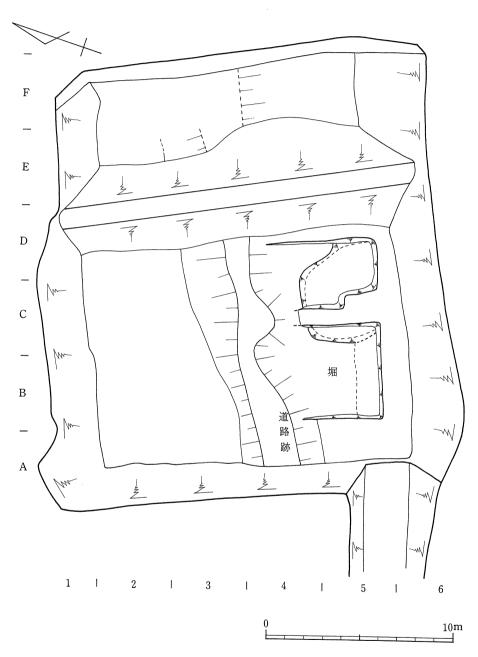


図44 第8地点平面図(3層上面) Fig. 44 Plan of NM 8 (on stratum 3) *Meiji* period

63

### ② 遺物

当地点出土遺物の種類・数量は表13・16・17に示した。陶磁器を中心に、瓦・ガラス製品・石製品など、多様な遺物が出土しているが、それらのほとんどは3層・5層面の明治以降のもので、江戸時代の遺物はきわめて少ない。

### A. 陶磁器

接合作業後の総破片数は2137点を数える。特徴の不明な細片も多く、また磁器の碗・皿には、同じ形態・文様のものが多く含まれる。磁器、陶器の他、堤産と思われる瓦器なども出土しているが数は少ない。出土状況は、B3・4・5区に集中し、3・4・5層及び堀埋土IV・V層

表13 第8地点出土陶磁器集計表 Tab. 13 Distribution of ceramics at NM 8

出土遺物	出土造物					뀲						陶器								\$				
		B	į		Ш	碗皿	蓋	徳利	その他	碗	III	碗皿	â	<b>*</b>	壺	甕	土瓶	徳利	焙烙	その他		_ ~		
出土地点	碗	小型碗	湯呑	不明		類		<b>↑</b> 11				類	擂鉢	その他			粗	村	烙		炻 器	瓦 質	土師質	合計
1層													3			4			1		不明 1			9
2 層	3						1														碗 1			5
2・3層		1																1						2
3層	10	3			2		1		盃3 灰吹1 火入3 不明140	8	1		2		1	2	5		3	火入1 不明3	花瓶 2 火入 6 碗鉢類25		碗皿類 1 不明 3	226
4層	2				1				鉢 1 不明10				2			1				切立1		鉢類1	碗皿類 1 不明 1	21
5層	22		2		35		1		不明11	4			2	1	1							擂鉢 1	碗皿類18	98
6層	13		1							2			2											18
7層						2			不明 6		1	3	1			1							碗皿類1	15
8層												2											-	2
堀埋土I層	10								鉢1	1	3			1	1					火入1		擂鉢3	碗皿類 2	23
堀埋土II層								2		1	1		2											6
堀埋土III層	1								不明3				2							不明 9		鉢類 1		16
堀埋土IV層	26		1		42		6		盃 1 不明61	1	1	6	2		2	1	1		1		碗鉢類13 徳利 1	鉢類 3	不明 2	171
堀埋土IV・V層								6	不明34													火入2		42
堀埋土V層	348	5			463	8	22	4	鉢 1 盃 1 不明300		1	5					161	1		お歯黒 1 行平23	土瓶 1 碗類11		碗皿類 7 不明 7	1370
堀埋土VII層											3													3
堀埋土VIII層													3										碗皿類1	4
堀埋土IX層		1			1			3		1				1									碗皿類 1	8
堀埋土不明										1	1													2
木樋埋土															1									1
ピット4埋土1層											1													1
不明	1				1	6			火入1 不明75	1							1			豆甕 1	碗皿類 6		碗皿類1	94
合計	436	10	4	0	545	16	31	15	653	20	13	16	21	3	6	9	168	2	5	40	67	11	46	2137

から多く出土している。特に堀埋土V層に集中する。時期的には、幕末から明治以降のものが大半で、東北産磁器や大堀相馬製品が多く含まれる。堀埋土VII・VIII・IX層では陶器・磁器ともに出土量は少なく、肥前・美濃瀬戸産が多い。大きく見ると、基本層8層と堀埋土IX層から下層では、江戸期のものに限定され、それより上層では、明治以降の資料が大半を占める。基本層3層面(堀埋土V層)と基本層5層面の資料では、平清水産の飯茶碗や型打の皿など共通するものが多く見られ、しかもこれらの資料が、いずれでも主体を占めている。但し、摺絵および銅版印刷のものは、5層では見られず、3層(堀埋土V層)以上で出土する。摺絵や銅版印刷のものは、堀埋土IV層から上の層に多く含まれてくる。

#### 磁器

 $1 \sim 44$ は、堀埋土出土のものである。 1 はコバルト染付による小型碗。 2 は口縁内部に繋葉文が施される飯茶碗。 3 は外面青磁釉の飯茶碗で、18世紀の肥前産。

 $4 \sim 10$ はIV層出土で、銅版印刷など明治後期からの物が多くみられる。 4 は窓絵の草花文が銅版印刷で施される、明治後期以降のものである。 5 は面取りされた飯茶碗の蓋で、高台裏に「玉風亭栢山製」の銘が入る。 6 は銅版印刷で菊花文が施される小型の火入。 7 は団円文を施した小型の碗。  $8 \sim 10$ はいずれも摺絵が施された型打ちの輪花皿で、蛇の目高台を持つ。産地は特定できないが、胎土がかなり粗いものもあり東北産の可能性があるものも含まれる。

11~42は堀埋土V層出土で、明治期を中心とする製品である。11は型抜きの水滴で、菊花文 の周囲にコバルトで染付がなされている。12は詩文が施された面取りの盃で平清水産。13は詩 文が施された面取りの小型碗。14は銅版印刷の菊桐文に、白泥で縁どりを施す鉢。15は単純化 された松竹梅をコバルトで見込に施した小鉢。16は見込みに朝顔が描かれた輪花皿で平清水産 か。17~19は青磁釉に上絵付がなされるもので、明治期に平清水で類似品が生産されているが、 同窯産のものとは断定できない。17は緑・茶・白・赤の上絵付で牡丹と藤文が描かれ、白と赤 は盛り上がった状態になっている。18は黒・茶の上絵付で花鳥文が施されている。19は緑・黒 で雁と草花文が摺絵で施され、白と赤で彩色されている。20はコバルトで草花に鳥文が施され る。21は見込みに円状の荒磯文が刻文され、その上から濃いコバルトによって染付がなされる。 22はコバルトによる染付で、高台径の小さい蛇の目高台を持つ。今回の調査では、同種のもの が最も多くまとまって出土している。23~25は類似した蓋付の飯茶碗で、24・25はセットとな ると思われる。細かい筆描きで雀、昆虫文が描かれており、瀬戸製品かと思われる。26・27は コバルトの摺絵による飯茶碗。28・29はコバルトによる線描きの飯茶碗で、口縁内部に文様帯 がはいる。30・31は濃いコバルトで縦縞の中にそれぞれ繋花文、雲繋文を描く。32~41はコバ ルトによる染付で、文様の崩れたものが多く、明治の平清水産。42は紅入れで、口縁無釉部に 紅が付着して残る。

43・44は堀埋土IX層出土のもの。43は型打ちの皿で、17世紀後半の肥前産。44は18世紀の肥前産のくらわんか碗である。

45~62は、基本層出土のものである。

46~53は、3層出土。46は土瓶か急須の蓋で、同様のものが明治の会津本郷で大量に作られている。47は桐文の灰吹で、呉須はかなり濁ったものが使われている。48の小型碗は、濃い盛り上がったコバルトで染付がなされている。49は青海波文に扇が染付された肥前産。50はコバルト染付によるもので、堀埋土V層出土の平清水産と同様のものである。51は稲束に雀文のやや大振りの飯茶碗である。52は銅版印刷で勲章文が施された飯茶碗。53は3層出土の連弁口縁の鉢で、17世紀後半から18世紀の肥前産。

 $55\sim61$ は、5 層出土のものである。55は竹網を施したような胴部を持つ鮫肌釉の湯呑で、明治期の会津本郷で同様の釉薬のものが多く作られている。56は堀埋土V 層で出土した皿(図48-21)と同類のもの。57は端反が強い、唐草文の飯茶碗である。 $58\sim62$ はコバルトによる染付で、明治期の平清水産と思われるもの。これらは、堀埋土V 層と基本層の3 層出土の平清水産の飯茶碗と同類のものである。そのうち、62はコバルトによる染付に加えて、緑釉で松葉文が描かれる。

#### 陶器

63~79は、堀埋土出土のものである。

63~66は堀埋土 I 層出土。63は鉄釉が施された乗燭で、19世紀の大堀相馬産。64・65は三島 手、66は刷毛目の唐津産である。

67~69は堀埋土II層出土。67は緑釉に雲龍文の貼付が施された瓶掛。68は豆甕で、胴部まで 鉄釉が施されている。69は糠白釉の鉢で、口縁部が波状にされている。

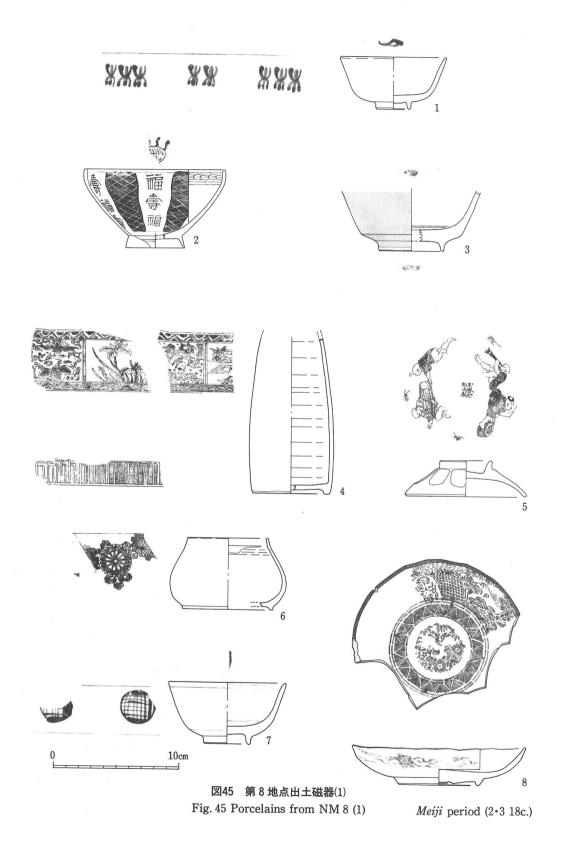
70~74は堀埋土IV層出土。70は胴筒形の徳利で、灰釉を施した上に、首部から肩部にかけて鉄釉が浸掛られている。71は縁折れの灰釉小皿で、16世紀後半の瀬戸・美濃産。72の豆甕は、底面に墨書がみられる。73は土瓶の山蓋で、糠白釉が施される。摘みの装飾、穴は見られない。74は青釉の皿で見込みに蛇ノ目釉剝ぎが見られる。

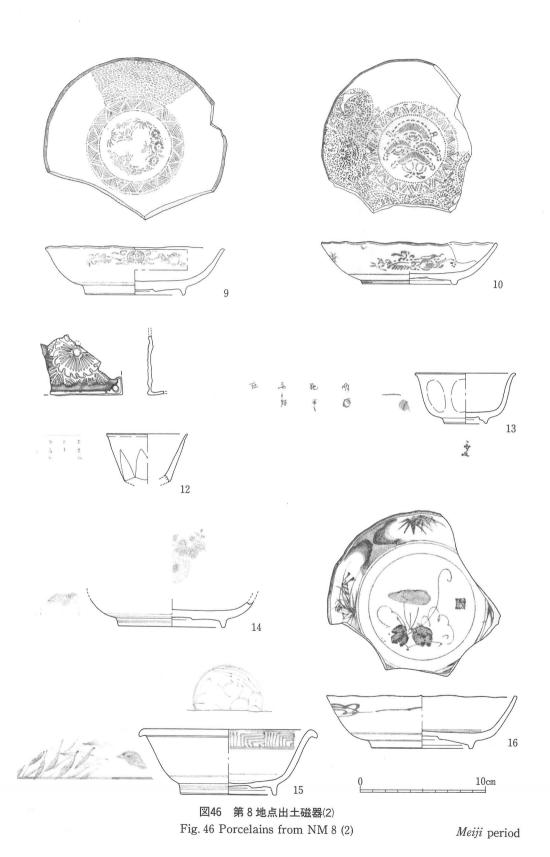
75・76は堀埋土V層出土。75は鉄釉の灯明皿で大堀相馬産。76は灰釉が施された安心形土瓶と呼ばれるものである。

77は堀埋土VII層出土で、IV層出土の青釉の皿と同様のものである。78は堀埋土VIII層出土の焼締めの擂鉢。79はIX層出土の鉄絵の鉢で葦草文が施される。

80~88は、基本層出土のものである。80は大堀相馬の大皿で糠白釉が施される。

81・82は3層出土。81は灰釉の小型碗で大堀相馬産。82は白化粧され、コバルトで摺絵が施された火入。明治から大正の平清水製品。





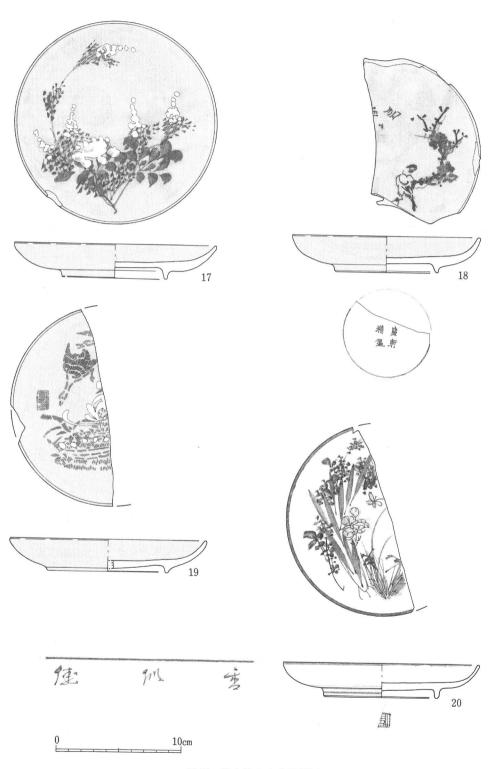
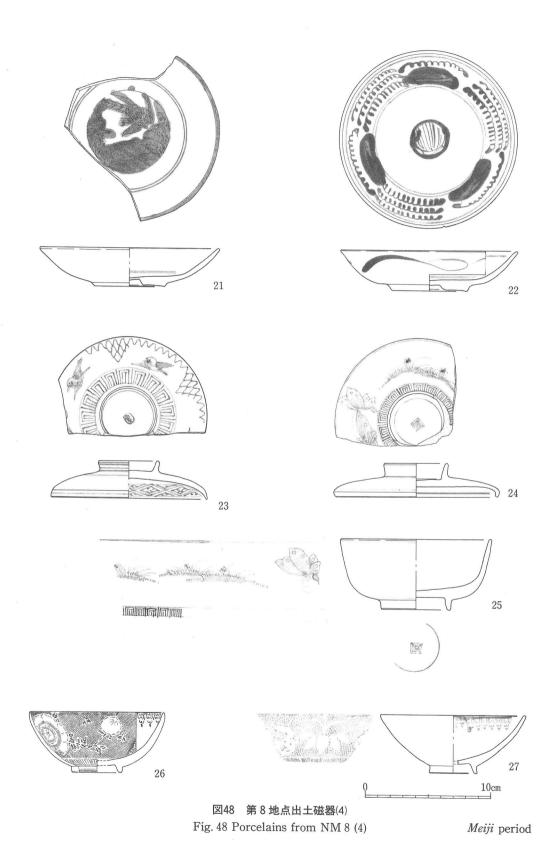


図47 第8地点出土磁器(3) Fig. 47 Porcelains from NM 8 (3)

Meiji period



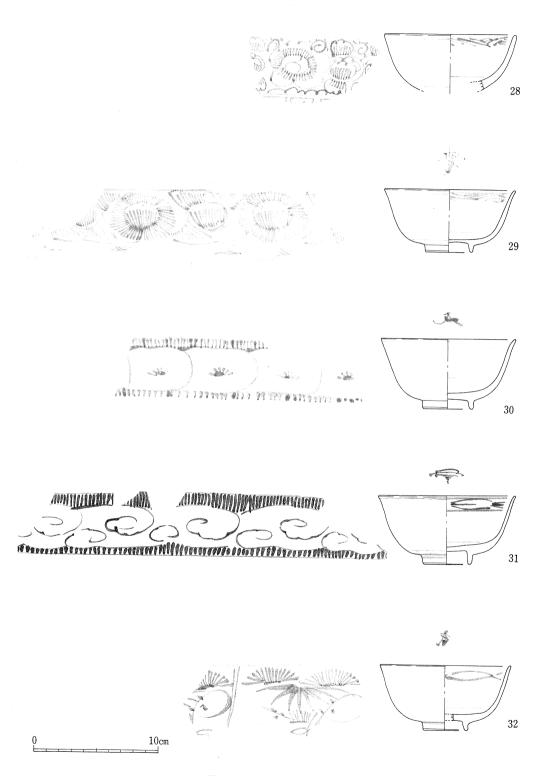


図49 第 8 地点出土磁器(5) Fig. 49 Porcelains from NM 8 (5)

Meiji period

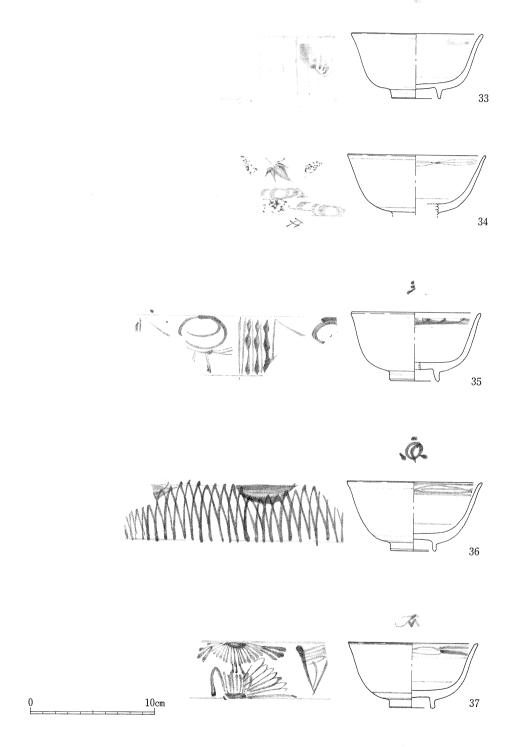
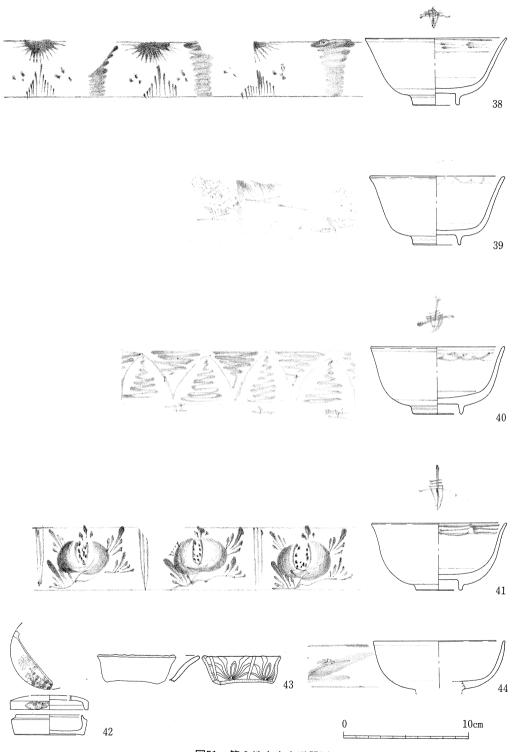


図50 第8地点出土磁器(6) Fig. 50 Porcelains from NM 8 (6)

Meiji period



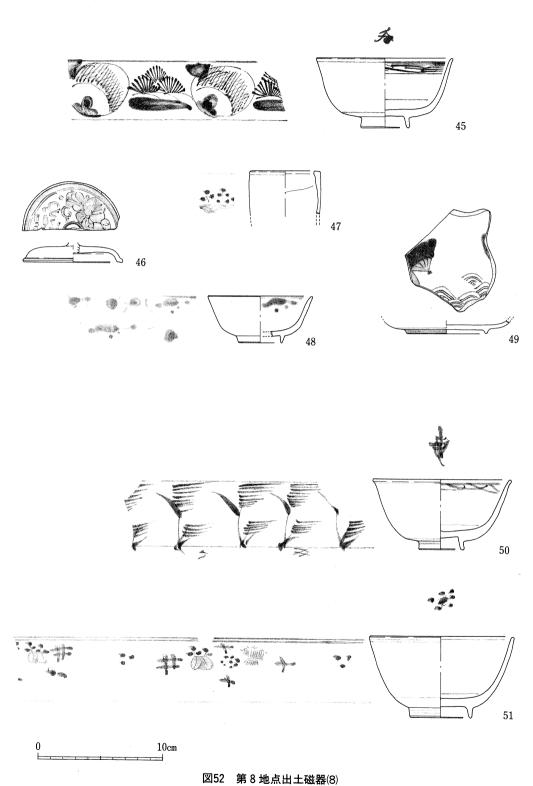


Fig. 52 Porcelains from NM 8 (8) Meiji period (47·49·51 18c.)

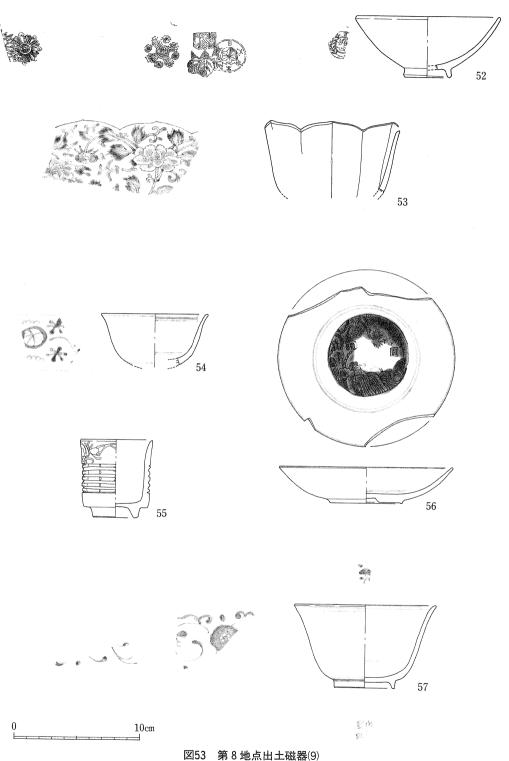
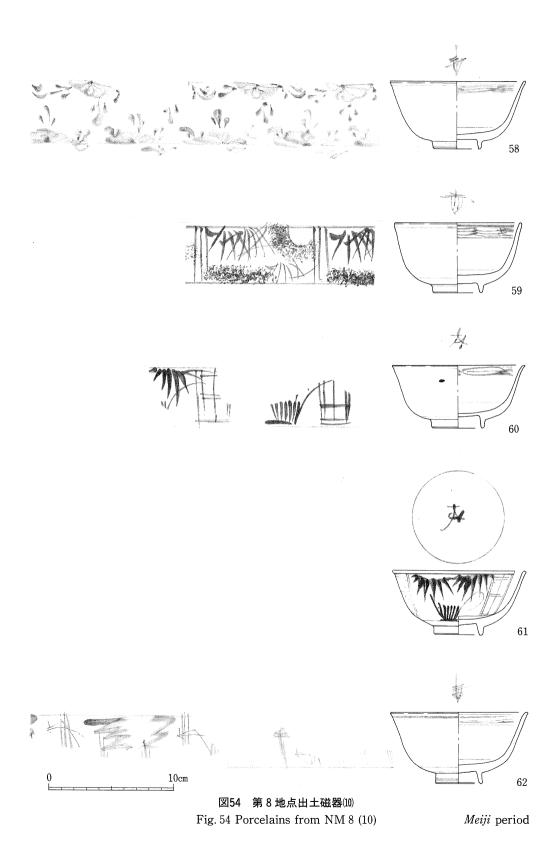
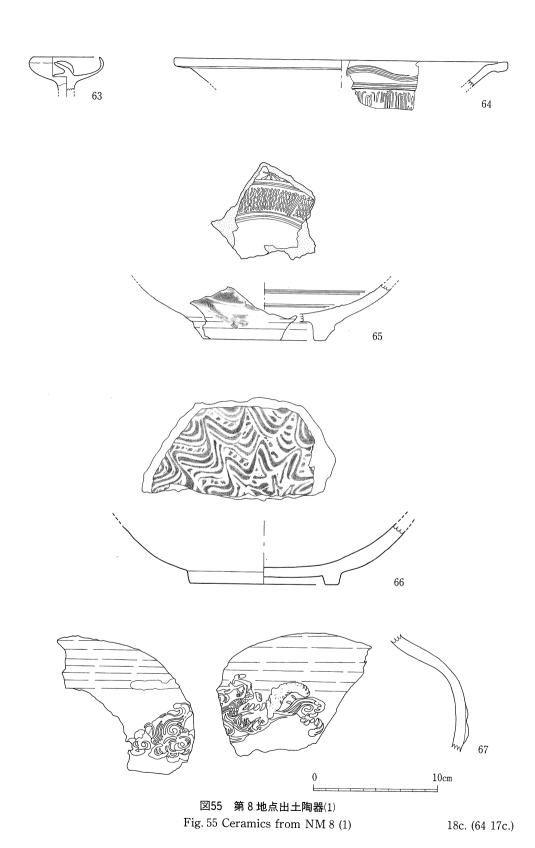
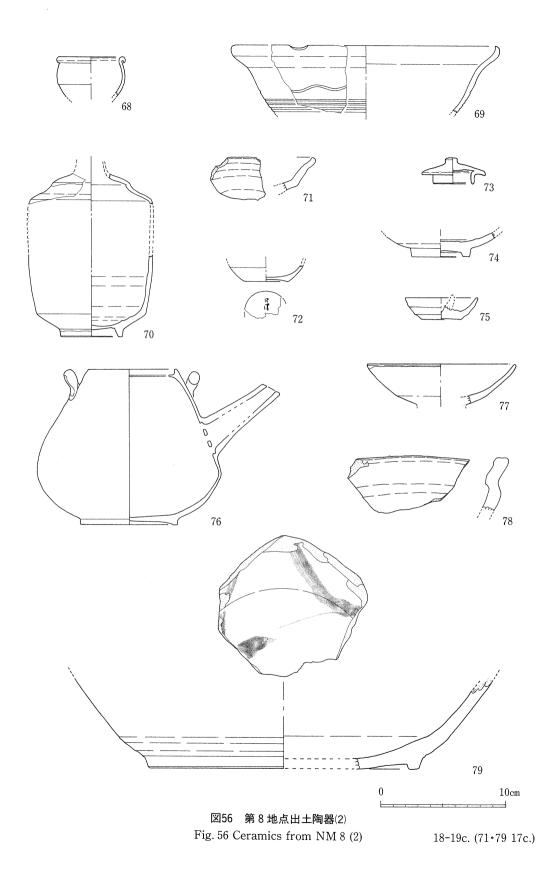
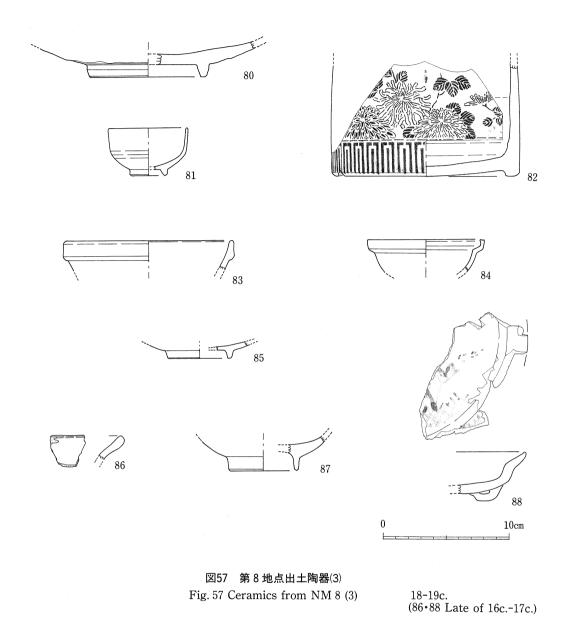


Fig. 53 Porcelains from NM 8 (9) *Meiji* period (53 Late of 17c.-18c.)









83・84は5層出土の鉄釉製品。83は擂鉢、84は薄手の小鍋か。85は6層出土の皿で外面は鉄釉、内面に糠白釉が施される。

86~88は7層出土。86は灰色に発色する灰釉が施された角口縁の皿で唐津産。87は淡黄色の 灰釉が施された碗で、器厚が厚い。88は志野の向付で、折縁口縁で厚い志野釉の下に鉄釉で垣 根に草花文が描かれている。

(本田泰貴)

## 表14 第8地点出土陶磁器観察表(1)

Tab. 14 Notes on ceramics at NM8 (1)

1								-	l'ab. 14 Notes on cer	aiii.	ics	at IV	IVIO	(1)			
2	番号	器形	出土場所	種類	残存				文 様 等	-		胎土	焼成	産 地	時 期	備考	写真 図版
3	1	小型碗	B 5 堀埋土	磁	L	84	26	42	染付稲東文?、コバルト	石灰	×	普	普	瀬戸	明治	同文破片他に3点	23-1
4	2	飯茶碗	不明堀埋土III	磁	М	113	47	63	染付福寿文字文、呉須	石灰	×	普	普	肥前	18 C		23-2
5 数隔隔距         C 4個生土W         記し、98 00 30 2000 産土が、当然の表でと、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお	3	飯茶碗	不明堀埋土III	磁	S	-	52	-	外面青磁、見込み五弁花、呉須	石灰	×	やや粗	普	肥前	18 C		23-3
6 次入? C S 副理主W	4	燗徳利	C 4 堀埋土IV	醚	L	_	62	-	銅版、草花文	石灰	×	やや密	やや良	不明	明治後期以降		23-4
7	5	飯茶碗蓋	C 4 堀埋土IV	磁	Ш	98	40	28	銅版、童子文、玉風亭栢山製銘	石灰	×	やや密	やや良	不明	明治後期以降		23-5
8 Ⅲ D S W世上17 図 L 199 02 31 施名。 外物面を小水ス・コベルト 石灰 × 曹 書 不明 明治 明治 政政性に立直 23-9 総任加 D 5 8世上17 図 L 141 78 37 総統。小水ス・コベルト 石灰 × 曹 書 不明 明治 所入 政政性に立直 23-1 総元 D 5 8世上17 図 L 131 73 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28 28	6	火入?	C 5 堀埋土IV	磁	М	64	72	57	銅版、菊花文	石灰	×	密	良	瀬戸?	明治後期以降		23-6
特に	7	湯呑茶碗	D 4 堀埋土IV	醚	S	94	37	49	染付団円文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	肥前	19 C		23-7
日本語画	8	Ш	D 5 堀埋土IV	磁	L	139	62	31	摺絵、松竹梅富士小紋、コバルト	石灰	×	普	普	不明	明治	同文破片他に2点	23-8
1	9	輪花皿	D 5 堀埋土IV	磁	L	144	78	37	摺絵、小紋、コバルト	石灰	×	普	普	不明	明治	同文破片他に35点	23-9
13   上電   B 5 根理土 V   超   B   5   65   一 元付許文、コバルト   石灰 X   やや密 や空見 神彦木 別始   24-   14   田   C 4 根理土 V   超   L   81   33   40.5   株理・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・	10	輪花皿	D 5 堀埋土IV	磁	L	151	75	34	摺絵、小紋、コバルト	石灰	×	粗	やや甘	東北産	明治	同文破片他に4点	23-10
1 ・	11	水滴	B 4 堀埋土V	磁	М	_	-	-	染付、型打ち菊花文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	瀬戸?	明治		24-1
1	12	盃	B5堀埋土V	磁	S	65	-	-	染付詩文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	平清水	明治		24-2
1	13	小型碗	B4堀埋土V	磁	L	81	33	40.5	飛鉋、詩文鉄釉、外面青磁釉	石灰	×	やや密	やや良	瀬戸?	明治		24-3
15   田   日   日   日   日   日   日   日   日   日	14	Ш	C 4 堀埋土V	磁	S	-	85	_	銅版、菊桐文、コバルト	石灰	×	やや粗	普	瀬戸	明治		24 4
1	15	納豆鉢	B 4 堀埋土V	磁	М	134	75.5	52.5	染付団松竹梅文、コバルト	石灰	×	普	普	瀬戸	明治		24-5
18   田   B 4 照理士   超   M   151   83   29 総素無色の上紙。花鳥、繁精翰銘   青霞 × 密   良 平清水   明治以降   24-   20   田   B 4 総理士 V   超   M   156   85   27 染付液に色、エバルト   石灰 × 空   で で やや良   程序   明治以降   24-   21   田   B 5 短理士 V   超   M   156   85   27 染付液に入 エバルト   石灰 × で で やや良   程序   明治以降   156   13   染付・型がらに水、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   程序   明治   同文統計能に41点   25-   22   田   B 4 短理士 V   超   M   125   31   染付・型がらに水、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   程序   明治   同文統計能に51点   25-   23   鉱系統   B 4 短理士 V   超   M   125   30   染付・型がらに水、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   超戸   明治   同文統計能に51点   25-   25   鉱系統   B 5 短理士 V   超   M   125   30   染付・型がら流に水、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   超戸   明治   同文統計能に61点   25-   25   鉱赤碗   B 5 短理士 V   超   M   120   54   56   取付申収を見、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   超戸   明治   同文統計能に1点   25-   25   鉱赤碗   B 4 短理士 V   超   M   109   40   48   指統計予2、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   和戸   明治   同文統計能に1点   25-   26   鉱赤碗   B 4 短理士 V   超   M   109   40   48   指統計予2、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   不明   明治   同文統計能に12点   25-   25   鉱赤碗   B 4 短理士 V   超   M   109   40   48   指統計予2、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   不明   同文統計能に12点   25-   30   鉱赤碗   B 4 短型士 V   超   M   109   36   56   取付申介文、コバルト   石灰 × やや棺 やや良   平清 × 明治   同文統計能に12点   25-   30   鉱赤碗   B 4 短型士 V   超   M   104   36   56   取付申介文、コバルト   石灰 × ・や棺   を中食   平清 × 明治   同文統計能に12点   25-   31   鉱赤碗   B 5 短型士 V   超   M   104   38   56   取付申介文、コバルト   石灰 × ・やや棺 やや良   平清 × 明治   同文統計能に3点   25-   32   紅赤碗   B 5 短型士 V   超   M   104   38   52   取付を1を次、コバルト   石灰 × ・やや棺 やや良   平清 × 明治   同文統計能に3点   25-   33   鉱赤碗   B 5 短型士 V   超   M   104   38   52   取付を1を次、コバルト   石灰 × ・やや棺 やや良   平清 × 明治   同文統計能に3点   25-   35   鉱赤碗   B 5 短型士 V   超   M   104   38   52   取付を1を次、コバルト   石灰 × ・やや棺 やや良   平清 × 明治   同文統計能に3点   25-   36   鉱末碗   B 5 短型士 V   超   M   104   38   52   取付を1を次、コバルト   石灰 × ・やや棺 やや良   平清 × 明治   明治   同文統計能に3点   25-   36   鉱末碗   B 5 短型士 V   超   M   104   38   52   取付を1を次、コバルト   石灰 × ・やや棺 やや良   平清 × 明治   同文統計能に3点   25-   37   鉱末碗   B 5 短型士 V   超   M   104   38   53   取付を1を次、コバルト   石灰 × ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16	Ш	B5堀埋土V	磁	М	152	81	42	染付朝顔?、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治	同文破片他に2点	24-6
1	17	M	C 4 堀埋土V	磁	Р	-	-	28	緑茶白赤色の上絵、牡丹文	青磁	×	密	良	平清水?	明治以降		24-7
20   Ⅲ   B 4 端埋土V   総 M   156   88   27   条件存化文、コバルト   石灰   × 中や密   やや良   郵戸   明治   同文破片他に4.2   25-2   1	18	m	B 4 堀埋土V	醚	М	151	83	29	緑茶黒色の上絵、花鳥、盛軒精製銘	青磁	×	密	良	平清水?	明治以降		24-8
2	19	Ш	C 4 堀埋土V	磁	М	158	96	26	緑黒白茶色の上絵、花鳥文、摺絵	青磁	×	密	良	平清水?	明治以降		24-9
22   Ⅲ   B 4 堀埋土V   磁 P   142   60   32 軟件應章文字、コバルト   石灰   本や密 やや良   飛頭空   19C   同文破井他に3点   25-   25 飯茶碗蓋   B 4 堀埋土V   磁 M   125   - 30 軟件産業マ・スルト   石灰   本や密   やや良   瀬戸?   19C   同文破井他に3点   25-   25 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   102   54   56 軟件塊に見虫、コバルト   石灰   本や空   一を中良   瀬戸?   明治   同文破井他に1点   25-   25 飯茶碗   C 4 堀埋土V   磁 M   109   40   43 指給牡丹文、コバルト   石灰   本や空   平や良   不可   明治   同文破井他に1点   25-   26 飯茶碗   C 4 堀埋土V   磁 M   109   40   43 指給牡丹文、コバルト   石灰   本や空   平内良   不可   明治   同文破井他に1点   25-   25 飯茶碗   C 4 堀埋土V   磁 M   104   43 指給牡丹文、コバルト   石灰   本や空   平内良   明治   同文破井他に2点   25-   30 飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 M   104   45   50 染件牡丹文、및須   石灰   本   番   番   瀬戸?   明治   同文破井他に8点   25-   30 飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 M   104   35   50 染件牡丹文、スバルト   石灰   本   番   番   瀬戸?   明治   同文破井他に8点   25-   32 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   35   50 染件牡丹文、コバルト   石灰   本   番   番   瀬戸?   明治   同文破井他に8点   25-   33 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   35   50 染件松竹塩文、コバルト   石灰   本   番   番   瀬戸?   明治   同文破井他に1点   25-   34 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   35   50 染件松竹塩文、コバルト   石灰   本   番   番   瀬戸?   明治   同文破井他に1点   25-   35 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   35   50 染件松竹塩文、コバルト   石灰   本   春   春   神戸水?   明治   同文破井他に1点   25-   34 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   38   55 染件松竹塩文、コバルト   石灰   本   中で密   平清水   明治   同文破井他に1点   25-   35 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   38   55 染件松竹塩ズ、コバルト   石灰   本   中で密   平市水   明治   同文破井他に3点   25-   36 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   38   55 染件松竹塩ズ、コバルト   石灰   本   中で密   平市水   明治   同文破井他に3点   25-   37 飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   38   55 染件松竹塩ズ、コバルト   石灰   本   平清水   明治   同文破井他に3点   26-   40 飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 L   108   35   55 次件五橋文   スパルト   石灰   本   平清水   明治   同文破井他に1点   26-   41 瓜木碗   B 4 堀埋土V   磁 L   108   35   54 次件五が高ズ、コバルト   石灰   本   平清水   明治   同文破井他に1点   26-   42 紅木   B 4 堀埋土V   磁 L   108   35   54 次件五が高ズ、コバルト   石灰   本   番   平清水   明治   同文破井他に1点   26-   44 小碗   B 4 堀埋土V   磁 L   108   35   54 次件五が高ズ、コバルト   石灰   本   番   平清水   明治   同文破井他に1点   26-   44 小碗   B 4 堀埋土V   磁 L   108   35   54 次件五が高ズ、コバルト   石灰   本   番   平清水   明治   同文破井他に1点   26-   44 小碗   B 4 堀埋土V   磁 L   108	20	Ш	B4堀埋土V	磁	М	156	88	27	染付草花文、コバルト	石灰	×	密	良	平清水	明治		24-10
25   数茶碗蓋 B 4 場埋土 V   超   M   125   一 30   染付電文、コバルト   石灰 X   やや棺 やや良 翻戸?   19C   同文破片他に3点   25-   25   数茶碗 B 4 場埋土 V   超   M   120   54   56   染付酸に昆虫、コバルト   石灰 X   やや食   和戸?   明治   同文破片他に6点   25-   25   数茶碗   C 4 場埋土 V   超   M   109   40   48   摺絵牡丹文、コバルト   石灰 X   やや食   中央良 都戸?   明治   同文破片他に1点   25-   25   数茶碗   C 4 場埋土 V   超   M   104   38   56   染付む解文、コバルト   石灰 X   やや鬼   和戸?   明治   同文破片他に1点   25-   25   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   M   104   38   55   染付む解文、コバルト   石灰 X   やや鬼   和戸?   明治   同文破片他に1点   25-   25   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   M   107   38   56   染付む解文、コバルト   石灰 X   やや鬼   和戸?   明治   同文破片他に1点   25-   25   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   M   107   38   56   染付む解文、コバルト   石灰 X   やや鬼   中海木?   明治   同文破片他に1点   25-   25   数米碗   B 5 場埋土 V   超   M   107   38   55   染付む解文、コバルト   石灰 X   やや鬼   中海木?   明治   同文破片他に1点   25-   25   数米碗   B 5 場埋土 V   超   M   107   38   55   染付む解文、コバルト   石灰 X   やや鬼   中海木?   明治   同文破片他に1点   25-   25   数米碗   B 5 場埋土 V   超   M   106   52   38   染付砂物文、コバルト   石灰 X   やや鬼   中海木   明治   同文破片他に1点   25-   35   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   M   106   52   38   染付砂がな、コバルト   石灰 X   やや鬼   中海木   明治   同文破片他に1点   25-   35   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   M   104   38   55   染付砂がな、コバルト   石灰 X   やや鬼   やや鬼   平海木   明治   同文破片他に1点   25-   36   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   M   104   38   55   染付砂がな、コバルト   石灰 X   やや鬼   やや鬼   平海木   明治   同文破片他に1点   26-   36   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   M   104   38   55   染付砂がな、コバルト   石灰 X   音   平海木   明治   同文破片他に1点   26-   40   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   L   108   36   56   杂付が、、コバルト   石灰 X   音   平海木   明治   同文破片他に21点   26-   40   数茶碗   B 5 場埋土 V   超   L   108   37   53.5   染付を腐、、コバルト   石灰 X   音   平海木   明治   同文破片他に21点   26-   40   数末碗   B 5 場埋土 V   超   L   108   37   53.5   染付を腐な、コバルト   石灰 X   音   平海木   明治   同文破片他に21点   26-   40   数末碗   B 5 場埋土 V   超   L   108   37   53.5   染付を腐な、コバルト   石灰 X   音   平海木   明治   同文破片他に21点   26-   40   数末碗   B 5 場埋土 V   超   L   108   37   53.5   染付を腐な、コバルト   石灰 X   音   平海木   明治   同文破片他に21点   26-   40   数末碗   B 5 場埋土 V   超   L   108   37   53.5   染付を腐な、コバルト   石灰 X   音   平海木   明治   同文破片を   10   10   10	21	Ш	B 5 堀埋土V	磁	М	144	56	31	染付、型打ち波に鷹、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	瀬戸	明治	同文破片他に4点	25-1
24 数系碗蓋 B 4 堀埋土 V 磁 M 120       54 56 染付採に昆虫、コバルト       石灰 X やや唐 やや良 瀬戸? 明治 同文族片他に 6.点 25-26 飯茶碗 B 5 堀埋土 V 磁 M 109       40 48 器餘社分文、コバルト       石灰 X やや唐 やや良 瀬戸? 明治 同文族片他に 1.点 25-27 飯茶碗 C 4 堀埋土 V 磁 M 109       40 48 器餘社分文、コバルト       石灰 X やや唐 やや良 瀬戸? 明治 同文族片他に 1.点 25-27 飯茶碗 B 4 堀埋土 V 磁 M 104 36.5 50 染付牡丹文、四須 石灰 X やや唐 やや良 不明 明治	22	Ш	B 4 堀埋土V	磁	Р	142	60	32	染付唐草文?、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	不明	明治	同文破片他に451点	25-2
25 版茶碗   B 5 場埋土 V 起 M   120   54   56 条件家に見虫。コバルト   石灰 × やや密 やや良 平前   明治   同文破片他に1点   25-   版茶碗   C 4 場埋土 V 起 M   109   40   48 階級社丹文、コバルト   石灰 × やや宿 やや良 平前   明治   19C   25-   25 版茶碗   C 4 場埋土 V 起 M   104   36.5   50 条件社丹文、具須   石灰 × やや宿 やや良 平前   明治   同文破片他に1点   25-   26 飯茶碗   B 5 場埋土 V 起 M   104   36.5   50 条件社丹文、具須   石灰 × やや宿 やや良 平前   明治   同文破片他に1点   25-   30 飯茶碗   B 4 場埋土 V 起 M   107   38   56 条件軟元、具須   石灰 × 普 曹 瀬戸?   明治   同文破片他に1点   25-   31 飯茶碗   B 5 場埋土 V 起 M   104   35   52 条件性皆報文、コバルト   石灰 × 普 曹 瀬戸?   明治   同文破片他に2点   25-   32 飯茶碗   B 5 場埋土 V 起 M   104   35   52 条件整備性文 2 コバルト   石灰 × 普 曹 瀬戸?   明治   同文破片他に3点   25-   33 飯茶碗   B 5 場埋土 V 起 M   106   52   38 条件部級協に復文?、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に3点   25-   35 飯茶碗   B 4 場埋土 V 起 M   104   38   55 条件部式   25-   45 飯茶碗   B 4 場埋土 V 起 M   104   38   55 条件部式   25-   女件成本に扱文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に3点   25-   新森碗   B 5 場埋土 V 起 M   104   38   55 条件部式   25-   女件成本に扱文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に3点   25-   新森碗   B 5 場埋土 V 起 M   104   38   55 条件でに1乗、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に3点   25-   が 板深碗   B 5 場埋土 V 起 M   104   38   55 条件が出稿、コバルト   石灰 × や密 やや良 平清水   明治   同文破片他に3点   25-   新森碗   B 5 場埋土 V 起 M   104   38   55 条件が出稿、コバルト   石灰 × や密   平清水   明治   同文破片他に3点   25-   40 飯茶碗   B 4 場埋土 V 起 L   112   38   54 条件が内海ス、コバルト   石灰 × 普 曹 平清水   明治   同文破片他に3点   26-   41 飯茶碗   B 4 場埋土 V 起 L   108   37   35.5 条件石榴文、コバルト   石灰 × 普 曹 平清水   明治   同文破片他に32点   26-   42 紅入 B 4 場埋土 V 起 L   108   37   35.5 条件石榴文、コバルト   石灰 × 普 曹 平清水   明治   同文破片他に32点   26-   44 小型碗   B 4 場埋土 V 起 L   108   37   35.5 条件が高文、コバルト   石灰 × 普 曹 平清水   明治   同文破片他に32点   26-   42 紅入 B 4 場埋土 V 起 L   108   36   56 条件が入。コバルト   石灰 × 普 曹 肥前   17 C後半   26-   44 小型碗   B 4 場埋土 V 起 L   108   36   56 条件が上の手紙   105   26 条件数   26-   45 飯本碗   79   超 M M 80 条件物文、コバルト   石灰 × やや密   24 条件   24 条件   26 条件   26 条件   26 条件   27 条件   27 条件   26 条件   27 条件   27 条件   27 条件   26 条件   27 条件   27 条件   26 条件   27 条件   27 条件   27 条件   27 条件   27 条件	23	飯茶碗蓋	B 4 堀埋土V	磁	М	125	-	30	染付雀文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	瀬戸?	19C	同文破片他に3点	25-3
25   飲来碗   C 4 福埋土 V   截 M   109   40   48   指給牡丹文 コバルト   石灰 × やや密 やや良 不明   明治   25 - 25   飲来碗   C 4 福埋土 V   截 S   116   38   46   指給財力文 コバルト   石灰 × 神密   やや良 不明   明治   25 - 25   飲来碗   B 5 福埋土 V   截 S   104   - 一 案付牡丹文   呉須   石灰 × 神密   やや鬼 不明   19 C   25 - 25   飯来碗   B 4 福埋土 V   截 M   104   36.5   50 案付牡丹文   コバルト   石灰 × やや密   やや鬼 不明   明治   同文碳片他に12点   25 - 30   飯来碗   B 4 福埋土 V   截 M   107   38   56 案付整化文   呉須   石灰 × 曹   曹   瀬戸?   第末前後   同文碳片他に28点   25 - 32   飯来碗   B 5 福埋土 V   截 M   104   35.5   案付整件業業文   コバルト   石灰 × 曹   曹   瀬戸?   明治   同文碳片他に3点   25 - 33   飯来碗   B 5 福埋土 V   截 M   104   35   52 案付整行権之   コバルト   石灰 × 中や密   やや良   平清水   明治   同文碳片他に11点   25 - 35   飯来碗   B 5 福埋土 V   截 M   106   52   38 案付撤結に償文 ? コバルト   石灰 × やや密   やや皮   平清水   明治   同文碳片他に3点   25 - 35   飯来碗   B 5 堀埋土 V   截 M   104   38   55 案付整括に復文   コバルト   石灰 × やや密   やや皮   平清水   明治   同文碳片他に3点   25 - 35   飯来碗   B 5 堀埋土 V   截 M   104   38   55 案付整稿、コバルト   石灰 × やや密   やや皮   平清水   明治   同文碳片他に41点   25 - 35   飯来碗   B 5 堀埋土 V   截 M   104   38   55 案付総稿、コバルト   石灰 × やや密   やや皮   平清水   明治   同文碳片他に41点   26 - 36   飯来碗   B 5 堀埋土 V   截 M   104   38   52 案付整付権   コバルト   石灰 × 神密   中や皮   平清水   明治   同文碳片他に41点   26 - 36   飯来碗   B 4 堀埋土 V   截 L   108   36   56   条付整付権   コバルト   石灰 × 曹   華   平清水   明治   同文碳片他に41点   26 - 36   飯来碗   B 4 堀埋土 V   截 L   108   36   56   条付を付換文   コバルト   石灰 × 曹   華   平清水   明治   同文碳片他に41点   26 - 40   飯末碗   B 4 堀埋土 V   截 L   106   38   54   条付を付換文   コバルト   石灰 × 曹   華   平清水   明治   同文碳片他に3点   26 - 40   飯末碗   B 4 堀埋土 V   截 L   108   37   53.5   条付む付換文   コバルト   石灰 × 曹   華   平清水   明治   同文碳片他に32点   26 - 40   飯末碗   B 4 堀埋土 V   截 L   108   37   53.5   条付む付換文   コバルト   石灰 × 曹   華   平清水   明治   同文碳片他に32点   26 - 40   00   年末碗   日本   10   10   10   10   10   10   10   1	24	飯茶碗蓋	B 4 堀埋土V	磁	L	133	-	27	染付蝶に昆虫、コバルト	石灰	×	やや密	タやウ	瀬戸?	明治	同文破片他に6点	25-4
27    飯茶碗   C 4 堀埋土V   磁   S   116   38   46   指絵桐文化、コバルト   石灰   × やを棺   巻 下海水? 明治   19C   25—28   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   S   104   — 字付牡丹文、貝須   石灰   × やや棺   巻 不明   19C   25—30   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁   M   104   36.5   50   染付牡丹文、コバルト   石灰   × やや密   やや良   不明   明治   同文碳片他に12点   25—31   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   104   35   52   染付牡丹文、コバルト   石灰   × 巻で密   やや良   平清水   明治   同文碳片他に23点   25—33   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   104   35   52   染付牡丹技、コバルト   石灰   × 巻で密   やや良   平清水   明治   同文碳片他に3点   25—33   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   104   35   52   染付牡丹技、コバルト   石灰   × 巻で密   やや良   平清水   明治   同文碳片他に3点   25—33   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   104   38   55   染付匙代稿之、コバルト   石灰   × やや密   やや良   平清水   明治   同文碳片他に3点   25—35   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   104   38   55   染付匙代稿之、コバルト   石灰   × やや唇   やや良   平清水   明治   同文碳片他に3点   25—36   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   104   38   55   染付匙代稿之、コバルト   石灰   × やや唇   やや良   平清水   明治   同文碳片他に3点   25—37   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   104   38   55   染付匙代稿之、コバルト   石灰   × やや唇   やや良   平清水   明治   同文碳片他に41点   26—38   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   L   108   35   55   染付匙代稿之、コバルト   石灰   × 巻   番   平清水   明治   同文碳片他に41点   26—39   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁   L   108   36   56   染付比介稿之、コバルト   石灰   × 番   番   平清水   明治   同文碳片他に3点   26—40   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁   L   106   38   54   染付上の付稿之、コバルト   石灰   × 番   番   平清水   明治   同文碳片他に3点   26—41   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   L   106   38   54   染付上の付稿之、コバルト   石灰   ※ 番   番   平清水   明治   同文碳片他に32点   26—42   紅人   日本   104   日本   104	25	飯茶碗	B5堀埋土V	磁	М	120	54	56	染付蝶に昆虫、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	瀬戸?	明治	同文破片他に1点	25 5
25   8	26	飯茶碗	C 4 堀埋土V	磁	М	109	40	48	摺絵牡丹文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	不明	明治		25-6
29   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 M   104   36.5   50   条件牡丹文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 不明   明治   同文碳片他に12点   25-30   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 M   107   38   55   条件螺花文、具須   石灰 × 書 書   瀬戸?   幕末前後   同文碳片他に28点   25-32   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   35   52   条件螺花文、コバルト   石灰 × 書 書   瀬戸?   明治   同文碳片他に28点   25-33   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   106   52   38   条件螺花(複文?、コバルト   石灰 × やや密   やや良 平清木?   明治   同文碳片他に11点   25-35   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 M   104   38   55   条件螺花(複文?、コバルト   石灰 × やや密   やや良 平清木?   明治   同文碳片他に11点   25-35   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 M   104   38   55   条件砂点(複文)、コバルト   石灰 × やや密   やや良 平清木   明治   同文碳片他に3点   25-35   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 M   104   38   55   条件砂点(譲入、コバルト   石灰 × やや密   平清木   明治   同文碳片他に3点   25-36   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   38   55   条件砂片幅文、コバルト   石灰 × や密   やや良   平清木   明治   同文碳片他に3点   25-36   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   38   55   条件砂片幅文、コバルト   石灰 × 書 書   平清木   明治   同文碳片他に41点   26-36	27	飯茶碗	C 4 堀埋土V	磁	S	116	38	46	摺絵桐文他、コバルト	石灰	×	普	普	平清水?	明治		25-7
30   飯茶碗   B 4   場埋土 V   磁   M   107   38   56   染付繁花文、呉須   石灰   著   著   瀬戸?   幕末前後   同文破片他に 8 点   25 - 31   飯茶碗   B 5   場埋土 V   磁   L   109   38   55   染付整繁文、ユベルト   石灰   著   著   瀬戸?   明治   同文破片他に 8 点   25 - 32   飯茶碗   B 5   場埋土 V   磁   M   104   35   52   染付松竹梅文、コベルト   石灰   ※ やや密   やや良   平清水   明治   同文破片他に 13 点   25 - 33   飯茶碗   B 5   場埋土 V   磁   M   106   52   38   染付総精に 12   スペルト   石灰   ※ やや密   やや良   平清水   明治   同文破片他に 13 点   25 - 35   飯茶碗   B 5   場埋土 V   磁   M   104   38   55   染付総精に 12   スペルト   石灰   ※ やや密   やや良   平清水   明治   同文破片他に 13 点   25 - 36   飯茶碗   B 5   場埋土 V   磁   M   104   38   55   染付総精、コベルト   石灰   ※ やや密   やや良   平清水   明治   同文破片他に 3 点   25 - 37   飯茶碗   B 5   場埋土 V   磁   M   104   38   52   染付松竹梅文、コベルト   石灰   ※ 普   第   平清水   明治   同文破片他に 13 点   25 - 37   飯茶碗   B 5   場埋土 V   磁   L   112   38   54   染付松竹梅文、コベルト   石灰   ※ 普   第   平清水   明治   同文破片他に 14 点   26 - 39   飯茶碗   B 4   場埋土 V   磁   L   108   36   56   染付かで 1 スペルト   石灰   ※ 普   第   平清水   明治   同文破片他に 12 点   26 - 40   飯茶碗   B 4   場埋土 V   磁   L   108   37   35.5   染付石榴文、コベルト   石灰   ※ 普   著   平清水   明治   同文破片他に 22 点   26 - 42   上入   B 4   場埋土 V   磁   L   108   37   35.5   染付石榴文、コベルト   石灰   ※ 普   部前   17 C後半   26 - 44   小型碗   B 4   場埋土 V   磁   L   42   56   24   染付菊草文、コベルト   石灰   ※ 普   部前   17 C後半   26 - 44   小型碗   B 4   場埋土 IX   磁   M   104   -     ※ 中付加本文、呉須   石灰   ※ 普   部前   17 C後半   26 - 44   小型碗   B 4   場埋土 IX   磁   M   104   -   ※ 中付加本文、呉須   石灰   ※ 普   部前   17 C後半   18   日文破片他に 15   26   44   小型碗   B 4   場埋土 IX   磁   M   104   -   ※ 中付加本文、呉須   石灰   ※ 普   部前   17 C後半   18   日文破片他に 15   26   44   小型碗   B 4   場埋土 IX   磁   M   104   -   ※ 中付加本文、呉須   石灰   ※ 普   部前   17 C後半   10   18   18   18   18   18   18   18	28	飯茶碗	B 5 堀埋土V	磁	S	104	_	-	染付牡丹文、呉須	石灰	×	やや粗	普	不明	19 C		25-8
5   数系碗   B 5 堀埋土 V   磁   L   109   38   55   染付雲繁文、コバルト   石灰 × 普   普   瀬戸?   明治   同文破片他に28点   25-32   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 M   104   35   52   染付松竹梅文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清木?   明治   同文破片他に3点   25-33   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 M   106   52   38   染付松竹梅文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清木   明治   同文破片他に11点   25-35   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 M   104   38   55   染付をに近え、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清木   明治   同文破片他に3点   25-36   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 M   104   38   55   染付をに土筆、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清木   明治   同文破片他に3点   25-36   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 M   104   38   55   染付を竹梅文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清木   明治   同文破片他に3点   25-36   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 M   104   38   52   染付を竹梅文、コバルト   石灰 × 普   普   平清木   明治   同文破片他に41点   26-38   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 L   112   38   54   染付を竹梅文、コバルト   石灰 × 普   普   平清木   明治   同文破片他に41点   26-40   飯茶碗   B 4 堀埋土 V   磁 L   108   36   56   染付竹文、コバルト   石灰 × 普   普   平清木   明治   同文破片他に21点   26-40   飯茶碗   B 5 堀埋土 V   磁 L   108   37   53.5   染付を摘文、コバルト   石灰 × 普   普   平清木   明治   同文破片他に32点   26-40   板茶碗   B 4 堀埋土 V   磁 L   108   37   53.5   染付を積文、コバルト   石灰 × 普   普   平清木   明治   同文破片他に32点   26-40   板茶碗   B 4 堀埋土 V   磁 L   108   37   53.5   染付を摘文、コバルト   石灰 × 普   普   肥前   17 C 後半   26-40   18   18   19   19   19   19   19   19	29	飯茶碗	B 4 堀埋土V	磁	М	104	36.5	50	染付牡丹文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	不明	明治	同文破片他に12点	25-9
22	30	飯茶碗	B 4 堀埋土V	磁	М	107	38	56	染付繫花文、呉須	石灰	×	普	普	瀬戸?	幕末前後	同文破片他に8点	25-10
33   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁   M   106   52   38   条件縦縞に横文?、コバルト   石灰   × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に11点   25-35   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁   S   110	31	飯茶碗	B 5 堀埋土V	磁	L	109	38	55	染付雲繁文、コバルト	石灰	×	普	普	瀬戸?	明治	同文破片他に28点	25-11
25   数条碗   B 4 堀埋土V   越   S   110   一   染付流水に横文、コバルト   石灰   × やや密   やや良   平清水   明治   同文破片他に31点   25 - 35   飯茶碗   B 5 堀埋土V   越   M   104   38   55   染付躯に主集、コバルト   石灰   × やや密   やや良   平清水   明治   同文破片他に30点   25 - 37   飯茶碗   B 5 堀埋土V   越   M   104   38   52   染付舩竹梅文、コバルト   石灰   × 管 音   平清水   明治   同文破片他に41点   26 - 38   飯茶碗   B 5 堀埋土V   越   L   112   38   54   染付松竹梅文、コバルト   石灰   × 管 音   平清水   明治   同文破片他に41点   26 - 39   飯茶碗   B 4 堀埋土V   越   L   112   38   54   染付松竹梅文、コバルト   石灰   × 管 音   平清水   明治   同文破片他に41点   26 - 39   飯茶碗   B 4 堀埋土V   越   L   108   36   56   染付竹文、コバルト   石灰   × 管 音   平清水   明治   同文破片他に21点   26 - 40   飯茶碗   B 5 堀埋土V   越   L   108   36   56   染付かえのけんに30点   25 - 36   上 108   37   53.5   染付石榴文、コバルト   石灰   × 管 音   平清水   明治   同文破片他に21点   26 - 41   飯茶碗   B 4 堀埋土V   越   L   42   56   24   24   24   24   24   24   24   2	32	飯茶碗	B 5 堀埋土 V	醚	М	104	35	52	染付松竹梅文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水?	明治	同文破片他に3点	25-12
55   飯茶碗   B 5 堀埋土V   越   M   104   38   55   染付兎に土棄、コバルト   石灰   × やや密   やや良 平清水   明治   同文破片他に30点   25-   10   10   10   10   10   10   10   1	33	飯茶碗	B 5 堀埋土V	磁	М	106	52	38	染付縦縞に楓文?、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	平清水?	明治	同文破片他に11点	25-13
36   飯茶碗   B 4 堀埋土V   蔵 L   108   35   55   染付級橋、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に30点   25-   37   飯茶碗   B 5 堀埋土V   蔵 L   112   38   54   染付松竹梅文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に41点   26-   39   飯茶碗   B 4 堀埋土V   蔵 L   112   38   54   染付松竹梅文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に21点   26-   40   飯茶碗   B 4 堀埋土V   蔵 L   108   36   56   染付松大桶文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に21点   26-   40   飯茶碗   B 5 堀埋土V   蔵 L   108   36   56   染付松大桶文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に21点   26-   41   飯茶碗   B 5 堀埋土V   蔵 L   108   37   53.5   染付石榴文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に21点   26-   42   紅入   B 4 堀埋土V   蔵 L   42   56   24   染付菊草文、コバルト   石灰 × 普 普   平清水   明治   同文破片他に32点   26-   43   皿   B 4 堀埋土IX   蔵 S 型打文   石灰 × 普 普   肥前   17 C後半   26-   44   小型碗   B 4 堀埋土IX   ൽ M   104   染付山水文、泉須   石灰   ・ やや田   廿い   肥前   18 C   26-   45   飯茶碗   不明	34	飯茶碗	B4堀埋土V	磁	S	110	_	_	染付流水に楓文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	平清水	明治		25-14
37   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 M   104   38   52   染付松竹梅文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に41点   26-38   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 L   112   38   54   染付松竹梅文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   日文破片他に41点   26-39   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 L   108   36   56   染付竹文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に21点   26-40   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 L   108   37   53.5   染付石榴文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に21点   26-41   飯茶碗   B 5 堀埋土V   磁 L   108   37   53.5   染付石榴文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   同文破片他に21点   26-41   飯茶碗   B 4 堀埋土V   磁 L   42   56   24   染付菊草文、コバルト   石灰 × 普 普   配前   17 C後半   26-44   小型碗   B 4 堀埋土IX   磁   M   104   -   -   染付山水文、泉須   石灰 × 中や密   やや良   平清水   明治   同文破片他に9点   26-45   飯茶碗   不明   磁 L   110   38   56   染付松に雪輪文、コバルト   石灰 × 中や密   やや良   平清水   明治   同文破片他に9点   26-45   飯茶碗   不明   3 層   磁 M   80   -     ・   染付桐文、コバルト   石灰 × 普 普   全津本郷   明治   同文破片他に9点   26-47     次吹   不明   3 層   磁 S   5 8   -     ・   染付桐文、コバルト   石灰 × 普 普   配前   18 C後半-19 C   26-47   次吹   不明   3 層   磁 S   5 8   -     ・   染付桐文、コバルト   石灰 × 普 普   配前   18 C後半-19 C   26-47     次吹   不明   3 層   磁 S   5 8   -	35	飯茶碗	B 5 堀埋土V	磁	М	104	38	55	染付兎に土筆、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	平清水	明治	同文破片他に3点	25—15
8   版茶碗   B 5 堀埋土V   磁 L   112   38   54   染付於竹梅文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水   明治   26- 26- 26- 26- 26- 26- 26- 26- 26- 26-	36	飯茶碗	B 4 堀埋土V	磁	L	108	35	55	染付縦縞、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	平清水	明治	同文破片他に30点	25-16
39 版茶碗 B 4 堀埋土V	37	飯茶碗	B 5 堀埋土V	磁	М	104	38	52	染付松竹梅文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治	同文破片他に41点	26-1
40	38	飯茶碗	B 5 堀埋土V	磁	L	112	38	54	染付松竹梅文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治		26-2
41 飯茶碗 B 5 堀埋土V   磁 L 108 37 53.5 染付石榴文、コバルト   石灰 × 普 普 平清水 明治   同文破片他に32点 26—42 紅入 B 4 堀埋土V   磁 L 42 56 24 染付菊草文、コバルト   石灰 × 密 良 不明 明治   26—43 皿 B 4 堀埋土IX 磁 S 型打文   石灰 × 普 普 肥前 17 C後半 26—44 小型碗 B 4 堀埋土IX 磁 M 104 染付山水文、呉須   石灰 ○ やや相 甘い 肥前 18 C 26—45 飯茶碗 不明   磁 L 110 38 56 染付松に雪輪文、コバルト   石灰 × 壱・密 やや良 平清水 明治   同文破片他に9点 26—46 土瓶蓋 F 3 3 層 磁 M 80 染付桐文、コバルト   石灰 × 普 普 金津本郷 明治   26—47   灰吹 不明 3 層 磁 S 58 染付桐文、ユバルト   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—48   日本版書 F 3 3 層 磁 S 58 染付桐文、ユバルト   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—49   日本版書 F 3 3 層 磁 S 58 染付桐文、ユバルト   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—49   日本版書 F 3 3 層 磁 S 58 染付桐文、ユバルト   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—49   日本版書 F 3 3 層 磁 S 58 染付桐文、ユバルト   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 磁 S 58 染付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 5 8 染付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 5 8 染付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 5 8 杂付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 5 8 杂付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 5 8 杂付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 5 8 杂付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C後半~19 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 8 杂付桐文、具須   石灰 × 普 普 肥前 18 C 26—40   日本版書 F 3 3 層 M 5 5 8 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	39	飯茶碗	B 4 堀埋土V	磁	L	108	36	56	染付竹文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治		26-3
42   紅入   B 4 堀埋土V   磁 L   42   56   24   染付菊草文、コバルト   石灰 × 密   良   不明   明治   26—   43   皿   B 4 堀埋土IX   磁 S   − − − 型打文   石灰 × 普   者   肥前   17 C後半   26—   44   小型碗   B 4 堀埋土IX   磁 M   104   −   染付山水文、呉須   石灰 ○ やや相 甘い   肥前   18 C   26—   45   飯茶碗   不明   磁 L   110   38   56   染付松に雪輪文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に9点   26—   46   土瓶蓋   F 3   3   層   磁 M   80   −   染付桐文、コバルト   石灰 × 普   者   会津本郷   明治   26—   47   灰吹   不明   3   層   磁 S   58   −   -   染付桐文、具須   石灰 × 普   者   肥前   18 C後半−19 C   26—   46   上間が   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日	40	飯茶碗	B 4 堀埋土V	磁	L	106	38	54	染付よろけ縞文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治	同文破片他に21点	26-4
43 □ □   B 4 堀埋土IX   磁 S   -   - 型打文   石灰 × 書 書 肥前   17 C後半   26 - 44 小型碗   B 4 堀埋土IX   磁 M   104   -   染付山水文、呉須   石灰   マや粗 甘い、肥前   18 C   26 - 45 飯茶碗 不明   磁 L 110   38 56 染付松に雪輪文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水 明治   同文破片他に9点   26 - 46 土瓶蓋   F 3 3 層   磁 M   80   -   染付桐文、コバルト   石灰 × 書 書 肥前   18 C後半~19 C   26 - 47   灰吹   不明   3 層   磁 S 5 8   -   染付桐文、具須   石灰 × 書 書 肥前   18 C後半~19 C   26 - 48   47   ステレー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	41	飯茶碗	B 5 堀埋土V	磁	L	108	37	53.5	染付石榴文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治	同文破片他に32点	26-5
44   小型碗 B 4 堀埋土IX   磁 M   104   -   -   染付山水文、呉須   石灰 ○ やや相 甘い   肥前   18C   26-    45   飯茶碗   不明   磁 L   110   38   56   染付松に雪輪文、コバルト   石灰 × やや密 やや良 平清水   明治   同文破片他に9点   26-    46   土瓶蓋   F 3   3 層   磁 M   80   -     染付桐文、コバルト   石灰 × 普   普   売車   売車   日本郷	42	紅入	B 4 堀埋土V	磁	L	42	56	24	染付菊草文、コバルト	石灰	×	密	良	不明	明治		26-6
45 飯茶碗     不明     磁 L     110     38     56     染付松に雪輪文、コバルト     石灰 × やや密 やや良 平清水     明治     同文破片他に9点     26-       46 土瓶蓋 F3 3層 磁 M     80 - 染付桐文、コバルト     石灰 × 普 普 会津本郷     明治     26-       47 灰吹 不明 3層 磁 S     58 染付桐文、コバルト     石灰 × 普 普 肥前     18C後半~19C     26-	43	Ш	B 4 堀埋土IX	磁	S	_	_	_	型打文	石灰	×	普	普	肥前	17℃後半		26-7
46     土瓶蓋     F 3 3層     磁 M 80 ー - 架付嗣文、コバルト     石灰 × 普 普 会津本郷 明治     26-       47     灰吹 不明 3層     磁 S 58 ー - 染付桐文、呉須     石灰 × 普 普 肥前 18C後半~19C     26-	44	小型碗	B 4 堀埋土IX	磁	М	104	_	-	染付山水文、呉須	石灰	0	やや粗	甘い	肥前	18C		26-8
47 灰吹     不明 3層 磁 S 58 染付桐文、呉須     石灰 × 普 普 肥前 18C後半~19C     26-	45	飯茶碗	不明	磁	L	110	38	56	染付松に雪輪文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	平清水	明治	同文破片他に9点	26-9
170 170 170 170 170 170 170 170 170 170	46	土瓶蓋	F 3 3層	醚	М	80	_		染付桐文、コバルト	石灰	×	普	普	会津本郷	明治		26-10
48   小型碗   不明   3層   磁  M   84   34   37.5   染付慶花文?、コバルト   石灰 ×   音   音   不明   明治   同立端片価に3占   26—	47	灰吹	不明 3層	醚	S	58	_	_	染付桐文、呉須	石灰	×	普	普	肥前	18C後半~19C		26-13
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	48	小型碗	不明 3層	磁	М	84	34	37.5	染付蔓花文?、コバルト	石灰	×	普	普	不明	明治	同文破片他に3点	26-11

### 表15 第8地点出土陶磁器観察表(2)

Tab. 15 Notes on ceramics at NM8 (2)

1 ab. 13 tvotes on ceramics at tvivio (2)																
番号	器形	出土場所	種類	残存	1 2	底径	聖中	文 様 等	租種類	薬	胎土	焼成	産地	時 期	備考	写真 図版
49		EF 3層	磁	M	- UE	64	- that [40]	染付波に扇文、呉須	但短	0	やや粗	やや甘	肥前	18C		26-12
50	飯茶碗	不明 3層	磁	М	110	36	56	染付葦草文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治	同文破片他に3点	26-14
51	飯茶碗	F 3 3層	磁	L	116	48		染付桐・稲束他、呉須	石灰	×	やや密		肥前	18C	P1240711014 07M	26-15
52	飯茶碗	不明 3層	磁	L	115	39	49	銅版、日本万歳勲章文	石灰	×	良	良	瀬戸	明治以降		26-16
53	鉢	不明 3層	磁	М	112	_	_	染付牡丹唐草文、呉須、焼継ぎ	石灰	×	普	普	肥前	18 C		26-17
54	小型碗	不明 5層	磁	S	84	_	_	染付唐草文、コパルト	石灰	×	良	良	不明	明治以降		26-18
55	湯吞茶碗	不明 5 層	磁	L	58	36	62	型打編籠形、上絵草花文	鮫肌	×	普	普	会津本郷	明治中期以降		26-19
56	Ш	F 2 5層	磁	L	139	57	29	染付、型押し波に松、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	瀬戸	明治	同文破片他に7点	26-20
57	飯茶碗	不明 5層	磁	М	112	48	_	染付花蔓文、呉須	石灰	×	普	普	肥前	18C後半~19C		26-21
58	飯茶碗	F 2 5層	磁	L	110	39	54	染付割菊花散し文、コバルト	石灰	×	やや密	やや良	平清水	幕末前後	同文破片他に10点	26-22
59	飯茶碗	F 2 5層	磁	L	102	40	56	染付笹に雪文、コバルト	石灰	×	やや密	普	平清水	明治	同文破片他に 6 点	26-23
60	飯茶碗	F 2 5層	磁	М	106	40	50	染付垣に笹文、コバルト	石灰	×	やや粗	普	平清水	明治	同文破片他に7点	26-24
61	飯茶碗	F 2 5層	磁	L	107	40	51	染付垣に笹文、コバルト	石灰	×	普	普	平清水	明治	60と同文様	26-25
62	飯茶碗	B 3 6 層	磁	М	110	36	57	染付よろけ縞、上絵松葉、コバルト	石灰	×	やや密	普	平清水	明治	同文破片他に3点	26-26
63	秉燭	不明堀埋土I	陶	М	54	-		無文	鉄釉	0	密	やや良	大堀相馬	不明	70.17.1	27-1
64	Ш	不明堀埋土I	陶	S	268	-	-	三島手	灰釉	0	普	やや良	唐津	17 C		27—2
65	Ш	不明堀埋土 I	陶	S	_	98	-	三島手	灰釉	0	普	普	唐津	18 C		27-3
66	Ш	不明堀埋土 I	陶	S		119	-	刷毛目	灰釉	0	やや粗	普	唐津	18 C		27 4
67	瓶掛	不明堀埋土II	陶	S	-	-	-	貼付雲龍文	緑釉	0	やや粗	普	瀬戸美濃	18 C		27—5
68	豆甕	不明堀埋土II	陶	М	52		-	無文	鉄釉	0	普	普	大堀相馬	不明		27 6
69	鉢	不明堀埋土II	陶	S	216	-	-	刻文	灰釉	0	やや密	普	大堀相馬	不明		27 — 7
70	徳利	不明堀埋土IV	陶	S	-	50	-	鉄釉浸掛け	糠白	0	密	やや良	大堀相馬	不明		27-8
71	Ш	C 4 堀埋土IV	陶	S	-	-	-	無文	灰釉	0	やや粗	普	美濃	17 C		27-10
72	豆甕	D 4 堀埋土IV	陶	S	-	35	-	無文	鉄釉	×	やや粗	やや甘	不明	不明	底面に墨書有	27-11
73	土瓶蓋	D 4 堀埋土IV	陶	Р	51	*****	21	無文	糠白	0	やや密	やや良	大堀相馬	19C		27 9
74	Ш	D 4 堀埋土IV	陶	S	-	46	_	無文、蛇ノ目釉剝、漆継?	青釉	×	普	普	肥前	17C後半~18C		27-12
75	灯明皿	B 4 堀埋土V	陶	L	58	32	17	無文	鉄釉	0	密	やや良	大堀相馬	19 C		27—13
76	土瓶	B 5 堀埋土V	陶	L	70	78	124	無文	灰釉	0	密	やや良	大堀相馬	19C		27—14
77	Ш.	B 4 堀埋土VII	陶	S	120	-	-	無文	青釉	×	普	普	肥前	17C後半~18C		28-1
78	擂鉢	B 4 堀埋土Ⅷ	陶	S	~~	-	-	無文	鉄釉	×	やや粗	良	不明	不明		28-2
79	大平鉢	不明堀埋土IX	陶	S	-	108	-	鉄絵、葦草文	灰釉	0	普	普	美濃瀬戸	17 C		28-3
80	Ш	不明	陶	S	-	90	-	無文	灰釉	0	やや密	良	不明	不明		28 4
81	小型碗	不明 3層	陶	М	64	30	38	無文	灰釉	0	密	やや良	大堀相馬	18C後半~19C		28-5
82	火入	不明 3層	炻	М	-	150	-	摺絵、菊花文	石灰	×	やや密	普	平清水	明治		28 7
83	擂鉢	不明 5層	陶	S	132			無文	鉄釉	×	普	普	不明	19C		28-6
84	小鉢	C 2 5層	陶	S	93		-	無文	鉄釉	×	やや密	普	不明	不明		28-8
85	m	不明 6層	陶	S	_	51	-	灰釉掛け分け	鉄釉	0	やや密	やや良	大堀相馬	18C後半~19C		28-9
86	Ш	C 3 7層	陶	S		_	-	無文	灰釉	0	普	普	唐津	16C後半~17C		28-11
87	碗	B3 7層	陶	S		53	_	無文	灰釉	0	やや密	普	美濃瀬戸	18C		28-10
88	向付	C 3 7層	陶	S	_	_	40	垣根に草花文、鉄釉	長石	0	普	普	美濃	16C		28-12

#### B. 瓦 (図58 · 59)

大部分は $3\cdot4$  層、および堀埋土III層~V層の陸軍第二師団時代のものである(表16)。江戸時代初期の可能性がある $5\sim7$  層および堀埋土IX層出土のものもわずかにあるが、全体に量が少なく、小さな破片が多い。以下に採り上げたものの中では軒丸瓦と道具瓦各1点がそれにあたる。分析の手続きは第7地点に同じ。

#### 軒丸.瓦.類

巴+連珠文の破片1点のみ。

### 軒平瓦類

唐草文+梅(図58-3、第7地点のIV類)1点以外は瓦当部に文様がないタイプである(図58-1・2)。

### 丸瓦類

抽出可能な資料無し。

#### 平瓦類

抽出可能な資料無し。ただし反りからみてほとんどは平瓦であろう。釘穴のあるものが 5 点ある。滑り止めの櫛目のついた平瓦もしくは桟瓦も見られる(図 $58-4\sim7$ )。

#### 桟瓦類

通常の桟瓦(図59-11·12)の他に、棟に載せる角桟伏間瓦と思われるもの3点(図58-9・10)、塀桟瓦と思われるもの4点、瓦当に模様のない軒桟瓦1点がある。

### その他

水切り溝の有る瓦が4点あり(図28-8)、第6地点の例から、塀桟瓦の可能性がある。また、

表16 第8地点出土瓦集計表

Tab. 16 Distribution of roof tiles at NM 8

「破片数・重量(単位kg)の順に表示]

層遺	構	平瓦類	丸 瓦 類	軒丸瓦類	軒平瓦類	桟 瓦 類	その他	不	明
3	層	15 2.8		,		4 0.5	2 0.2	36	1.7
4	層	6 1.7	1 0.3					3	0.1
5	層	5 0.9	1 0.1		1 0.1	2 0.5		5	0.3
堀 埋	I	2 0.3						1	0.05
"	II	1 0.12				1 0.5			
"	III	9 1.5	1 0.2			1 0.07	5 1.7	7	0.5
"	IV	39 6.6	1 0.2		4 0.9	10 3.7	6 0.5	47	2.5
"	V	71 9.5	2 0.5		8 1.7	13 3.3	8 1.2	46	1.6
"	VI	3 0.5							
"	VIII	2 0.3					1 0.15		
"	IX	10 1.5	5 0.6	1 0.3			1 0.5	1	0.06
6	層	8 1.6					1 0.08	1	0.05
7	層	7 1.1				3 0.5		4	0.3
不	明	8 1.7	1 0.5			4 0.9	1 0.13	3	0.14

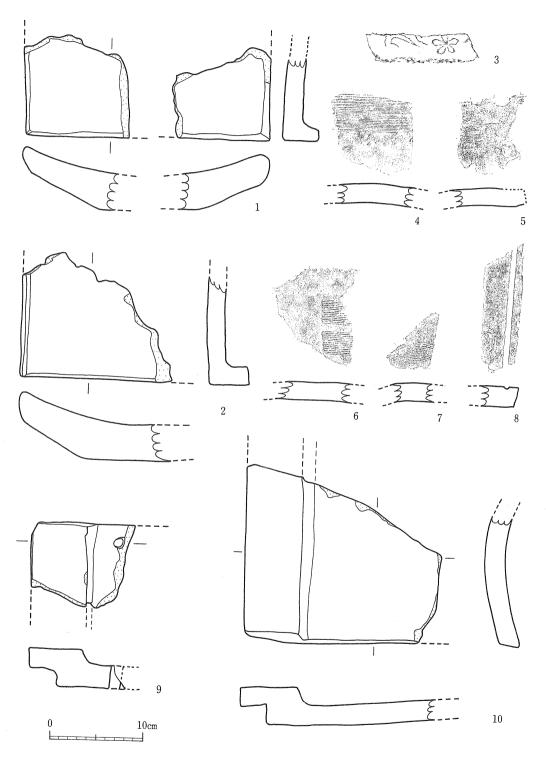
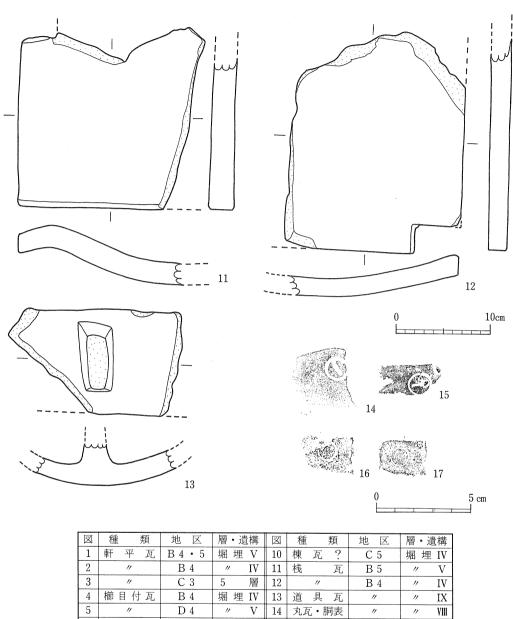


図58 第8地点出土瓦(1) Fig. 58 Roof tiles from NM 8 (1)

Meiji period



6 C 4 " " 15 不 C 4 V 7 " IV 16 桟・尻切込 D 5 // // 水切溝付瓦 B 4 " В 3 17 3 煉瓦

図59 第8地点出土瓦(2) Fig. 59 Roof tiles from NM 8 (2)

Meiji period (13 Edo period) 用途不明の道具瓦? 1点(図59-13)、刻印(丸および丸に一)のあるもの 4点がある(図59-14~17)。

#### C. 煉瓦

堀の埋土 $IV \cdot V$ 層より破片がI9点出ている。日本においては江戸時代末より特別な洋風建築物のために煉瓦が製造されたが、より普及するのは明治になってからのようである(朝倉他I970 pp.  $403\sim404$ )。

#### D. ガラス製品 (図60・61)

主に堀の埋土IV・V層よりまとまって出土している。板ガラス、容器、ボタンがある。

板ガラスの国産化は明治42年旭硝子尼崎工場で始まったもので、それ以前のものとすれば輸入品であろう(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 p. 180)。ボタンは白い不透明のガラス製で型押しのボタン(図61-23・24)。刻み目の装飾の付いたものも1点有る。二の丸第1地点出土のものと同じで肌着のボタンと推定される(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 p. 101)。

(山田しょう)

図60の1.2、4~7は褐色のガラス瓶で、色調と形態からビール瓶と考えられ、底部はいずれも上げ底を呈する。法量や細部の形態にはバラエテイが見られる。このうち4には、型による陽刻がみられ、 $\square$  WERY としるされている。これは醸造所を示す BREWERY であろう。しかし、2には何も書かれていない。日本におけるビールの製造は、明治5年以前に横浜在住のアメリカ人 William Copeland が創設した SPRING VALLEY BREWERY で製造・販売されたのが最初とされる。また明治初年以降、主に居留外国人向けに、ビールの輸入も盛んに行われた。さらに明治5年渋谷ビール、明治7年三ツ鱗ビール、明治10年開拓使ビール(札幌ビ

表17 第8地点出土その他の遺物集計表 Tab. 17 Distribution of various implements at NM 8

	煉瓦	植物	製品	ガ	ラス	製品	4	金	属	製	品		石	製品	骨角製品	皮製品	自	然 遺 物	ō
	M N	製品	木端等	板	容器	ボタン		製		品		不明	1 1 1	※ ロロ	月円製加	及製加	植	物	動物
3 層		板 7	1	7	41	2	薬夾1					8					クルミ2	:、木1	
4 層		角材1 容器底1	7		7							1					竹 2		
5 層					3							1							
C-2, 3 ピット							キセル	1											
堀埋I		板 1																	
II					2								スレ	- F 1					
III			2		7							1							
IV	4	桶側板1	1	9	67	4						1	硯2	、砥石1		3			1
V	15	縄1	6	145	42	21	洋釘3、 薬夾2、	和金	J1、 ニル1	寛永通5 、針金1	ī 1	8	硯2 スレ	、石筆 6 ート 3	笄 2 ボタン 1	2	クルミ2	、他種子1	3
VII					1														
VIII												1							
6層			1	2	1							1							
7層					1								スレ	- F 1					
不明		板1		4	15	1						1							

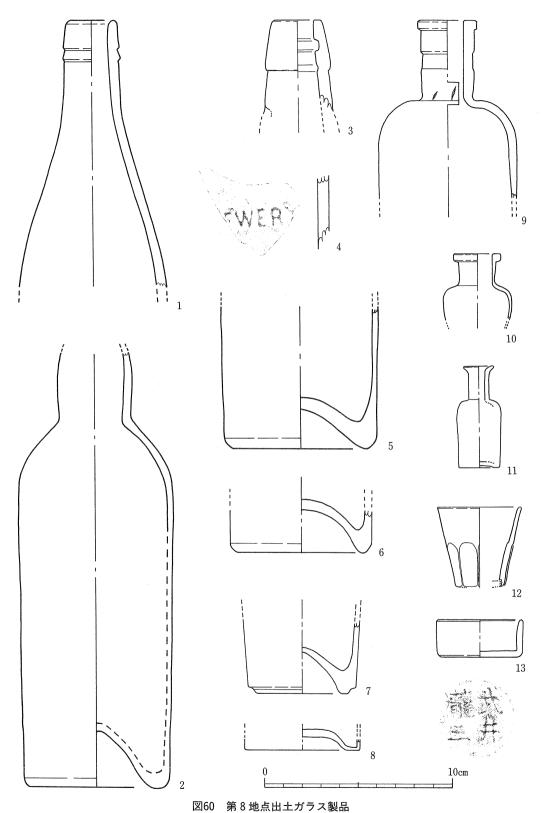


Fig. 60 Glass implements from NM 8

Meiji period

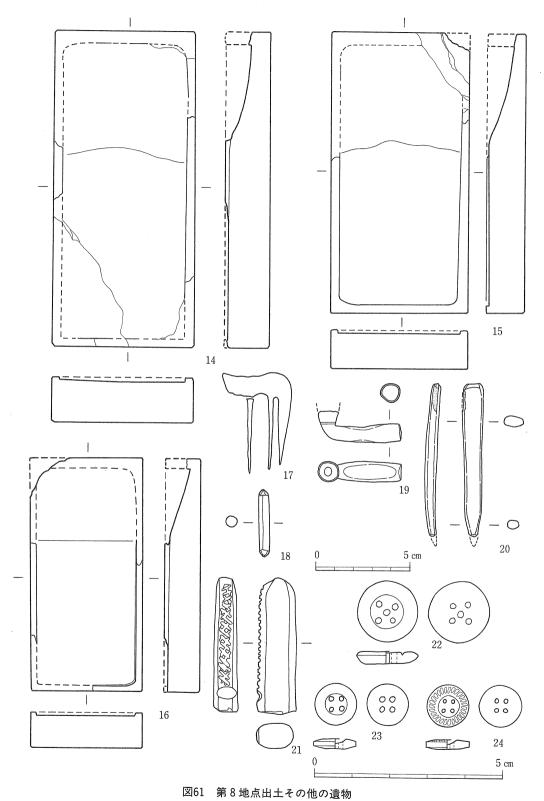


Fig. 61 Various implements from NM 8

Meiji period

ール)と、各地で次々とビール醸造所が設立されていく。ただ、各地に乱立した小規模製造所のことについては、良く判っていないことも多く、特に瓶の製造や、各社が用いた瓶にどの様な違いがあったのかについては、ほとんど判っていない。ただ、今回出土した資料の中では、1の口縁部の形態から、今日見られるような王冠栓以前に使われていた、コルク栓であることが判明する。王冠栓は明治27年(1894年)に、ロンドン・クラウン・コーク会社によって発明されている。日本のビール製造会社における王冠栓の使用は、大日本麦酒株式会社(明治39年に日本麦酒・札幌麦酒・大阪麦酒の3社が合同して設立)が最初で、明治40年から使用している(大日本麦酒株式会社1936)。麒麟麦酒株式会社では、それよりやや遅れ、明治45年から王冠栓へ転換している(麒麟麦酒株式会社1957)。

3は無色の瓶の口縁部で、8は無色の容器の底部付近の破片で、底部の平面形は六角形を呈する。9は青色の瓶で、口縁部内面が1.4cmの範囲で擦れていることから、ガラス製の摺合わせの栓(共栓)が伴うものと考えられ、この点から薬品用の瓶であろうと思われる。10は褐色の小型の瓶である。11は無色の小型の瓶で、両側面に型吹きの型の合わせ目が残る。口縁部は加熱して整えられているが、底面にポンテ痕は確認できない。12は無色の小型のグラス(ウィスキー・グラス)で、下半に縦長の面取りが10面なされているが、これはカット・グラスではなく、型によるものである。13は浅い円筒形の容器で、縁は摺って仕上げている。底面に型で、「武井龍三」と陽刻されている。明治・大正期のガラス製造業について、もっとも詳しく記録したものと考えられる『日本近世窯業史第四編硝子工業』で、ガラス製造業者・職人を検索したが、該当する人名は見つけられなかった。

(藤沢 敦)

表18 第8地点出土その他の遺物観察表 Tab. 18 Notes on various implements at NM 8

番号	種 類	出土区	層	特徴等(数値はmm)	番号	種 類	出土区	層	特徴等(数値はmm)
1	ビール瓶	C 4	堀埋土IV層	口径28	13	ガラス容器	C 4	堀埋土IV層	透明・口径44・底径42・器高20
2	ビール瓶	不明	4層	底径78	14	硯	B 5	堀埋土V層	
3	ガラス瓶	C 4	堀埋土V層	透明・口径26	15	硯	B 4	堀埋土IV層	
4	ビール瓶	A 2	4層	□WERYとの陽刻	16	硯	D 4	堀埋土IV層	
5	ビール瓶	C 4	堀埋土IV層	底径82	17	櫛	D 4	堀埋土IV層	鼈甲製・薄く剝離
6	ビール瓶	B 4	堀埋土IV層	底径76	18	石筆	B 4	堀埋土V層	
7	ビール瓶	不明	不明	底径58	19	キセル	B 4	堀埋土V層	
8	ガラス容器	B 4	堀埋土IV層	透明・底径62	20	笄?	B 4	堀埋土V層	
9	ガラス薬瓶	不明	堀埋土II層	青色・口径31	21	笄?	B 4	堀埋土V層	側面に刻み
10	ガラス小瓶	不明	堀埋土IV層	褐色・口径25	22	ボタン	B 4	堀埋土V層	
11	ガラス小瓶	B 4	3層	透明·口径16·底径22·器高54	23	ボタン	B 4	堀埋土V層	型押しガラス
12	グラス	C 4	堀埋土V層	透明・口径44・底径26・器高42	24	ボタン	B 4	堀埋土V層	型押しがラス

### E. 金属製品

ほとんどは堀の埋土IV~V層より出土した陸軍時代の一括遺物に属する。この中で種類が判別するものは、寛永通宝1点、薬夾3点、キセル1点(図61-19)、洋釘3点、和釘1点で、他は不明である。機械類の部品の断片も含まれる。

#### F. 石製品

堀の一括遺物に硯4点(図61-14~16)、石筆6点、砥石1点、スレート片3点がある。

石筆は一般に、ろう石で作られた筆記具で、石盤の上に書取りや計算を繰り返し行った(図 61-18)。野沢(1988)によれば、欧米では18世紀末から教育用として使われたが、日本では明治時代初期に宮城県で良質な粘板岩が発見されてから普及し、小学校の学習用として明治・大正に広く使われたという。出土した細片 1 点のエックス線粉末回折を蟹沢聰史先生にお願いした(図62)。その結果、材質はパイロフィライト(葉ろう石)、カオリン、ベーマイト(アルミニウムの水酸化物)の混合物と思われ、一般に「ろう石」と言われるものである。東北地方のろう石の産地としては、秋田県大築ろう石鉱床、山形県大峠、福島県月形などがあるとのことである。

#### G. 木製品

おもに堀の埋土から板材、木端、木炭などの断片が少数出ている。

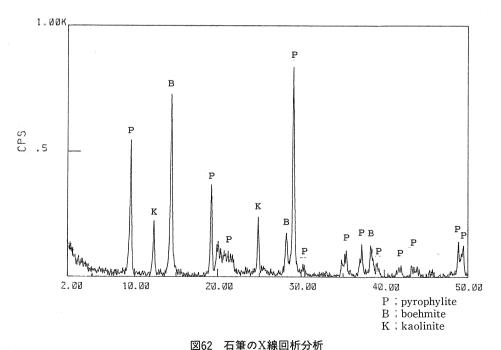


Fig. 62 X-ray diffraction of pyrophylite pencil

#### H. 骨製品。骨

いずれも陸軍時代のものである。こうがいに似た製品が 2 点ある(図 $61-20 \cdot 21$ )。 1 点は鹿角製で、もう 1 点は材質不明で側面に刻みがついている。こうがいは日本髪を崩さずに頭皮をかく道具である。陸軍にまげを結った男性がいるとは考えにくいから、男性の物ではないだろう。女性の物とすれば、装飾性に乏しい大変質素な物となる。第 4 地点にも類例がある (p. 132)。他にボタン 1 点(図61-22)、鼈甲製の櫛 1 点(図61-17、厚さ 1 mm以下の破片)、スズキの椎骨 2 点がある。

#### 1. 皮製品

堀の埋土から陸軍時代の皮製品の断片 5 点が出ている。内訳は靴の表皮 2 点(軍靴にしては薄い)、軍靴の半貼り ? 1 点、カバンのものかと思われるベルト 1 点、不明断片 1 点である。靴の表皮 1 点が豚皮の他はすべて牛皮である。吉田行雄氏(仙台市一番町、ロダン・シューズ)に鑑定して戴いた。

(山田しょう)

# 第Ⅲ章 考 察

#### 1. 二の丸第7次調査地点の調査

前にも触れたように、当地点は、大手門をはいった北側に位置する。この区域は、二の丸には含まれていないが、二の丸の東側全面をしめた蔵屋敷、のちの勘定方のおかれた区域にあたる。調査地点は、その中でも西端部にあたると推定される。ここには、一貫して七十軒にもおよぶ南北方向の「七十軒御兵具蔵」がおかれている。これは、元禄期および享和2年の絵図で知ることができる。これらの古絵図と検出遺構を対比してみた場合、位置関係からは、6~8区で検出された南北方向の掘立柱建物跡が、絵図に描かれている御兵具蔵に対比できる可能性がある。

この掘立柱建物跡の南北方向の棟筋は、 $N-20^\circ-W$ の方向をとっている。この角度は、現在の留学生宿舎の東側の、記念講堂前の公園との間の段差付近に残る、石垣の方向と一致する。従来、東北大学埋蔵文化財調査室で復元してきた、現況での二の丸建物群の位置推定は、この石垣を二の丸正門である「詰の門」につらなる東側の外郭線が遺存しているものとの考えをもとに、やはり同じく $20^\circ$  ほど基準が振れるものとして考えてきた。しかし、改めて詳述するが(年報 5、第 3 章)、この間の東北大学埋蔵文化財調査委員会の調査では、二の丸内の建物群は、 $N-24^\circ-W$ 前後の方位をとることがほとんどで、この石垣が二の丸外郭線に対応するかどうかは、再検討の必要がでてきている。

絵図を見ると、元禄期の「肯山公造制木写略図」では、御兵具蔵は二の丸正面の外郭線の方向よりは、西にさらに振れて描かれている(図版42-3)。一方、「享和二年之御家作御絵図」では、方眼の上に建物位置が記されており、御兵具蔵は、二の丸建物や正面の外郭線の方向と同じになっている(図版41-1・2)。前者の場合、二の丸建物よりさらに大きく西偏していることとなり、今回検出された建物跡とは大きく方向が異なることとなる。後者の場合、石垣が二の丸東端の外郭線の跡であったとすれば、掘立柱建物跡と平行することから、絵図の記載と対応する。しかし、前述のように、この石垣の方向が、二の丸内の建物群の方向とずれる点で、絵図の記載と異なり問題が残る。

大手門と二の丸の位置関係から見ると、おおまかには、この掘立柱建物跡が御兵具蔵の付近にあたることは間違いないであろうが、方向の点で問題を残す結果となった。今回の調査では、ピットの埋土などの類似性と、それらが、ほぼ1.9mの等間隔で並ぶことから、図7に示したような建物跡を想定したが、調査範囲が狭いこともあり、これらのピットが異なる形で組み合う可能性も残る。そのような可能性も含めて、今後検討していく必要があるだろう。

4 区で検出された 1 号溝は、絵図でみた限り、該当するものが見あたらず、はっきりしない。 8 区検出の 2 号溝は、この掘立柱建物に附属するものであろうか。

3層及びIV層中から出土した多量の瓦は、こうした建物群の廃絶を意味するのであろう。 8 区の V層から、明治初頭の磁器が出土しているので、二の丸の焼失(明治15年)頃には取り壊されたものと考えられる。

ところで、1区と5区で検出された暗褐色土層(5層)は対応し、旧地表土と考えられる。 1区は現地表から約50cm、6・7区では同じく現地表から20~30cmから地山になる。この間の 2~4区は、40~50cm下げても依然として盛土である。5区で確認された暗褐色土(5層・旧地表土層)は、現地表から約100cmの深さで、南側へ傾斜している。こうした点をあわせて考えれば、1~5区付近は、もともと谷地形で、江戸時代の造成工事の際、埋め立てられ、平坦な面を造りだしたものと推定することが出来る。

# 2. 二の丸第8次調査地点の調査

### (1) 江戸時代

前にも述べたように、調査地点は、二の丸の北辺にあたる。現在でも小さな沢が流れているが、古絵図で見ると、元々沢地形だった場所を利用して、二の丸時代には外郭の堀・池として整備したようである。二の丸造成以前の江戸初期には「西屋敷」の北辺に当たるが、この時期にもやはり北側を画する池として手を加えていたようである。「西屋敷」「二の丸」の北辺のこれらの堀や池の北側には、一貫して侍屋敷が立ち並んでいる。

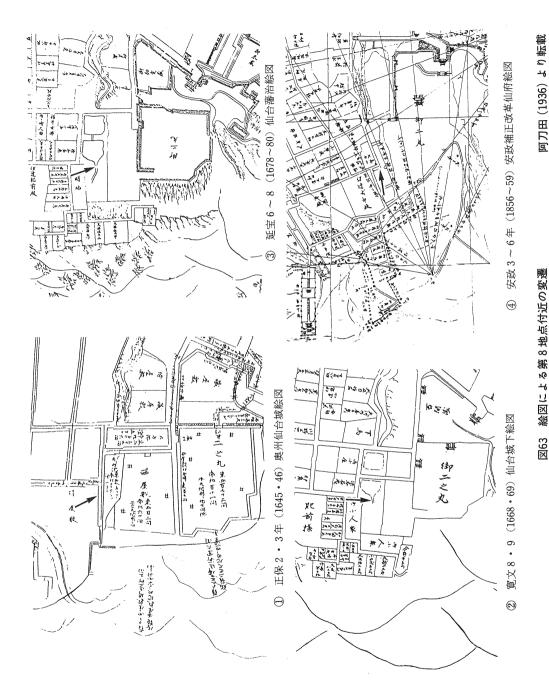


Fig. 63 Transition of the area around Loc. 8 shown on historical maps

絵図からもう少し詳しくこの北辺区域の変遷を見ると(図63)、二の丸地区の最も古い様相を伝える正保 2・3年の「奥州仙台城絵図」では、西屋敷の北側には東西に長い「ため池」があり、さらにその北側には池にそった通路、そして侍屋敷がある。寛文 8・9年の「仙台城下絵図」では、この池は基本的には変化していないもののやや形を変え、また、その北側には「御小人衆」の屋敷が見える。延宝 6~8年図では、池は変わらないが、その北の御小人衆の屋敷地は「明地」となっている。元禄年間の「肯山公造制木写之略図」では、池は整備され、堀としての体裁を整え、堀の北側にはやはり通路が平行して通る。享保 6年図では、また様相が変わり、堀は縮小し小さな沢になり、この沢の北側は雑草の生える明け地のようになる。幕末の安政 3年~6年の「安政補正改革仙府絵図」では、記載がないためはっきりしないが、前図とほぼ同様かあるいは再び池になっているようである。

すなわち、江戸初期には自然の沢地形を利用して北辺のため池となし、元禄時代には堀として整備し、その後は、沢の状態に戻った時期もあったことが伺い知れる。今回の調査で確認された8層の堀は、この北辺の堀(池・沢)の北岸区域に当たると考えられる。この8層面の堀は、岸の傾斜が75°~80°程あり、石垣や護岸の施設は認められなかったものの、人工的に整えられたものであると考えられる。堀(池)の堆積層からは、絵図でみられたような変遷を知ることは困難であるが、少なくともこの付近が二の丸地区の北辺の堀の北岸に当たることはまちがいないだろう。

したがって今回の調査で、堀とさらに北側の侍屋敷の境界が、おおむね捉えられたことになる。堀の北側で検出された溝や井戸、ピットは、侍屋敷に関連する遺構群の一部を示すものであろう。この第8地点の様相からは、調査区のさらに北側に広がる侍屋敷も、良好に遺存している可能性が強いものと考えられよう。

# (2) 明治 (第二師団) 以降

明治時代にはいり、二の丸地区に第二師団が設置されるに伴い、北側の侍屋敷地内(現在の教養部構内の西側)には軍需品を調達する輜重隊が置かれる。堀(池)の形態はほとんど変化がないが、池と言うよりは沢状の地形になった可能性もある。この池と北側の輜重隊敷地の間には池に沿って道路がある。5層および3層の遺構群は、遺物からこの時期のものと推定され、この第二師団時代の状況を示すものであろう。堀埋土V層は、3層面と続く堆積層であるが、この埋土からは、大量の陶磁器類、食料残滓が一括投棄された状況で検出されている。おそらく、輜重隊の廃棄物が南側にあった堀(池)の斜面に投げ捨てられたことを示すものと思われる。

ところで、5層と3層の間には、大規模に砂礫の盛土がなされ(4層—堀埋土VIII層)、堀も斜面側が埋め立てられている。多くの遺物を含む堀埋土V層は、この盛土後に形成された有機物

層である。この3層と、それに対応する堀埋土V層から出土した陶磁器は、盛土の下の5層から出土した遺物と基本的に共通する内容を有している。3層=堀埋土V層出土の陶磁器を特徴付けるものとしては、コバルトによって、かなり崩れて簡略化された文様を染付ける飯茶碗があげられ、平清水産と考えられるものが多いが、同様のものは5層出土資料の中でも主体を占めている。また、図48の21や図53の56のような、刻文に濃いコバルトで染付を施す皿も、3層・5層に共通する。したがって3層面と5層面との間には、さほど大きな時間差を認めることは困難であろう。ただし、3層面出土陶磁器の中には、摺絵や銅版印刷のものが含まれるようになる点で、若干新しい様相を示している。3層面よりさらに上層の堀埋土IV層になると、摺絵や銅版印刷が増えている。

5層から出土した遺物の内で、最も新しく下るものとしては、大堀相馬産と考えられる図53の55の湯呑茶碗、および図53の56の型打の皿があげられる。これらはいずれも明治中期以降の製品と考えられることから、4層の大規模な盛土はこの時期に行われたものであろう。3層および堀埋土V層から大量に出土した陶磁器は、明治時代のもので占められ、確実に明治よりも新しいと考えうるものは確認できないことから、明治時代の中におさまる可能性が強い。また、堀埋土IV層から出土したビール瓶が、王冠栓以前に使われていたコルク栓であり、王冠栓への転換がおおむね明治末から大正初期にかけてであることも矛盾しない。以上の点から、明治に第二師団の輜重隊が置かれ、中期頃に4層の大規模な盛土がなされ、その後ほどなく、堀埋土V層の大量の廃棄物が捨てられたものと考えられる。

一方、この5層面の遺構には、堀の埋土IX層の一部が対応すると考えられる。堀埋土IX層から出土した遺物は少ないが、いずれも江戸時代のもので明治時代のものを含んでいない。したがって、5層面の遺構が構築された時期が、江戸時代までさかのぼる可能性もある。その場合、江戸時代に造られた遺構が、引続き明治時代になっても使用され、明治中頃に大規模な盛土がなされたと考えられる。

また、今回の調査で大量に出土した明治時代の陶磁器は、これまであまり関心が向けられず、 不明なところの多かった当該期の陶磁器のあり方を考える上で、貴重な資料を提供することと なった。

(佐久間光平・藤沢 敦)

# 東北大学埋蔵文化財調査年報5

		×	

# 第 I 章 1987年度調査の概要

#### 1. はじめに

1983年度に学内に埋蔵文化財調査委員会が設置されて以降、東北大学では大学構内の遺跡の調査・保護を組織的に行ってきた。1987年度も、仙台城二の丸跡の調査を中心に調査が行われ、新たな知見が加えられた。本報告は、これらの調査成果をまとめたものである。

# 2. 発掘調査の概要

1987年度は、本調査1件、試掘調査3件、立会調査1件、計5件の調査を実施した。これらの調査の内訳は、川内地区(仙台城二の丸跡)においては、本調査1件、試掘調査1件、立会調査1件、青葉山地区では、試掘調査1件、川渡地区では試掘調査1件である(表19)。

#### (1) 川内地区の調査

第4地点の調査は、1984年度に実施した、川内地区排水管整備事業にともなう調査(1次調査)の延長でなされたものであり、今年度の分は2次調査と言うことになる。この地点は二の丸の北東部、東側外郭線付近にあたり、塀、あるいは借長屋などがおかれていた区域である。1次調査では掘立柱列・溝跡・石敷整地層、2次調査では、北側で掘立柱列、南側で上層に石組溝、下層に溝などが確認されている。本報告では、1984年度の1次調査分も併せて報告する。第5地点の試掘調査は、1985年度の1次調査に引続き、図書館本館増築計画に伴い実施されたものである。この区域は、江戸初期には、五郎八姫の居館「西屋敷」、後に二の丸に取り込まれてからは「中奥」がおかれた区域に当たる。調査の結果、上層では、石組溝・栅溝、下層では、礎石建物跡・石敷遺構などが検出された。この調査については、1988年度の本調査の報告にまとめて行う予定である。

文系四学部駐車場整備工事に伴い行われた立会調査では、工事予定区域の中で特に工事による削平が大きい西側部分の設計変更を求め、表土下0.5~1.0mの二の丸面まで工事掘削がなされないようにした。

表19 1987年度調査概要表 Tab. 19 Excavations on the campus in the fiscal year 1987

調査の種類	調査地点	原    因	調査期間	面積	時期
本調査	仙台城二の丸跡第4地点(NM4)	川内地区配水管整備事業	7/15~9/4	126m²	近世
試掘調査	仙台城二の丸跡第5地点(NM5)	図書館本館増築	9/18~11/24	272 m²	近世
	川渡地区セミナーセンター地点	セミナーセンター講師宿泊棟新設	10/28 • 29	30 m²	- 1
	青葉山地区工学部中央道路地点	工学部共同溝整備	12/2~12/23	96 m²	_
立会調査	仙台城二の丸跡文系駐車場地点	文系四学部駐車場整備	2 / 17	20 m²	_

#### (2) 青葉山地区の調査

青葉山地区の試掘調査1件は、工学部中央幹線道路沿いの共同溝工事計画にともない、遺跡の有無を確認するために行われたものである。工学部が移転される前の旧地形と現地形を照らしあわせ、現地形の改変度合を考慮して、工事面積2243㎡のうち試掘調査面積は96㎡にとどめた。調査の結果、遺構・遺物の出土はなかったので、その後の調査は行わなかった。

# (3) 川渡地区の調査

セミナーセンター管理棟南側の空き地に講師宿泊棟を新設するにあたり、やはり遺跡の有無 を確認するために試掘調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったので、そ の後の調査は行っていない。

#### (4) その他の調査室の活動

これまで調査室では、学内の埋蔵文化財の重要性を広く学内の方々に知っていただくために、各調査が行われるごとに、学報にその調査成果の速報を掲載してきた。今年度は、学内の埋蔵文化財について体系的な紹介をするために、『広報』に「学内の埋蔵文化財」の投稿を新たに始め、その1および2を『広報』No.126とNo.127に投稿した。

また、11月には、河北新報社主催の「アルタイと東北の考古展」に、青葉山遺跡の旧石器時代の調査状況のスライドと、青葉山遺跡の地層断面のはぎ取りを貸出した。

# 第11章 川内地区(仙台城二の丸跡)の調査

#### 1. 1986年度までの調査

1983年度から調査室が実施した調査は、これまでに8地点を数える。1983年度調査の第2地点の調査では、小広間付近の礎石建物跡、第3地点では二の丸南端を画す石垣と溝、掘立柱建物跡、池を確認している(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985)。第2地点の礎石建物跡は、その後保存されることになった。1984年度には第4地点の1次調査を行い、二の丸北東部の外郭線に関わる遺構を検出した(本報告収録)。1985年度には、第6地点において西端外郭の塀基礎および石組遺構・溝を発見している(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990)。1986年度の第7地点では、勘定方西端の蔵に関わるとみられる掘立柱跡、第8地点では、北端外郭の溝(堀)を検出している(本書年報4)。

# 2. 二の丸跡第4次調査地点(NM4)の調査

#### (1) 調査地点の位置

調査地点は、川内構内を南北にはしる通称「中善通り」と呼ばれる道路沿いにある。この道

路は、軸線がやや異なるが二の丸北東部の東側外郭線にほぼ一致する。江戸初期、当地区に西 屋敷がおかれた時期にもやはりその東側外郭線にあたる。

絵図を参考にもう少し詳しくみると、西屋敷時代の配置がわかる正保2・3年図(1645・46年)では、調査区は、正門のある東側外郭線、西側の屋敷と東側のため池の境界付近を通っているものと推定される。南北に長い調査区は、この境界付近を通ってさらに南隣の二の丸の裏門付近を通り、二の丸区域にいたると考えられる。なお、この図にみられる二の丸地区には、二の丸造営(寛永15・16年、1638・39年)以前には、伊達宗泰の屋敷がおかれていたことが伝えられており、調査区の南部分は、この時期には宗泰の屋敷地内に含まれることも考えられる。西屋敷が廃絶され、この区域が二の丸に取り込まれる時期の「肯山公造制城郭木写之略図」(元禄時代)、これ以降の享和2年(1802年)図、嘉永6年(1853年)図をみると、西屋敷時代の外郭線は、ほぼそのまま二の丸の東側外郭線となっている。つまり、調査区は、二の丸時代を通じてみても、その東側外郭線付近にあたると考えられる。なお、享和2年図、嘉永6年図では、外郭の塀に「蔵」が附属し、塀の東側には南北棟の「借長屋」が配置されている。

# (2) 調査にいたる経緯

川内団地内の排水管整備にあたり、中善通り沿い(道路西側)に排水管を通すことになった。 北側と南側の一部区域については既破壊部分を利用して排水管を設置することにしたが、道路 沿い延長約96mについては発掘調査を実施する必要があった。調査は1984年度中に終了するこ とを目指して、厳寒の1月初旬から開始した。しかし、気候条件が悪く調査の続行が困難になったため、調査予定部分の南半は次年度以降に調査を延ばすことになり、結局、調査は2回に 分けて行うことになった。

(佐久間光平)

# (3) 調査方法と経過

図書館本館前の道路(中善通り)沿いの排水管のルートにあわせ、幅1.5mのトレンチを設定した(図64)。 1 次調査(1984年度)では、北側の28m分(I区)、2 次調査(1987年度)では、南側を中心に68m分(I区の北側の一部 3 m分を含む)の調査(II・III区)を行った。調査面積は、それぞれ42m²、107m²、計149m²であった。このうち 2 次調査の I 区北側とIII区の19m²は、盛土をほりあげたところ既破壊区域であることが判明したので、この区域の調査はその後行わなかった。結局、精査区域は、道路沿いの直線にして84m分(I・II区)ということになる。

調査は、配水管のルートにあわせて、原点 $A \cdot B$ を設定し、この2点をむすぶラインを基準線とした。基準線は、座標北より $20^\circ01'44''$ 西偏している。また、道路脇に保存原点Cを設けた。原点 $A \cdot B$ および原点Cの国土座標値は、下記の通りである。座標系は、第X座標系である。

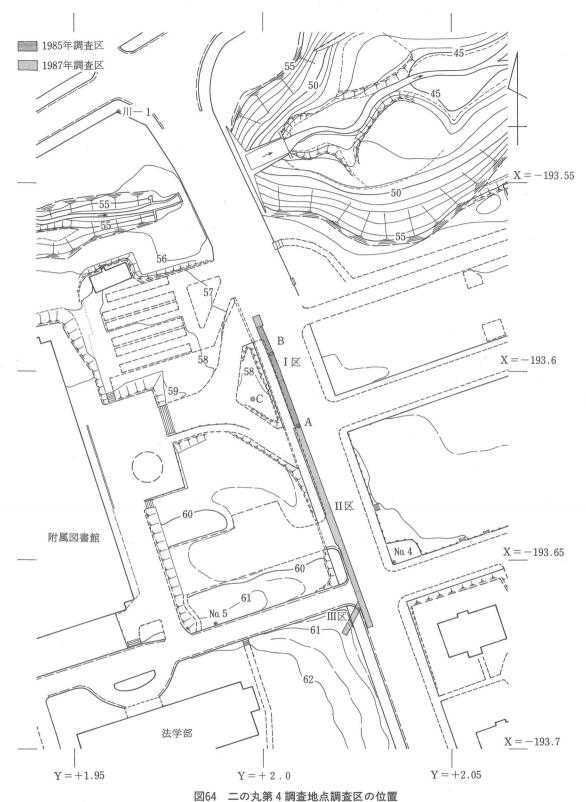


Fig. 64 Location of NM 4 NM 4 i.e. Location 4 of *Ninomaru* (Secondary Citadel)

原点A X=-193 614.502 原点B X=-193 595.404 原点C X=-193 607.386 Y=- 2 009.361 Y=- 2 002.399 Y= - 1 997.200

調査区は、原点Bを基準に南へ2 mごとに $1\sim10$ 区、北はN  $1\sim N$  4 区とグリッド名を付した。2 次調査 (II区) では、原点B から20 mの地点から77 mの地点までの範囲を調査したため、原点B からの距離で、21区 $\sim77$ 区と1 mごとのグリッドに分けて調査を行った。

前述のように、調査が2次に分かれグリッドの設定方法が異なるため、以下の遺構の報告で

表20 第 4 地点基本層土層注記表

Tab. 20 Characteristics of layers at NM 4

層	色調	土 質	内 容
1層	<del></del>	anneum	道路に伴う整地層
1 a 層	5 Y 5 / 2 灰オリーブ色	砂	道路基礎
1 b層		安山岩角礫	道路基礎
1 c 層	5 Y 4 / 1 灰色	シルト	円礫含む
2 a 層	5 Y 4 / 2 灰オリーブ色	砂	円礫含む
2 b層	10YR3/1黒褐色	シルト	砂礫含む
3 a 層	2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色	砂質シルト	小礫含む
3 b層	10 Y R 5 / 3 にぶい黄褐色	シルト	
3 c 層	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト質砂	不均質な整地層、円礫多量含む
3 d 層	10YR4/1褐灰色	シルト質砂	炭化物多量含む、不均質な整地層
3 e層	2.5Y 5/4 黄褐色	砂	
3 f 層	10YR3/1黒褐色	砂質シルト	砂礫・炭化物多量含む
3 g層	10YR3/1黒褐色	砂質シルト	炭化物多量含む
3 h 層	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	下部に円礫多量含む
4 a 層	10YR4/4褐色	砂質シルト	小礫多量含む
4 b層	10 Y R 4 / 4 褐色	砂質シルト	
4 c 層	7.5YR4/4褐色	砂質シルト	礫多量含む
4 d 層	5 Y 3 / 2 オリーブ黒色	シルト	炭化物・地山ブロック含む
4 e層	7.5Y 3 / 2 オリーブ黒色	シルト質粘土	礫・炭化物含む
4 f 層	2.5Y 3/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物含む、角礫多量含む
4 g層	2.5Y 3/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物含む、地山ブロック多量含む
4 h層	2.5Y 3/1黒褐色	砂質シルト	炭化物・地山ブロック含む
4 i 層	10Y 4 / 2 オリーブ黒色	粘土	植物遺体含む
4 j 層	10Y 3 / 1 オリーブ黒色	シルト質粘土	礫・瓦多量含む
4 k層	10Y 3 / 1 オリーブ黒色	シルト質粘土	礫・瓦多量含む
41層	10Y 3 / 1 オリーブ黒色	シルト質粘土	炭化物・礫含む
4 m層	7.5Y 3 / 2 オリーブ黒色	シルト質粘土	炭化物・礫含む
5 a 層	10YR4/4褐色	シルト	小礫多量含む
5 b層	10YR6/6黄褐色	粘土	黄褐色シルト・小礫・砂が不均質に混じる
5 c 層	5 Y 3 / 1 オリーブ黒色	粘土質シルト	粘土ブロック・小礫・植物遺体を不均質に含む
5 d 層	10YR2/2黒褐色	シルト	炭化物・小礫・粘土が不均質に混じる
6 a 層	10YR5/2黒褐色	砂質シルト	植物遺体多量含む
6 b層	2.5G Y 4 / 1 暗オリーブ灰色	砂質シルト	小礫・砂・粘土が不均質に混じる
地山	10YR5/6黄褐色	シルト	粘土がやや不均質に混じる、2次堆積か

は、便宜的に I 区・II 区を分けて記述することとする。遺構の名称は、掘立柱列と溝跡については、 I 区・II 区を通した番号にした。しかし、ピット番号は I 区・II 区をれぞれで別に付けられており、通し番号に付け直すと煩雑となるため、調査時の番号をそのまま使用することとする。但し、調査後の検討の過程で、1 次調査のピット11・21・22・23と、2 次調査のピット8 は欠番となっている。

# (4) 層序

調査が2回に分かれたこともあり、厳密に対比はできていない部分もあるが、おおむね表20の通りである。

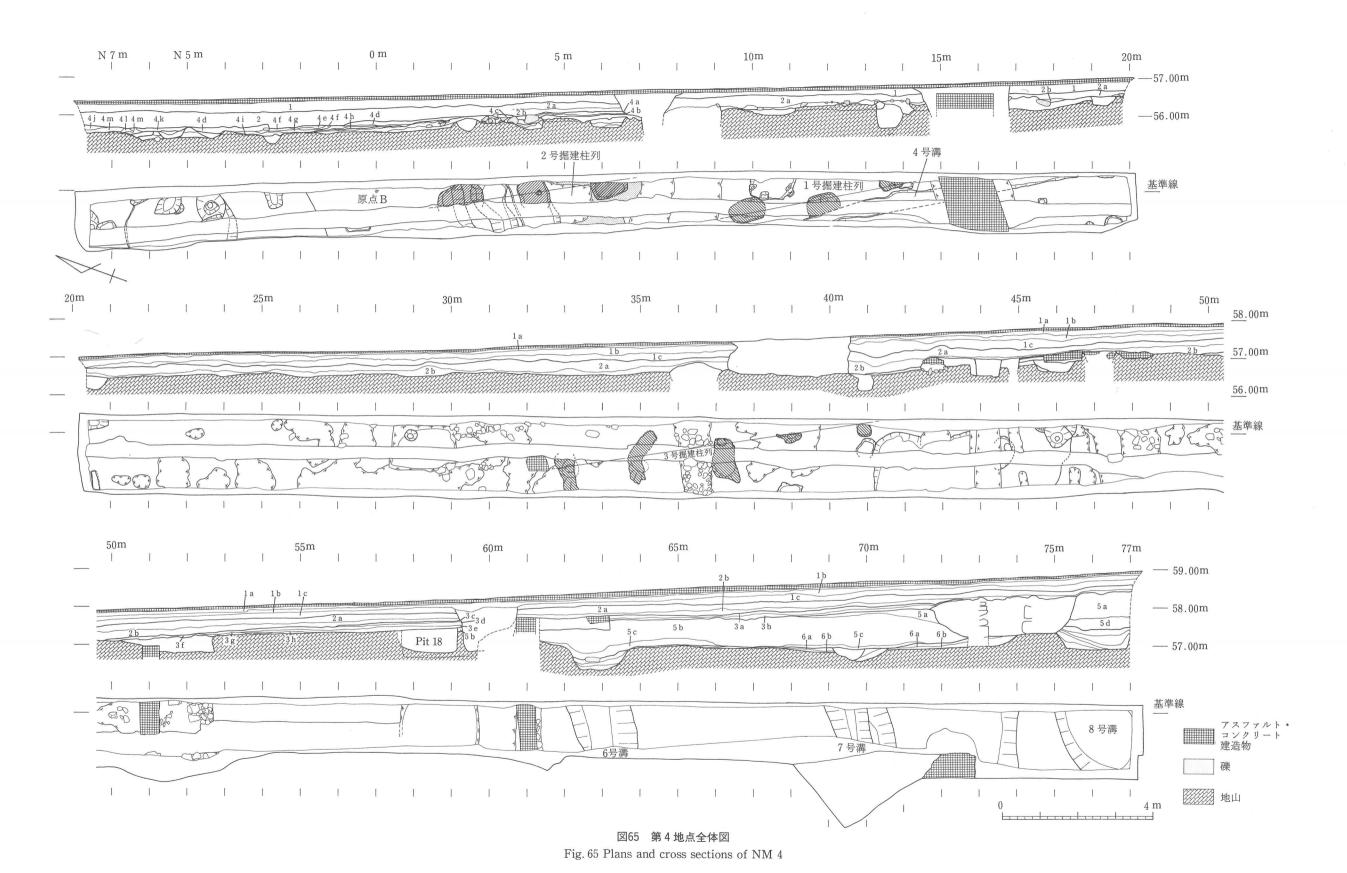
- 1層 現在の道路面となっているアスファルトとその基礎の整地層である。米軍および大学による整地層と考えられる。
- 2層 1層の下の大規模な整地層で、第二師団もしくは米軍による整地層と考えられる。
- 3層 II区の中央付近の50区より南側に分布するもので、地山および5 層を覆う。 $50\sim60$ 区では、5 号間がコンクリート建造物を伴う掘り込みを覆っている。また $64\sim73$ 区では、5 号間を覆っている。5 号間は、出土遺物から埋められたのが明治以降であると考えられることから、3 層は明治以降の第二師団の整地層と思われる。
- 4層 I区の中央付近の4区より北側に分布するもので、地山および地山に掘り込まれた柱列・ピット・石敷整地層を覆っている。石敷製地層からは板ガラス・洋釘・土管が出土しており、明治以降と考えられることから、この4層も明治以降のものである。
- 5層 II区の59区より南側に分布する整地層である。この5層の下から掘り込まれた溝跡からは、江戸時代初頭の遺物のみが出土していることと、厚いところでは1mにもおよぶ大規模な整地であることから、この5層は貫永15年(1638年)の二の丸造営に伴う整地層と考えられる。6層 II区南端よりの64~74区に分布し、5層に覆われている。江戸時代初頭の地表面に堆積した層と考えられる。

地山層 調査範囲が南北に長いため、地山の土質は均質ではない。表20には最も一般的な部分を示した。地山の上面は、全体に北側が低く、南に行くにしたがって高くなっている。そのため、標高の低い北端付近では、全般にグライ化した様相が認められる。ただし、II区の60区付近を境として南側は、逆に低くなって行き、この部分に5層の整地がなされている。

#### (5) 発見された遺構と遺物

#### ① 遺構

調査区が南北に細長いため、場所ごとでの様相がかなり異なっている。特に、II区では59区から南側では、基本層序が他と大きく異なる。そのためここでは、I区・II区北半部・II区南半部に分けて、遺構の状況を述べることとする。



#### A. I区(図66·67)

I区の遺構は、いずれも地山層に掘り込まれている。

#### 掘立柱列

#### 1号据立柱列

5区から7区にかけて、ピット6・7・9の3個の柱穴が確認された。ピット7で平行して伸びる溝4に切られている。またピット6はピット14・15に切られる。いずれも $1.0m \times 0.6m$ 前後の隅丸長方形を呈し、柱痕跡が確認される。柱列の方向は、 $N-31^\circ-W$ 、柱間間隔は2.0mである。遺物は出土していない。

#### 2号掘立柱列

1区から 4区にかけて、ピット $12 \cdot 13 \cdot 16$ の 3 個の柱穴が確認された。  $1 \sim 4$  号石敷整地層に切られており、残存状況は総じて良くない。平面形は、一辺 $0.8 \sim 1.2$ m程の隅丸方形を呈す。柱痕跡は確認できておらず、残存状況が良くないこともあり、柱が抜き取られたかどうかも不明である。柱列の方向は、ほぼ $N-29^\circ-W$ で、柱間間隔は2.0m程である。遺物は出土していない。

#### 石敷整地層

#### 1~3号石敷整地層(1~3号溝)

1区から 3区にかけて、東西方向に平行して 3条、溝状の掘り込みに拳大から人頭大の河原石を敷いた整地層が検出されている。溝の方向は、おおむね $N-53^\circ-E$ である。この内、 $2 \cdot 3$ 号石敷整地層は浅い溝状の掘り込みの中に、河原石を敷くようにしているが、1号石敷整地層は南側は比較的明瞭に肩が付くが、北側ははっきりした掘り込みを持たず、整地層の範囲は N 1区まで伸びている。これらの整地層の前後関係は、1 号石敷整地層の河原石が含まれる埋土 2 層が、2 号石敷整地層の礫が含まれる層序まで伸びることから、同時に構築された可能性が強い。これらの整地層は、掘立柱列 2 のピット  $12 \cdot 16$  を覆っている。  $1 \cdot 2$  号石敷整地層からは、板ガラス・洋釘・土管が出土しており、明治以降に構築されたものと考えられる。

# 4号石敷整地層

 $1 \sim 3$  号石敷整地層の南側で検出されたもので、小礫を10cm程の厚さに敷き詰めた整地層である。南側が東西に伸びる撹乱によって破壊されており、3 号石敷整地層に接する付近も破壊されていたため、その範囲は明確ではないが、南北2.2mにわたっている。整地層の下面は東西方向に幅15cm程の小規模な溝状となっており、その方向は $N-53^\circ-E$ である。掘立柱列2のピット13およびピット10・15を覆っている。この4 号石敷整地層と3 号石敷整地層の関係は、トレンチ東壁の部分でのみ残存しており、3 号石敷整地層の南端を切って4 号石敷整地層が構築されている。ただし、3 号の端に沿っていることから、構築順序は3 号から4 号であったとし

ても、同時に存在した可能性も高い。その場合、1~3号石敷整地層が何らかの建造物の基礎で、4号石敷整地層がそれに沿った広場もしくは通路状の化粧敷であった可能性も考えられる。

#### 溝跡

#### 4号溝

6 区から10区にかけて検出されたもので、 $N-31^\circ-W$ の方向でほぼ直線的に伸びる、幅50 c m、深さ20 c m程の溝である。 1 号掘立柱列とほぼ平行し、そのうちのピット 7 を切っている。またピット 3 に切られている。遺物は出土していない。

#### ピット

ピット8

6区の東壁よりで検出された不整形のもので、埋土中に多量の瓦を含み、まとめて捨てられ た状況を呈していた。

#### その他のピット

南側の8~10区で、ピット1~5・14が検出されている。この内ピット5・14は1号掘立柱列のピット6と切りあっており、ピット6 →ピット14 →ピット5の順である。また、ピット1からは、江戸時代のものと考えられる鉄釉の鉢が出土している(図71-4)。

また、調査区北端近くのN2区からN4区では、ピットが比較的密集して検出されており、 これらの切り合い関係は以下の通りである。

このうちピット28としたのは、径3.0mのほぼ円形の大きなものである。またピット24・27では柱痕跡が検出されており、ピット27では柱の下に偏平な礫が敷かれていた。遺物は概して少ない。

#### B. II区北半部(図68·69)

II区北半部で検出された遺構は、いずれも地山に掘り込まれている。

#### 掘立柱列

### 3号掘立柱列

32区から42区にかけて、ピット  $4 \cdot 5 \cdot 6 \cdot 7 \cdot 1205$  個の柱穴が検出された。いずれも不整形な平面形態を呈し、しかも南東から北西方向に大きくオーバー・ハングしている。ピット底面近くで検出された柱痕跡を垂直に上に伸ばすと、このオーバー・ハングした部分にぶつかってしまうような方向で壁面が立ち上がっており、どのような上屋構造になるのか不明である。柱列の方向は $N-29^\circ-W$ で、柱間間隔は2.0mである。出土遺物は概して少ない。ピット 6 から

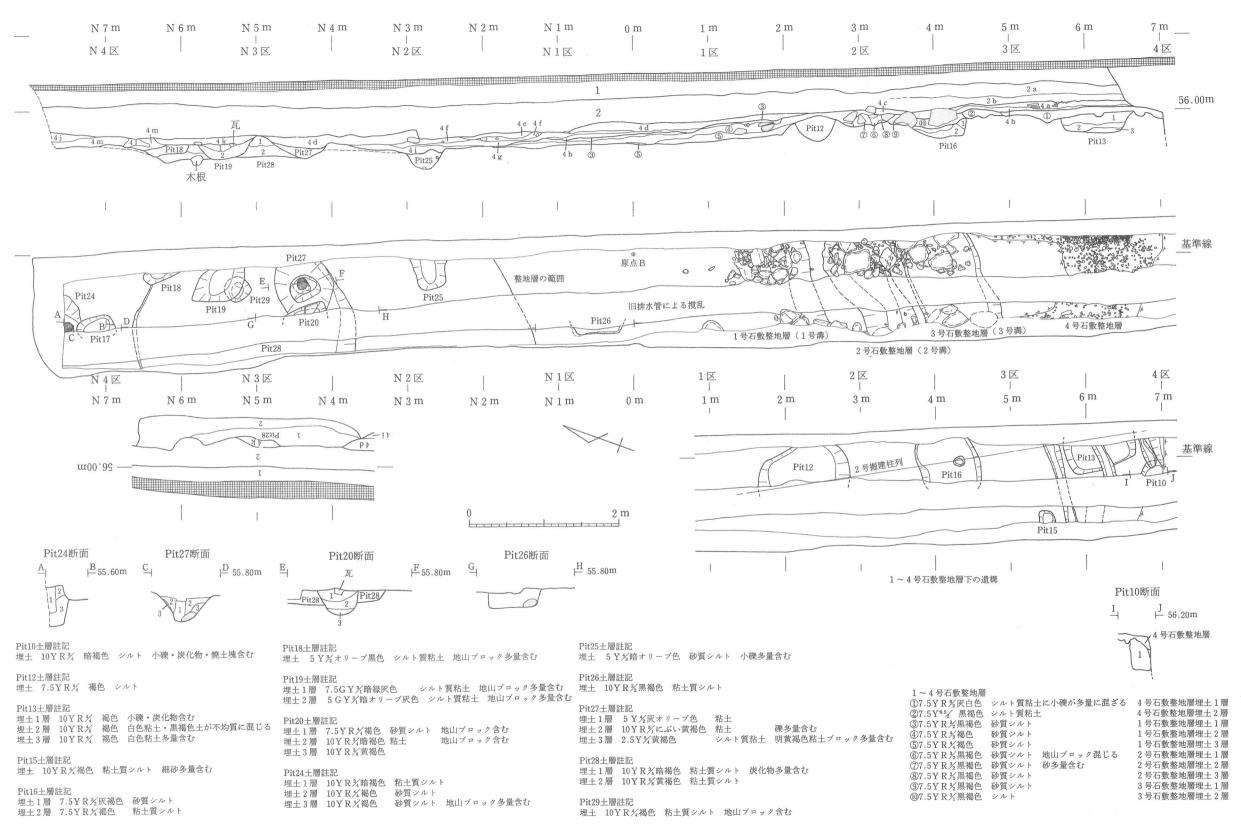


図66 第4地点 I 区平面図・断面図(1)

Fig. 66 Plans and cross sections of Loc. I at NM 4 (1)

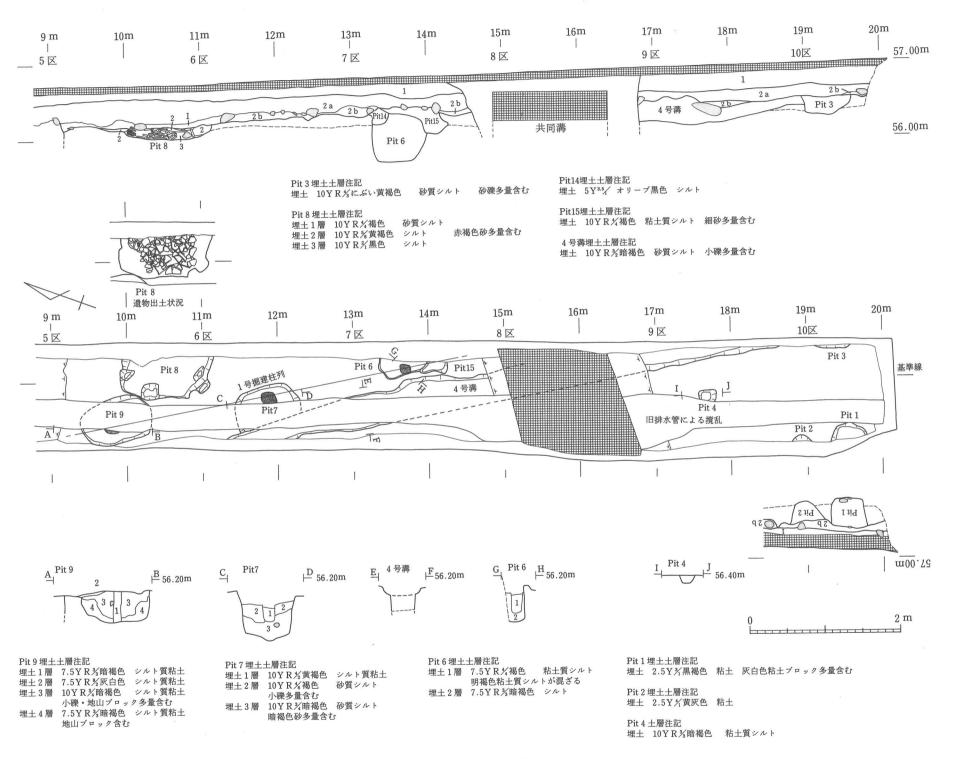


図67 第4地点 I 区平面図・断面図(2)

Fig. 67 Plans and cross sections of Loc. I at NM 4 (2)

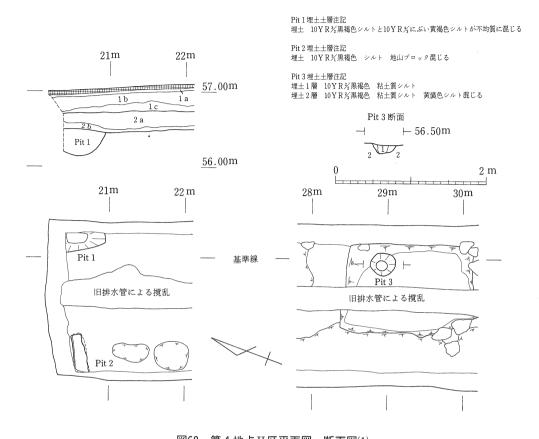


図68 第4地点II区平面図・断面図(1) Fig. 68 Plans and cross sections of Loc. II at NM 4 (1)

板ガラスが1点出土しているが、細片であり、混入の可能性も捨てきれない。また、少数ではあるが、江戸時代に輸入板ガラスを建築に利用した例もある。陶磁器では、ピット7から幕末前後と思われる磁器の飯茶碗が出土している(図72-21)。また細片ではあるが、ピット6・7から出土した磁器碗類は、胎土が密で焼成も良好な点から、19世紀以降と思われるものである。したがって、この掘立柱列3は、さかのぼっても幕末頃の建造と考えられるであろう。

# ピット

## ピット10

ピット10としたのは、40区から44区にかけて検出された浅い落込みで、明瞭な掘り込みを持つものではない。埋土は、大量の瓦と炭化物・炭化木材を含み、明治15年(1882年)の火災の時のものである可能性がある。この埋土はピット13と3号掘立柱列のピット12を覆っている。その他のピット

調査区の北端近くで、ピット1・2が検出されている。I区南端付近のピットと関連するも

のであろう。28・29区ではピット3が検出されており、柱痕跡も確認される。

また、ピット10の周辺には、ピット9・11・13・14・15・16・17が比較的密集して検出されている。これらの切り合い関係は次の通りである。

この内ピット15としたものは南側の落ちが東西方向に確認されたもので、かなり大きな掘り込みになると思われる。このピット15とピット10の関係は、両者の間に第二師団時代の排水溝などの撹乱が多く、確認できなかった。ピット11とピット14では柱痕跡が確認されており、ピット14では柱根も一部残存していた。いずれも、遺物はほとんど出土していない。

#### C. II区南半部(図70)

#### 溝跡

# 5号溝(石組溝)

調査区南端近くの72区から75区にかけて検出された東西方向の石組溝で、方向は $N-67^\circ-E$ である。江戸時代の整地層と考えられる 5 層の上面から掘り込まれている。切り石を垂直に積み上げたもので、内のりは0.9m、深さ1.0mを計る。切り石の外側には、拳大から人頭大の円礫を詰め込んだ、裏込めがなされている。裏込めの幅は、上端で4.0mを計る。この溝の埋土の最上層は、多量の板状の礫を含むもので、最終段階で一気に埋められたものと考えられる。遺物は埋土中から多く出土しているが、板ガラスや洋釘などを多く含み、大部分は明治以降の第二師団のものである。

#### 6号溝

 $63 \cdot 64$ 区で検出された東西方向の溝で、地山に掘り込んでいる。この 6 号溝と  $7 \cdot 8$  号溝は、いずれも江戸時代の整地層と考えられる、5 層の下から掘り込まれている。方向はおおむねN-61°-Eで、上面での幅1.6m、深さ0.5mである。遺物は出土していない。

#### 7号溝

69・70区で検出された東西方向の溝で、6a 層から掘り込まれている。この溝は新旧 2 時期に分かれる。新しい方の 7 号溝 b は、古い方の 7 号溝 a とほぼ同じ場所で、若干北側にずれて掘られている。7 号溝 b の方向は  $N-63^\circ-E$  で、6 号溝とほぼ平行している。幅は90cm、深さは30cmを計る。7 号溝 a は、北側が 7 号溝 b に壊されているため、幅は不明であるが、深さは30cmである。遺物は出土していない。

#### 8号溝

調査区の南端の76・77区で検出されたもので、東西方向に伸びると思われるが、北側の縁が 湾曲しており、細長い溝として伸びて行くものかどうかは不明である。南側の縁が調査区外に

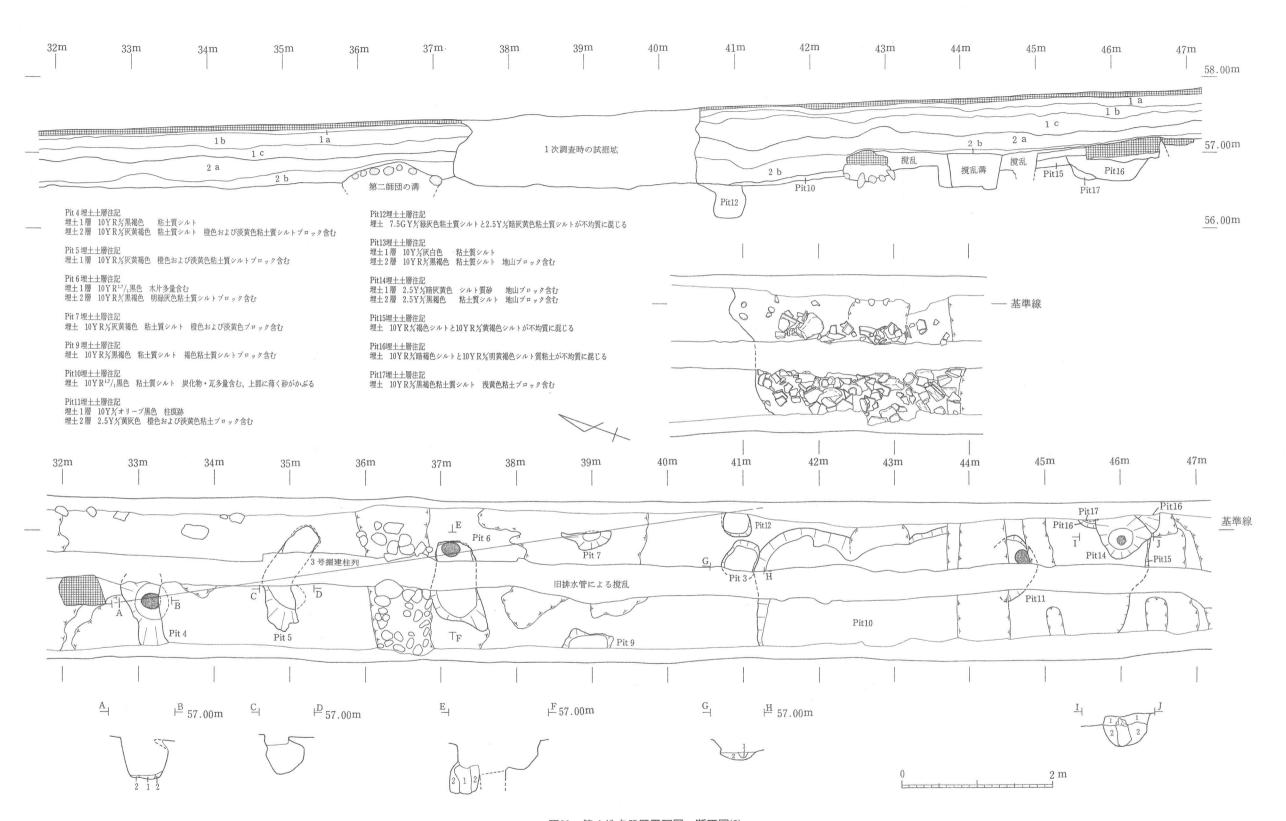


図69 第4地点II区平面図・断面図(2) Fig. 69 Plans and cross sections of Loc. II at NM 4 (2)

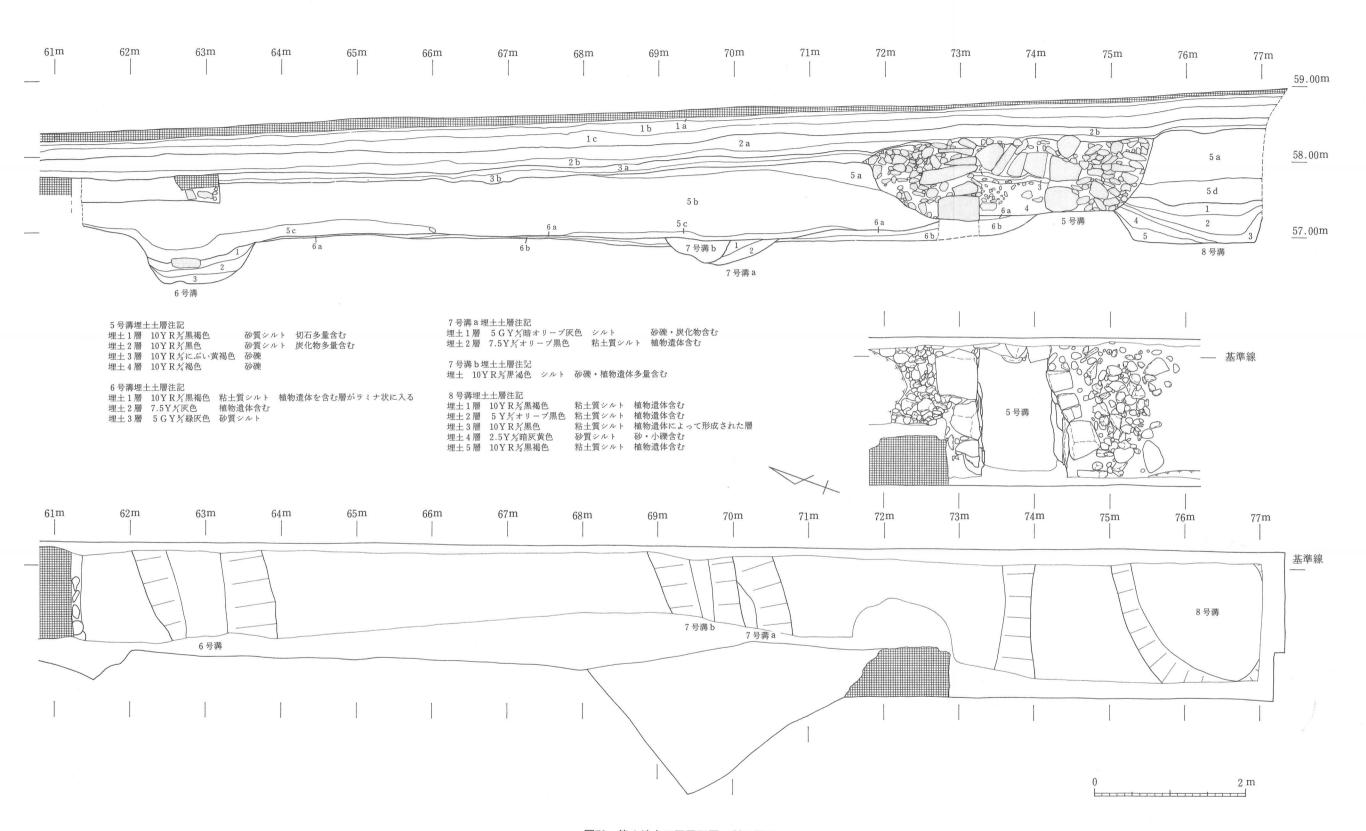


図70 第4地点II区平面図・断面図(3) Fig. 70 Plans and cross sections of Loc. II at NM 4 (3)

なるが、幅は2m以上になるものと考えられる。地山から掘り込んでおり、北側の縁が5号溝によって壊されているが、埋土の状況から、本来の深さは60cm程になるものと思われる。埋土1層から陶器4点が出土している。全て細片であり図示できなかったが、その内訳は、唐津産向付、志野丸皿、鼠志野皿?、美濃産擂鉢である。唐津産向付は16世紀末から17世紀初頭のもので、志野丸皿は大窯最末期のものと思われ、17世紀初頭であろう。鼠志野皿?も同様の時期の可能性がある。美濃産擂鉢は17世紀のものである。この8号溝の1m程北側には、30cmほどの東西方向の落込みが確認されており、先の6・7号溝は、この落込みによって低くなった部分に掘られている。

#### ピット

ピット18

57~59区にかけて、比較的大きな掘り込みが確認されている。ただしこの区域は、85年度の調査に先立つ試掘調査の際に既に掘られており、壁面での確認にとどまる。このピット18と、59・60区に東西に走る配水管による撹乱の間に、5b層がわずかに残されており、5層の整地が、おおむねこの辺りから南側になされたことが判明する。

(藤沢 敦)

# ② 遺物

当地点出土遺物の種類・点数は、表 $21 \cdot 23 \cdot 24$ に示した。2b 層・ビット $10 \cdot 5$  号溝などから多く出土している。これらを含めて、ほとんどが明治以降の遺構・層位からの出土である。二の丸造営に伴う5 層の整地層の下からは、土師質土器・箸が多く出土している以外は、遺物は少ない。特筆されるものとして、6a 層から木簡が出土している。木簡は、二の丸跡では初めての例である。

# A. 陶磁器 (図71・72)

接合作業後の総破片点数は 822点を数えるが、ほとんどは細片で、しかも明治以降の第二師団時代のものと考えられるものが多い。出土状況では、明治以降の整地層と考えられる2層・3層と、ピット10・5号溝で多く出土している以外では、総じて少数で、確実に江戸時代と考えられる遺構・層位からはほとんど出土していない(表21)。二の丸造営に伴う整地層と考えられる5層より下層で出土した陶磁器は、8号溝出土の4点の陶器以外は、6a層で土師質土器が出土しているのみである。これらの土師質土器は、全体の特徴が判明するものはない。皿がほとんどで、焼塩壷の底部の可能性のあるものが1点出土している。ここでは遺構出土のものと、江戸期のものを中心に示した。

 $1\sim 4$  が1985年調査区(I区)出土のもの、  $5\sim 22$ が1987年調査区(II区)出土のものである。

# 表21 第4地点出土陶磁器集計表

Tab. 21 Distribution of ceramics at NM4

$\mathbb{Z}$					碰	\$		器						陶						器		炻 器	瓦質	土師質	合計
	出土遺物		<i>Ti</i> 3	νī			碗	蓋	徳	その他	碗	Ш	碗	金	ķ	壷	甕	土	徳利		その他	/Jul 194			
地区		碗	小型碗	湯呑	不明		類		利				皿類	擂鉢	その他			瓶	利	烙					
$\vdash$	出土地点	-	_			_	_	-	-		-	_		-			_		_	-			不明1	碗皿類1	6
I 区	1層		_		-	1	2		$\dashv$	不明 1	+					$\dashv$			-	-	不明 2		7119011	HARTITIZE I	3
		1	1		c	- 1	6	-	-	不明1	6		2	2	1			_	-	-	不明 5		不明 2	碗皿類15	56
	2 b 層	1	1		6	4	0			小奶1	U			-	1						11-91 0		11-932	不明 4	
	4層									不明 2														碗皿類 2	4
	4 f 層	1																							1
	4 8層												1												1
	1号石敷埋土	4			1	3	2			不明1	5	1	1					1			不明 5		不明1	碗皿類20	45
	2号石敷埋土	1								不明3	3	1	1								灯明皿1			人形 1	19
																					不明4			碗皿類 4	
	3号石敷埋土										1													碗皿類1	2
	4号石敷下溝													$\vdash$	<u> </u>			Г	T					碗皿類1	1
	ピット1		-	$\vdash$							-				1	-	-		-	T					1
	ピット8	-							-			_	-	-	-	_	-	$\vdash$	-	$\vdash$			不明 2	碗皿類1	3
		-	_	-		-		-	-				1	$\vdash$	-		-	-	+	+			1,7,5	., , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	1
	ピット18	<u></u>		-		-							1	-	_				-	$\vdash$				碗皿類 5	6
	ピット27	1		<u> </u>	_	<u> </u>	_		-			_	-	-	-	<u> </u>		-	-	╀					1
	ピット28	<u> </u>							<u> </u>					-		ļ.,		_		-				碗皿類1	
	不明												3		1	-			L	_	不明6			碗皿類3	13
	合計	8	1	. 0	7	8	11	0	0	8	15	2	9	2	3	0	0	1	(	) (		0	6	59	163
II	2 層																				不明2				2
区	2 b層	14		18		8	24	6		鉢 1 水滴 1 不明55	11			2	1			5	5		急須1 不明32			碗皿類19 不明12	210
	3 a 層									不明1				1	. 1										3
	3 b 層			T		T			Г	不明4			T						T						4
	3 d 層	4		1	1	2		1	$\vdash$	不明 2	4			T	1				T	T	不明8			不明 2	25
	3 e 層	1	-		-	1	-		1					1	1	T	T	T		1	不明1	10.11.17.17.17.17.17.17.17.17.17.17.17.17.			4
	3 8層	+-	H	+		+-		$\vdash$	+-		1		$\vdash$	+	t		r	+	+					碗皿類2	3
	5層	+-	-	+-	-	1	H	-			_	-	t	+	+-	$\vdash$	╁		$\dagger$	-					1
	6 a 層					1											l							Ⅲ152 壺1	153
		+-	-	-	-		+	-	+	7700.0	_	┝	+	╄	+	+	$\vdash$	+	+	+				3E 1	9
1	44・45区授乱	2	-	-		-	4	1	1	不明2	_	_	+	+	+	-	-	+	+	-		7-0P 1		-	1
	61区攪乱	1	L	1	-		_	1	1		_	_	-	+	-	-	-	-	+	+		不明1	700.1	70 m 4% C	-
	5号溝埋土	10		25		6	6	i i		鉢 4 不明22	2		l		1 8	3 2		1	8			鉢 1 皿 1	不明1	碗皿類 7	122
	5 号溝裏込		T		T	1							1		Г			Г	Γ						2
	8 号溝	T		1	T	T	T		T		Γ		2		ı	Π					向付1				4
	ピット5	+	T	$\top$	T	1	t	T	T	不明1		T	1	T	1		T	T		T		不明1	碗皿類2		6
	ピット6	+	$\vdash$	+	+	t	-	1	t		T	T	t	$\dagger$	$\dagger$	T	1	1	T	-	不明3		火入?1		5
	ピット7	1 2	+	+	$\vdash$	+	+	+	+		$\vdash$	t	t	T	t	$\dagger$	T	$\dagger$	T	T			火入?1		4
	ピット10	8	+		14	4 1		1	6	瓶 1 不明26	2	!			1	2 2	2		1	1	不明 8		火入1 不明3	碗皿類18	95
1	不明	+	-	+	+-	+	+	+	+	1 1 9320	+	+	+	1	+	+	+	+	+	+			1	碗皿類1	6
		-		0 "	1	5 0	-	-	+	1 100	2/	+	+-	+-	6 1	1	4	1 1	1	1	0 73	3	8	216	+
-	合計	43	_	0 43	-	_	-	-			+	+-	4 6 1		8 1	-	-	1 1		_	0 96				-
L	I区・II区合計	5.	1	1 43	2	4 2	1 4	) I	4	1 128	1 35	1_	0 1	v	0 1	'ـــــــــ	<u> </u>	1 1	.0	1	0 30		14	1 210	1 022

 $1 \cdot 5 \cdot 6$  が  $2 \cdot 6$  層出土のものである。 1 は高台裏に $\square$ 明成化年製の銘をもつ、肥前産の磁器  $\square$ である。 見込みには手描きの五弁花文が施される。 5 は口縁部の釉が搔き取られており、蓋が付くものと思われる。

7~10が3層出土のものである。9は土瓶か急須の蓋で、明治の会津本郷で同様のものが多く作られている。10は口縁部の断面がT字状を呈し、体部内外面は鉄釉を施し、口縁部にのみ灰釉?を施す擂鉢である。二の丸跡第6地点で同様のものが2点出土しており(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 p.23・25)、類似した製品が福島県の岸窯で出土している。

2・3が1・2号石敷整地層出土のものである。2は縁折口縁で、端部を波状にした、肥前産の皿である。口縁帯文様は、濃淡の呉須を墨弾きで区分した波文で、外面側文様は2重線の唐草文が描かれている。3は陶器の飯茶碗で、全体に細かい貫入が入る。胴部に横方向に平行させる刻文を有する。

4は I 区のピット 1 から出土したもので、鉄釉が施された鉢である。産地・時期は明確でないが、形態から江戸時代のものと考えられる。

11~14が5号溝から出土したものである。11は刷毛目を施す皿で、外面に星印の刻印が見られることから、第二師団が使用したものであろう。14は鉄釉の施された耳付きの壷と思われる

表22 第4地点出土陶磁器観察表

Tab. 22	Notes	on	ceramics	at	NM4
---------	-------	----	----------	----	-----

						_		22 Ivotes on eera								
番	器形	出土場所	種	残	法		量	文 様 等		釉	薬	0/4 /	lete eth	<b>*</b> #	n+ #0	写真
号	no /IV	山上物川	類	存	口径	底径	器高	人 保 寺	134 9		貫入	胎土	焼成	産地	時 期	図版
1	Ш	2区2b層	磁	S	_	77	_	染付山水文、見込五弁花、	呉須	石灰	0	やや粗	やや甘	肥前	18 C	35-1
2	Ш	1号石敷埋1	磁	S	217	_	-	染付、口縁部波文、呉須		石灰	×	普	普	肥前	18 C	35-2
3	碗	2号石敷埋1	陶	S	-	39	_	刻文		灰釉	0	やや密	やや良	大堀相馬	18C~19C	35-13
4	鉢	10区ピット1	陶	S	_	1	78	無文		鉄釉	×	やや粗	やや甘	不明	不明	35-18
5	小型蓋物	31区 2 b層	磁	Μ	52	32	27	染付団円文、呉須		石灰	×	普	普	肥前	18C後半~19C	35-3
6	碗	40区 2 b層	磁	S	_	_	_	無文		石灰	0	やや粗	甘い	肥前	不明	35-14
7	飯茶碗蓋	44・45区攪乱	磁	S	104	_	23	染付唐草文、呉須		石灰	×	やや密	やや良	不明	19 C	35-4
8	Ш	56区3b層	磁	S	_	52	_	染付、呉須		石灰	×	やや粗	やや甘	肥前	17C後半~18C	35-5
9	土瓶蓋	58区 3 d 層	磁	Р	72	_	23	染付花唐草文、コバルト		石灰	×	良	やや良	会津本郷	明治	35-6
10	摺鉢	70区3a層	陶	S	_	_	-	口縁部灰釉		鉄釉	0	やや粗	やや良	岸?	17C後半~18C	35-15
11	Ш.	5号溝埋1層	炻	Μ	184	66	38	刷毛目に星印		石灰	×	普	普	不明	第二師団	35-16
12	湯呑	5号溝埋2層	磁	S	70	_	-	染付松文、コバルト		石灰	Х	やや密	やや良	不明	明治	35-7
13	飯茶碗	5号溝埋3層	磁	S	104	_	_	染付宝繋文、呉須		石灰	×	普	普	肥前	18 C	35-8
14	耳付壺	5 号溝埋 4 層	陶	S	108	_	_	無文		鉄釉	×	普	やや甘	美濃瀬戸	不明	35-20
15	徳利	42区ピット10	陶	L	_	89	_	無文		鉄釉	×	やや粗	やや良	不明	不明	35-17
16	土瓶	42区ピット10	陶	М	_	86	_	無文、漆継?		灰釉	0	粗	やや甘	美濃	不明	35-1
17	油壷	43区ピット10	陶	L		90	_	無文		鉄釉	×	普	やや良	堤	19 C	35-2
18	瓶	44区ピット10	磁	S	18	_	_	染付蛸唐草、呉須		石灰	×	やや密	やや良	肥前	18℃後半~19℃	35-9
19		41区ピット10	磁	S	_	60		染付菊花文、呉須、砂目積。	み	石灰	X	やや粗	やや甘	肥前	17 C	35-10
20	火入	41区ピット10	瓦	S	_	-	_	刻印菊花文		炭素	X	やや粗	普	堤?	不明	35-19
21	飯茶碗	39区ピット7	磁	S	112		_	染付笹文、呉須		石灰	×	やや密	やや良	不明	幕末前後	35-11
22	徳利	39区ピット7	磁	S	_	60	_	染付、呉須、砂目積み		石灰	×	粗	やや甘	肥前	17 C	35-12

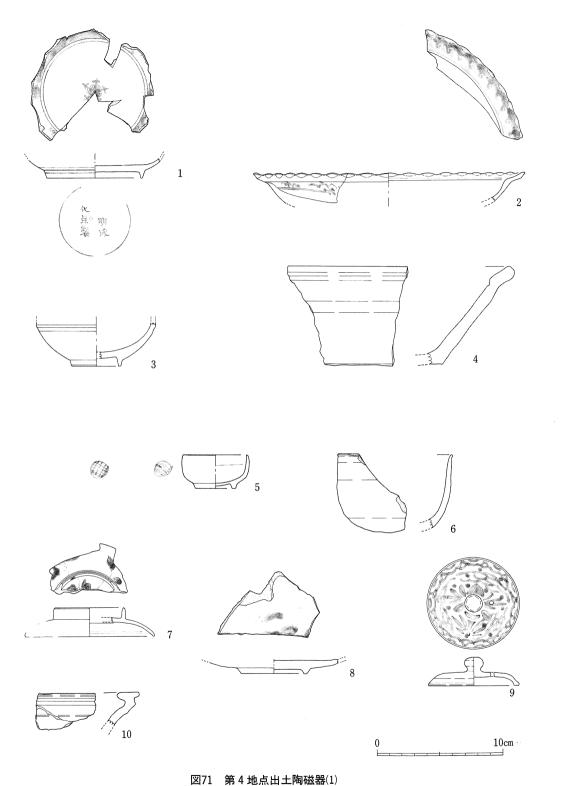


Fig. 71 Ceramics and porcelains from NM 4 (1) 18-19c. (8·10 Late of 17c.-18c.)

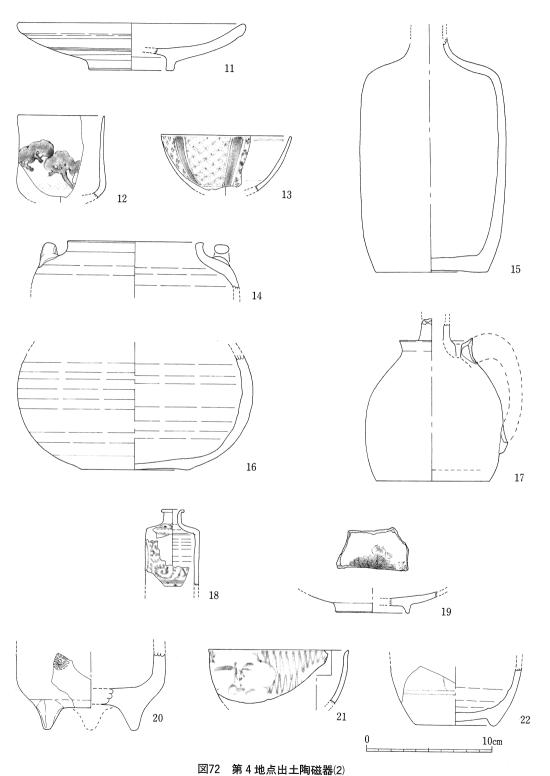


Fig. 72 Ceramics and porcelains from NM 4 (2) 18-19c. (19•22 17c.)

が、耳の数は不明である。器厚が厚く、耳も太く作られている。

15~20がピット10出土のものである。12は胴筒形の徳利で、底部は糸切である。16は、体部外面に注口の剝落がわずかに残ることと、細片ではあるが口縁部の同一個体片があり、その形状から土瓶と判断した。底部には火を受けた跡が見られる。また底部には、漆継らしい補修の跡が見られる。17は堤産の油壷で、底部は糸切りである。肩から胴部にかけて、取手が付けられ、頚部の油受けに設けられた小孔から、油が戻るよう工夫されている。18は蛸唐草文が全面に施された筒形の瓶で、油壷であろうか。19は高台に砂目積みの痕跡を残す、肥前産の皿である。20は円錐状の足を持つ瓦質の火入で、胴部に菊花の刻文があり、堤産の可能性もある。

21・22が掘立柱列3のピット7から出土したものである。21は薄い呉須で窓絵の中に笹文を描く飯茶碗である。22は砂目積みのある徳利の底部で、内面に厚く釉の垂れた跡が見られる。 (本田泰貴・藤沢 敦)

#### B. 瓦

江戸時代初期の6a層、および江戸時代と考えられるピット群からは平瓦と丸瓦の破片がわずかに出ているだけで、他は共伴する遺物から明治時代初期のものと考えられる。特にピット10と $52 \cdot 53$ 区の撹乱、および5 号溝に集中している(表22)。分析の手順は第7 地点に同じ。

#### 軒丸瓦.

すべて小片で、文様が確認できるのは九曜文1点、巴+連珠文2点のみである。

#### 軒平瓦類 (図73)

板状の桟が貼り付いていた痕跡がある破片が、I 類に1 点(1)、II 類に2 点(2 ・ 3 )あることから、丸瓦形の瓦当の付かない軒桟瓦があったことが分かる。これは後述する桟瓦のI ・II 類と組合わされて、塀の軒先を飾った可能性がある。

I類は2個体、II類は9個体出ており、三枚笹と唐草文で、第7地点のI・II類と同じである。III類は三引文で1個体(5)、IV類は星+唐草文で2個体出ている(4)。IV類はその文様から鎮台以降に製作されたものであろう。ピット10と3e層から各1個体出ており、ピット10ではI・II類と共伴するので、I・II類も鎮台以降に使用された可能性が出てくる。III類は三の丸巽門に類例がある(金森 1985 p.520・529)。伊達家の家紋の三引文を使っているので、二の丸時代に製作されたものとすると、5 号溝においてII類と共伴する。以上からこれらの遺構においては、二の丸時代の瓦と鎮台以降の瓦が混在している、もしくはI・II類が両時代に渡って使用されたことになる。

V類は1次調査区から8個体出ており、第8地点から出土したものと同じく、無文の瓦当である。表面に数字を刻印したものがあること、および第8地点での共伴遺物から陸軍時代のものと推定される。

# 平瓦 (図74-7~9)

ピット10、次いで5号溝から多量に出ているが、細片が多く抽出資料は全体で13点のみである。形態的特徴は第7地点のものにほぼ同じだが、表面の側縁に沿って面取りしているものがある(13点中8点、図74-9)。調整痕は第7地点と異なり、上下両端が横方向のナデであるほかは縦方向のナデが主である。表面が横ナデのものは抽出資料中では3点のみである。ナデはあまり明瞭なものではなく、多くの場合、縦横両方向が混在している。

表23 第4地点出土瓦集計表

Tab. 23 Distribution of roof tiles at NM4

[破片数・重量(単位kg)の順に表示]

											[#X/]	数・重量(単位	.ng/ v/	11941-24	1,1
区	出土地点	平 :	瓦類	丸	瓦 類	軒平	瓦	軒	丸瓦	栈	瓦	その	他	不!	明瓦
	1層	12	1.1			1(V類1)	0.09			1 (IV類1)	0.3	22 (櫛目19)	1.7	20	0.6
	2層 (2b層含む)	59	9.3	17	1.1	8 (V類5)	0.5			7 (IV類 4 )	0.8	51 (櫛目47)	2.4	152	3.9
	1号石敷埋土	29	4.5	8	0.4	1(I類1)	0.09			2 (IV類 2)	0.2	1	0.2	49	0.7
	2号石敷埋土	14	1.4	5	0.3					2 (IV類1)	0.1	2 (櫛目2)	0.05	29	0.4
١. ا	3号石敷埋土	10	0.7			1 (V類1)	0.05			3	0.3	8 (櫛目8)	0.5	5	0.03
Ι	4 号溝埋土			2	0.05										
	ピット8	125	14.2	5	1.4					4	0.6			106	1.5
	ピット19			2	0.06										
	ピット20			1	1.5										
区	ピット24													1	0.05
	ピット27			1	0.1									1	0.02
	ピット28			1	0.1							1 (櫛目1)	0.03		
	不明	8	0.37	11	1.0	4 (II・IV各1)	2.1			4(IV類1)	0.66	2 (櫛目1)	0.08	22	0.45
	合計	257	31.57	53	6.01	15	2.83	0	0	23	2.96	87	4.96	385	7.32
	2 b層	144	13.8	52	4.5	4	0.24	2	0.53	7 (IV類 3)	0.29	26 (櫛目14)	1.82	252	7.02
	3 a 層	12	1.2	18	1.5	1	0.07	3	0.6			1	0.04	56	1.2
	3 b層	12	1.4	11	0.7									10	0.15
	3 d 層	40	4.9	7	0.5	2 (III類1)	0.3			5	1.1	1	0.1	57	1.8
	3 e 層	45	6.5	3	0.2					6	0.6	1	0.3	47	1.7
	3 g層	10	1.6	1	0.07					2	0.5			59	1.5
	5 b 層	10	1.3	7	1.0							3	0.2		
II	6 a 層	3	1.0	2	0.1									3	0.05
	44·45区撹乱									1 (IV類1)	0.5				
	50~53区撹乱	60	6.4	6	0.8					3(II類1・ IV類1)	2.1	19 (櫛目7)	2.4	14	0.4
	64区撹乱	1	0.4							J					
	5 号溝埋土	100	18.0	83	18.0	4 (II~IV各1)	1.2	1	0.3	7	1.0	68	3.7		
	ピット4											1	0.06		
区	ピット5									1				2	0.06
	ピット6	1	0.4	1	0.03					70711000					
	ピット7	1	0.5												
	ピット10	326	88.5	33	8.9	25 (I類1・ II類7・IV類I)	6.3			100(I類14 ・II類6・ III類7)	28.7	32	6.7	140	5.7
	ピット11	1	0.3	2	0.2					1	0.1			3	0.05
	ピット14	1	0.3	3	0.2					1	0.6	1	0.3	5	0.1
	合計	767	146.5	229	36.7	36	8.11	6	1.43	127	34.59	92	12.92	716	23.43
ΙD	▼・II区合計	1024	178.07	282	42.71	51	10.94	6	1.43	150	37.55	179	17.88	1101	30.75

#### 丸瓦 (図73-6)

5 号溝、次いでピット10から多く出ているが、細片が多く、抽出資料は2点のみである。形態的特徴、製作・調整痕は第7地点にほぼ同じである。

### 栈瓦. (図74~77)

IV類以外はピット10に集中している。 I・II類は桟の一端が残っている破片について、桟の突出ないし切込みが有るか否かによって識別した。細分できなかった桟瓦の多くは、I・II類の区別が付かなかったものである。

I類:幅約60mmの板状の桟を貼付けたもの。完形品は無く、I a 類は約15mmの頭の突出部分を持つ破片( $10 \cdot 11$ )。I b 類は逆に尻の切込み部を持つ破片で、切込み長が $80 \cdot 100$ mmと長いことから、ここに棟の瓦が組み合うと考えられる( $12 \cdot 13$ )。I a  $\cdot$  I b 類が同じ型の瓦の破片とすると、長さ約280mmで、幅は桟を欠いた破片 1 点(15)から約280mmと推定される。I c (14)  $\cdot$  I d 類はそれぞれ I a  $\cdot$  I b 類の右桟瓦である。

こうした板状の貼付け桟を持つ瓦は通常の建物の屋根ではあまり知られていないので、塀瓦の可能性が考えられる。その場合、1列のみ葺いていたとすると、突出した頭の桟部分が軒の装飾的効果を出していたことになる。しかし、瓦の長さが短いことから、数列重なっており、軒先に先述の軒桟瓦を付けていた可能性も考えられる(図79下段の復元図)。棟部は熨斗瓦が見当らないので、丸瓦を載せていた可能性がある。通常の桟瓦は右桟であって、左桟は特殊な場合に使われるが、ここで出土している I 類は左桟が多い(個体数は I a 類10点、 I b 類 4点: I c 類 1点、 I d 類 1点)。

II類:第6地点(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990)との比較から塀桟瓦と推定される(図79上段の復元図)。棟側の桟の一端が薄くなり、棟の構造を受けるようになっている。完形品は無いが、尻側に釘穴、差込み部に水切り溝を持つと推定される。II a 類は右桟(I6)、II b 類は左桟(I7)。II c 類は差込み側の破片である(18・19)。個体数はII a 類 3 点、II b 類 1 点、II c 類 1 点である。釘穴だけ、水切り溝だけの破片は抽出しなかったので、実際にはII 類の数はもっと多いと考えられる。

 $III \cdot IV$ 類:通常の建物の屋根の桟瓦で、III類は桟の屈曲部に稜線が通るもの( $20 \cdot 21$ )、IV類は緩やかに屈曲するものである。IV類は主に I 区に散在し、「その他」の項で述べる櫛目を持つ破片が 1点ある。

#### 輪違い

ピット10より2点、74区より1点出土。

## 面戸瓦

第7地点と同型のものが、52区撹乱、5号溝より各1点出土。

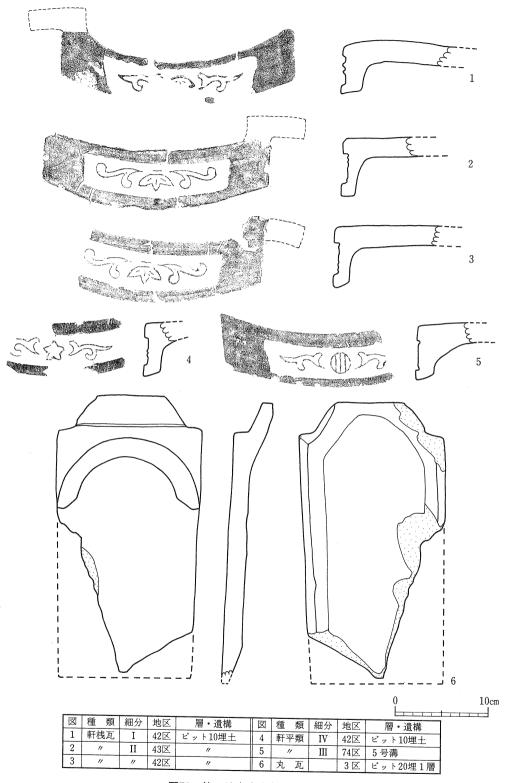


図73 第4地点出土軒平瓦・丸瓦

Fig. 73 Flat eaves tiles and round roof tiles from NM  $4\,$ 

Mid. of 19c.

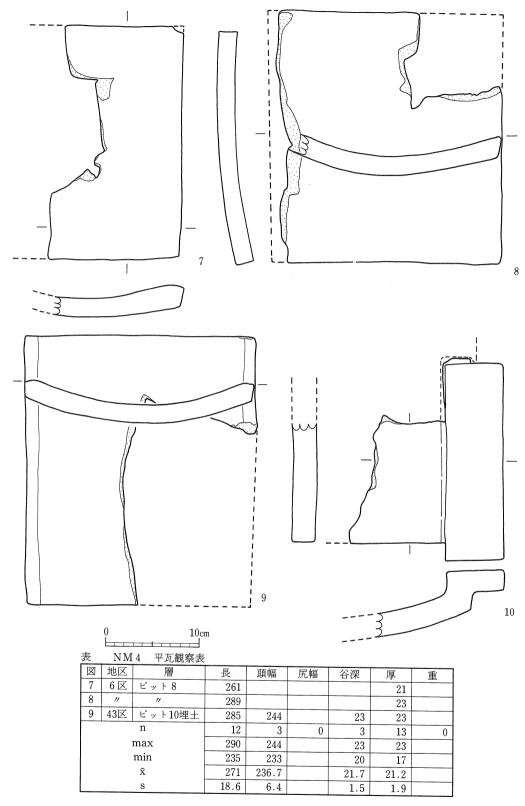


図74 第4地点出土平瓦・桟瓦(1)

Fig. 74 Flat roof tiles and pan tiles from NM 4

Mid. of 19c.

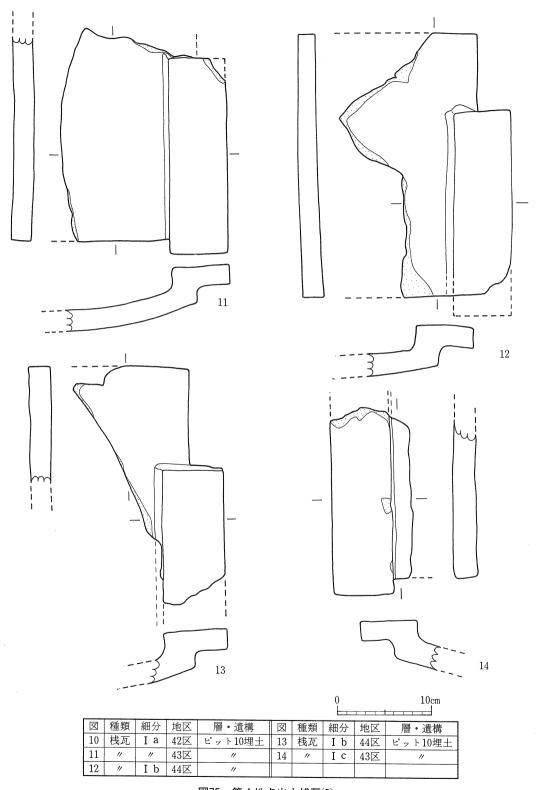


図75 第4地点出土桟瓦(2) Fig. 75 Pan tiles from NM 4 (2)

Mid. of 19c.

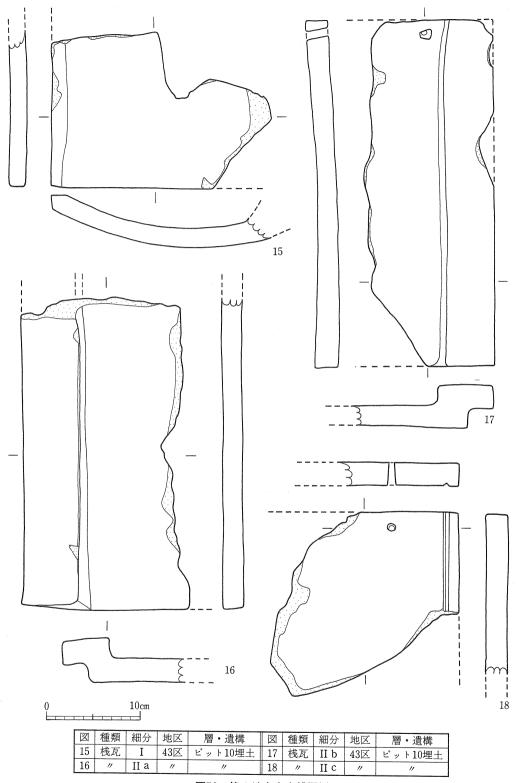


図76 第 4 地点出土桟瓦(3) Fig. 76 Pan tiles from NM 4 (3)

Mid. of 19c.

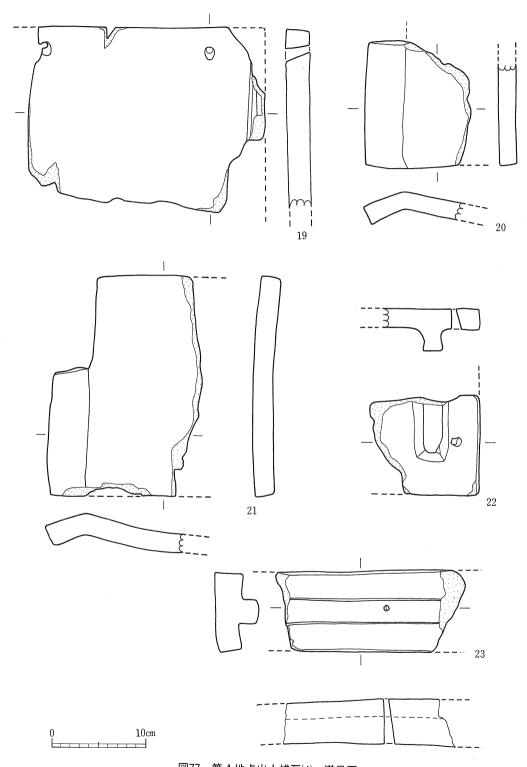


図77 第4地点出土桟瓦(4)・道具瓦 Fig. 77 Pan tiles and other roof tiles from NM 4 Mid. of 19c.

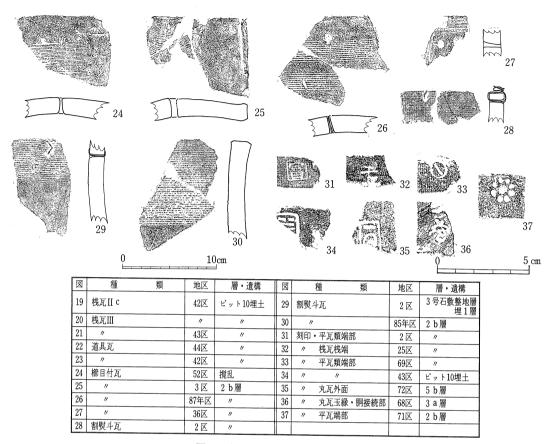


図78 第4地点出土その他の瓦 Fig. 78 Various roof tiles from NM 4

Mid. of 19c.

# 道具瓦 (図77-22・23)

用途不明のものが 2 点出土。 23は第 6 • 7 地点出土のものと同型で、 5 気穴が斜めに通るのが特徴である。

# その他 (図78-24~28)

滑り止めの櫛目の付いた破片が見られる。第7・8地点からも出土しており、当地点ではI区に多い(2 層、2・3号石敷整地層等)。II区では2 b 層と52区撹乱に見られる。二の丸時代に属するのか鎮台以降に属するのか不明である。平瓦もしくは桟瓦と考えられる。櫛目をつけた桟瓦IV類の破片も1 点検出されているが、全体として櫛目や厚さに変化があることから複数の種類の瓦が含まれている可能性があるので、ここではその他として扱う。全体の43%が赤味を帯びている。こうした特徴は第4・7・8 地点の他の瓦の種類には見られない。焼成時に生じた特徴か、火災等による二次的な変色か不明である。特に裏面が表面よりも赤くなっている破片が見られるので、火災とすれば、屋根の内側から火を受けたことを示すのだろうか。II区2b 層からは、釘穴に銅釘もしくは銅線が残存するものが1点出ている。また割熨斗瓦と推定さ

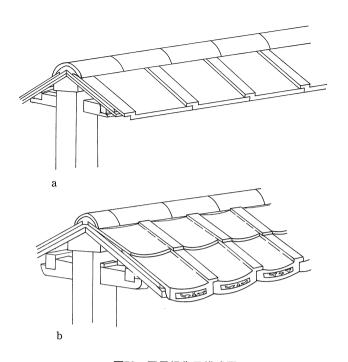


図79 瓦屋根復元模式図

Fig. 79 Restored illustrations of roofs at NM 4

れる破片が、I 区 2 層と 3 号溝から計 3 点出ている $(28\sim30)$ 。これは櫛目が湾曲に直交することが、平瓦あるいは桟瓦と推定される他の櫛目瓦と異なり、裏面に櫛目の方向に溝を付け、そこで割っている。直径 1 mmの細い銅線が通され、1 点は破損部で銅線が結ばれている。熨斗瓦と考えると櫛目が瓦の傾斜と直交し、滑り止めの役目を果たし得る。湾曲を考えると、滑り止めは上面につくが、何枚か重ねることを考えれば、それでも良いのだろう。

# 刻印 (図78-31~37)

すべて二の丸初出である。31は富、32はモ、33は丸に一、36は草冠の漢字のように見える。37は九曜文である。また数字を刻印した先述の軒平瓦V類がある。

以上をまとめると、第4地点出土の瓦は、ほとんどが平瓦、丸瓦、塀桟瓦で、二の丸最終段階から陸軍時代の初期に使用され、廃棄された物と推定される。左桟が多いI類の塀桟瓦が実際にどのように葺かれていたのか興味深い問題である。また櫛目の付いた瓦に割熨斗瓦が有ることが確認された。

#### C. 木製品 (図80・81)

6a層及び8号溝に集中している。地層から二の丸建築(1638年)以前、江戸時代初期の伊達宗泰の屋敷時代の遺物である。主なものに木簡1点、箸、桶がある。また明治初期のピット10から焼けた木片が集中して出土した。

#### 木簡(1)

釈文 「○ [ ] 字右衛門」○ [ ] □ □

表裏に墨跡が認められるが、上記人名以外はほとんど消えかけており、赤外線写真でも判読不能。上部に角錐で穿孔されており、形態から第 5 地点出土の木簡(佐久間他1989)同様、荷札と考えられる。ただし、第 5 地点のものと異なり、下方が尖っており、品物あるいは包んできた俵に直接刺したもののように思われる。その場合、上の孔が問題となる。例えば孔に紐が通され、品物に結わい付けられるとともに下方で固定されたのだろうか(田中秀和氏による)。  $\mathbf{3}$  (3 ~10)

白木の箸で6 a 層出土のものは計 554点中、完形品57点、2分の1以上の破片が169点である。 長さは8のみ23.5cm(約8寸)で、他はすべて約26cm(8.5寸)であり、第2地点(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985)の6寸に比べ、長い。藤本(1990:pp.167~168)が指摘するように、こうした箸は饗宴に使用された後、一括して捨てられた可能性がある。

#### 桶

6 a 層より底板 1 点(2)、側板と思われる破片 6 点が出ている。 5 5 2 点は片隅が切り落とされているが、理由は判らない( $11 \cdot 12$ )。

# 鉛筆

明治以降の2 b 層より 1 本出土(15)。唐澤(1968: pp.81~83)によれば、鉛筆は江戸初期にオランダ人により輸入された。明治初期から中期にかけて日本でも細々と製作されはじめ、明治末に鉛筆工場が各地に建ち、大正時代に大発展した。第 8 地点の遺物から伺い知れる筆と硯、石筆と石盤、そして紙石盤、第 4 地点の鉛筆とノートという流れは筆記具の革命であったという。

#### D. ガラス製品 (図81)

5号溝より多く出ているが、復元できるものは少ない。その中に、直線的に大きく開く、乳白色のガラスの破片が多く含まれており、ランプの笠と思われる。容器には、両側面に型の合わせ目が残る小型の瓶(13)と浅い瓶がある(14)。

# E. 骨角器 (図81-17・18)

第8地点出土例に類似した、鹿角製の笄かと推定される破片が2点出土している。

#### F. その他の遺物 (図81)

明治以降のものとして、真鍮製の釣り針1点(16)、碁石1点(19)、靴と推定される皮製品2点などが出土している。また縄文時代以前の石器5点、縄文土器1点が出土している。縄文土器は細片であるが、撚糸文が施されている。

(山田しょう)

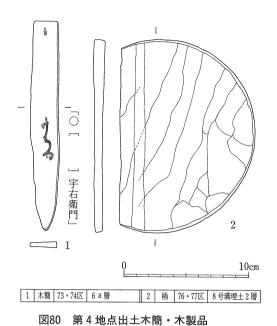


Fig. 80 Wodden tublet and trough from NM 4

Beg. of 17c.

表24 第4地点出土その他の遺物集計表 Tab. 24 Distribution of various implements at NM4

(点数、木端等のみグラム数)

地区	出土地点	木 製		品	ガラ	ラス	金属		属 製 品		骨角製品	その他	自然	遺物		
区		製	ß	木端等	板	容器	洋釘	和釘	その・	他	月月級印	٠,	e e	植物	動	物
I	2 b 層						2	1	ボタン1			石器1	、珪化木1		貝1	
	1号石敷埋土				1		1	1				石器1		木片1		
	3号石敷埋土														貝1	
	ピット19													木片1		
	ピット26						3									
	ピット28											石器1	,			
	不明				3				不明 1							
II 区	2 b層	漆製品 2		110	20	43	28	8	薬莢1、不	明 6	笄?1		、靴?1 1、ゴム1		骨・ウ	ロコ有
	3 a 層								寛永通宝1							
	3 b層					1			不明銭貨1							
	3 d層						1									
	3 g層				1											
	6 a 層	箸554、桶( 木簡 1	則板 6	357												
	44・45区攪乱											石器 1				
l	50~52区攪乱			8	3	1	31	1	針金1、不	明 2						
ĺ	5 号溝			7	30	70	3		不明釘 2		笄?1	靴底1			骨有	
	8 号溝	箸 6 、漆碗 桶底板 1	1	425										モモ54、その他		
	ピット4							1								
	ピット5							1				石器 1	. 縄文土器 1			
	ピット6			7	1								The state of the s	クルミ1		
	ピット10	箸5、漆箱	i側板 1	1905	1			2				碁石1	. 釣針 1			
	ピット11			15						•						

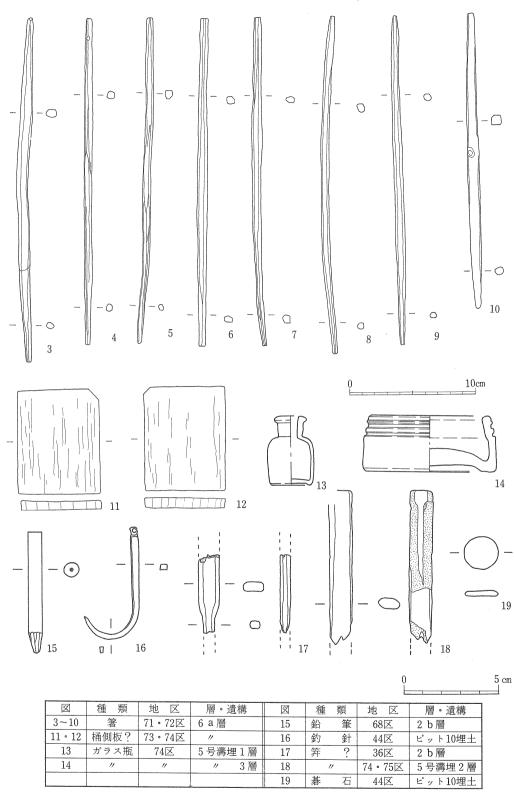


図81 第4地点出土その他の遺物

Fig. 81 Various implements from NM 4

3-12 Beg. of 17c. 13-19 *Meiji* period

# 第Ⅲ章 考 察

今回の調査で確認された 3 列の掘立柱列と 4 号溝跡は、いずれも真北方向を基準として、 $N-29^\circ \sim 31^\circ - W$ の方向を取る。また、二の丸造営以前と考えられる下層の  $6 \cdot 7$  号溝跡の方向は、 $N-61^\circ \sim 63^\circ - E$  で、これとほぼ直交している。 $1 \sim 4$  号石敷整地層の下面の溝状の落込みの方向は $N-53^\circ - E$  で、5 号溝の方向は $N-67^\circ - E$  と、これらとは若干ずれる。しかし、これらは明治時代に入ってからの建造である可能性が強いことから、ここではとりあえず除外して考えるとすると、第 4 次調査地点で検出された遺構は、おおむね南北方向で、 $30^\circ$ ほど西偏した基準に沿って造営されていることとなる。

これまで東北大学埋蔵文化財調査委員会で調査した成果から、絵図に残る二の丸建物との対比を行ったものとしては、1983年度に調査した、第 2 次調査地点の成果があげられる。この第 2 地点では、礎石建物跡が検出された。この礎石建物跡は、同じ年度に調査した第 3 次調査地点で検出された二の丸南端を区画する石垣との位置関係から、小広間裏の廊下に対応するものと推定した。このような成果をもとに、『東北大学埋蔵文化財調査年報 1』の「付図 1 現況建造物・道路と二の丸建造物との関係」において、現況での二の丸建物群の推定位置を示した。この二の丸建造物の現況での位置推定の根拠の一つは、この第 2 地点の礎石建物跡を小広間裏の廊下に対比することであり、さらに留学生宿舎と記念講堂前の公園との境の段差の2.5mほど西側に 2 ~ 3 段ほど現存する石垣を、「詰の門」の南側の外郭線の石垣が遺存しているものとする考えであった。現在の大学の道路や建物は、 $17^{\circ}$ ~19°ほど西偏した地割で造られている。この石垣は、現在の段差とほぼ平行し、わずかに西に振れており、ほぼ $N-20^{\circ}$ —Wの方向を取る。また、第 2 地点検出の礎石建物跡は、磁北から $15^{\circ}$ ほど西偏していた(仙台付近では磁北は真北から $15^{\circ}$ 6 と西偏する)ことから、『年報 1』の「付図 1」での復元では、二の丸建物群は、現在の大学の地割より、わずかに西に振れる $10^{\circ}$ 6 での復元では、二の丸建物群は、現在の大学の地割より、わずかに西に振れる $10^{\circ}$ 7 での方向で復元されている。そのため今回の第 4 次調査地点の遺構の方向とは、 $10^{\circ}$ 10°でのずれが生じることとなっている。

これまでに、二の丸内で建物が検出されている地点としては、第2・第5・第9地点の調査があげられる。第2地点で検出された礎石建物跡の方向は、前述のように磁北から15°ほど西偏するが、調査範囲が狭いことと、磁石の精度で問題を残している。また、調査時の基準点がすでに失われており、国土座標上で検証できない。1988年度に本調査を行った第5地点では、上層から二の丸が元禄期に拡張された後の中奥の建物群、下層からは伊達政宗の長女五郎八姫の屋敷である西屋敷の建物群が検出されている(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1988)。これらの建物群は、上層・下層ともにN-24°-W前後の方向をとっている。1990年度に本調査を行った第9地点では、上層から二の丸建物群、下層から伊達宗泰の屋敷の建物群が検出されている

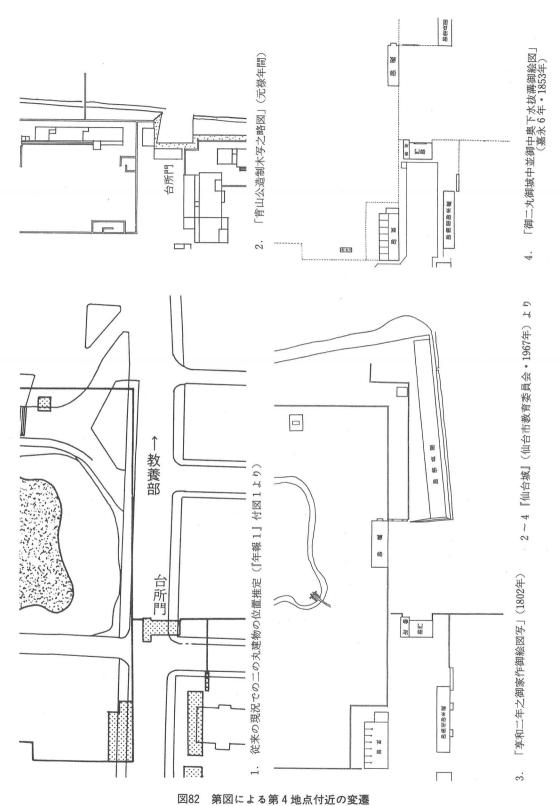


Fig. 82 Transition of the area around Loc.4 shown on historical maps

(東北大学埋蔵文化財調査委員会 1991)。ここでは、上層の二の丸建物群は $N-24^\circ-W$ 前後、下層では、 $N-27^\circ-29^\circ-W$ 前後の方向である。第 $5^\circ$ 第9地点の調査成果については、いずれも詳細な検討を加えていない段階なので、まだ不確実な部分を残すが、主要な建造物の方位については、上記のように考えて間違いないものと思われる。したがって、これまでの調査成果からは、二の丸建物群は $24^\circ$ ほど西偏する基準に沿って造営されている可能性が高いと考えられる。そうすると、 $20^\circ$ 西偏する留学生宿舎裏の石垣を、二の丸正面の外郭線の跡と見なして良いのか否かも、再検討する必要が出てきたこととなる。

今回の調査で検出された遺構の内、下層の6~8号溝跡は、後述するように、伊達宗泰の屋 敷跡の建物群の方位と対応するため問題は無い。問題は掘立柱列と4号溝跡である。

従来の位置推定では、二の丸の裏門である「台所門」から北に伸びる外郭線が、当調査地点の付近にくると推定されてきた。この外郭線は、元禄年間に旧西屋敷の範囲に二の丸が拡大されて以後のものであるが、いずれの絵図においても、二の丸正面(東側)外郭線や二の丸内の建物群と同じ方向で描かれている。絵図の記載を信用するとなると、1~3号掘立柱列は、二の丸内の建物の方位とも、上記の石垣の方位とも合わないことから、掘立柱列のいずれかが外郭線の塀跡とする推定は困難になる。あるいは、二の丸内の主要建物群の方位は一定していても、外郭線など周辺部分では、微妙に方向がずれてくる可能性も考えられないわけではないが、絵図の中には方眼に沿ってこれらの建造物が並んでいるものもあり、やはり問題が残る。

もう一つの可能性としては、従来の推定より、二の丸の建物群が全体に西に振れていたと考える場合である。二の丸内の建物群の方位が $N-24^{\circ}-W$ 前後であることから、第 2 地点の礎石建物を中心に、従来の位置推定からさらに西に  $2\sim3^{\circ}$ 振った場合、二の丸外郭線は、今回の調査範囲からははずれ、外郭線北東隅の外側にある、「御借長屋」が相当してくる可能性がでてくる。「御借長屋」は、二の丸建物よりさらに  $5^{\circ}$ 前後西に振れて絵図に描かれており、今回検出された掘立柱列などの方向と良く対応してくる。よって、  $1\sim3$  号掘立柱列と 4 号溝は「御借長屋」かそれに付随する何らかの施設であると考えることもできる。ただし、この場合、「台所門」が調査区にかかってくるはずであるが、うまく対応するような位置に遺構が認められない。また、現存する最も古い仙台城が描かれた絵図である、正保  $2\cdot3$  年( $1645\cdot46$ )の「奥州仙台城絵図」では、西屋敷が二の丸に取り込まれる以前の状況が描かれているが、二の丸裏門の前から北側の侍屋敷地までの間の西屋敷の東側は、南北に長い「ため池」となっている(図63)。「御借長屋」は裏門の正面やや東よりの位置にくるため、下層にこの「ため池」がかかってきても良さそうである。しかし、今回の第 4 次調査地点の調査では、 1 区の北側では、比較的低湿な状況を呈していたものの、ため池と考えられるような遺構は検出されなかった。

以上、いくつか考えられる可能性を検討してみたが、調査範囲が狭いこともあり、いずれに

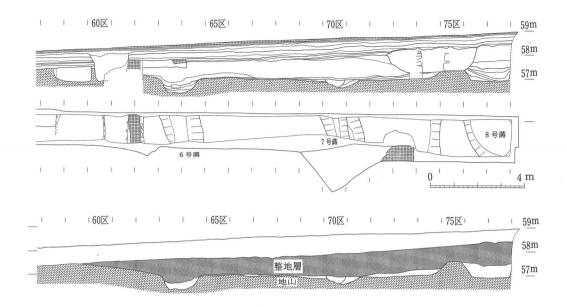


図83 旧地表面と整地層の関係 Fig. 83 Relation between *Edo* habitation surface and fill layer

しても、今回の調査成果だけで判断することは困難であると言わざるをえない。今後、多くの 建物跡が検出されている、第5・第9地点の整理・検討の過程で明らかにしていくことが必要 であろう。

第4地点の調査では、II区の南端付近で大規模な整地層(5層)と、その下層から東西に伸びる3条の溝跡が検出された(6~8号溝)。この下層遺構から出土した遺物は、時期の判明するものは少数であるが、17世紀初頭頃のものと考えられる。また、5層の整地が大規模である点もあわせて、5層は二の丸造営時の整地層と考えられる。下層検出の溝跡は、正保2・3年の絵図によれば、二の丸ともとの西屋敷の境界付近に位置する。寛永15年(1638年)に二の丸が造営される前には、伊達宗泰の屋敷がここにあったことが知られており、これらの溝跡は宗泰の屋敷と西屋敷を区分する何らかの施設であったと考えられる。これらの溝跡の方向は、30°近くずれており、第9地点の伊達宗泰の屋敷跡と考えられる下層建物群の方位とほぼ対応する。

今回検出された下層遺構のうち、8号溝とその北側の74・75区で確認された落込みの間は、 土手状に掘り残された高まりとなっている。この高まりは、その上部が5号溝によって破壊されているが、8号溝の埋土の状況から、江戸時代初頭の地表面と整地層の関係を復元してみたのが図83の下段に示した模式図である。このように考えると、5層の整地が始まる59区の地山のもっとも高い部分と、75区の土手状の高まりの高さは、ほぼ同じ高さとなり、その間は幅の広い浅い堀状を呈していたものと考えられる。6・7号溝は、この幅の広い落込みの中に掘られている。この範囲に堆積した6層の状況と、6a層上面から多量の木製品が出土していること から、ここは低湿な状況であったことがうかがえる。6・7号溝は、それらが平行していることから、道路の側溝の可能性も考えたが、以上の点からその可能性は薄いだろう。むしろ伊達宗泰の屋敷と西屋敷との間を区画する堀状の浅い掘り込みの中で、その排水を目的とした溝であった可能性を考えておきたい。8号溝は、これらの南側にあって、さらに宗泰の屋敷を区画するものであろうか。

この第4地点の調査までは、二の丸跡の調査では、江戸時代初頭の遺物の出土や、二の丸造営以前にさかのぼる可能性のある遺構も、いくつかの地点で検出されてきた。しかし、確実に二の丸造営以前に遡る遺構の検出は無く、今回の調査が初めての例となり、これによって宗泰の屋敷と西屋敷との境が、ほぼつかめたこととなった。伊達宗泰の屋敷と西屋敷については、絵図などの資料がほとんどなく、江戸時代初頭の当地域の様相を解明していく上で、貴重な資料となった。

(藤沢 敦)

# 《引用・参考文献》

朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信編 1970 『事物起源事典 (衣食住編)』東京堂出版

阿刀田令造 1936 『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会博物館図書部研究報告第四

伊東信雄 1967 「仙台城の歴史」『仙台城』 pp. 1~22 仙台市教育委員会

伊藤正義他 1990 『東北の陶磁史』福島県立博物館

大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニューサイエンス社

大竹憲二 1989 『大堀・長井屋窯跡』浪江町教育委員会

大堀相馬焼協同組合・創業三百年祭実行委員会 1988 『創業三百年記念誌』

岡泰正他 1987 『明治のガラス展―びいどろからガラスへ―』神戸市立博物館

奥津春生 1967 「仙台城の地形・地質」『仙台城』 pp. 123~165 仙台市教育委員会

金森安彦 1985 「三の丸巽門跡(VI区)の調査」『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』

仙台市文化財調査報告書第76集 pp. 509~546

唐澤富太郎 1968 『図説 明治百年の児童史 下』講談社

元興寺文化財研究所 1982 『中・近世瓦の研究―元興寺篇』

九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

麒麟麦酒株式会社編 1957 『麒麟麦酒株式会社五十年史』

小林清治編 1982 『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書 2

佐久間光平・山田しょう・田中秀和 1989 「宮城・仙台城二の丸跡(第五地点)」

『木簡研究』11 pp. 83~85 木簡学会

佐藤広史他 1990 『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第3集

佐藤 巧 1967 「仙台城の建築」『仙台城』 pp. 23~87 仙台市教育委員会

芹沢長介編 1978 『切込』東北大学文学部考古学研究会

芹沢長介他 1981 『日本やきもの集成』 1 平凡社

芹沢長介 1983 「東北地方の近世陶磁」『世界陶磁全集』 9 pp. 227~259 小学館

芹沢長介 1987 『東北の近世陶磁』東北陶磁文化館

仙台市教育委員会 1967 『仙台城』

仙台市教育委員会 1985 『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集

大日本窯業協会編 1915 『日本近世窯業史第四編硝子工業』大日本窯業協会雑誌号外

高橋良一郎 1977 『ふくしま文庫40 相馬のやきもの』福島中央テレビ

田口昭二 1983 『美濃焼』ニューサイエンス社

棚橋淳二 1990 「江戸時代のガラス器の識別基準」『THEびいどろ展』 pp. 6~13 神戸市立博物館

坪井利弘 1976 『日本の瓦屋根』理工学社

坪井利弘 1977 『図鑑瓦屋根』理工学社

東北大学埋蔵文化財調査委員会 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 1

東北大学埋蔵文化財調査委員会 1988 『仙台城二の丸跡第5地点の調査―現地説明会資料』

東北大学埋蔵文化財調査委員会 1990 『東北大学埋蔵文化財調査年報』 3 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1991 『仙台城二の丸跡第 9 地点の調査―現地説明会資料』 楢崎彰一他 1980 『日本のやきもの集成』 3 平凡社 平凡社編集部編 1984 『やきもの事典』 濱田徳太郎編 1936 『大日本麦酒株式会社三十年史』大日本麦酒株式会社 結城慎一 1985 「瓦」『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集

pp. 158~182

#### REPORT

# OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

vol. 4, 5 March 1992

The Commission of Buried Cultural
Properties on Campus, Tohoku University
Katahiracho, Sendai 980 JAPAN

# CONTENTS

# Vol. 4

I General review of excavation in fiscal year 1986

1. Introduction

Kohei SAKUMA

2. Excavations

Kohei SAKUMA

3. Other activities of the Commission

Kohei SAKUMA

II Excavations on the Kawauchi Campus

1. Geological location and history of Kawauchi Campus

Kohei SAKUMA

2. Excavation at NM7

Kohei SAKUMA, Shoh YAMADA, Yasutaka HONDA

3. Excavation at NM8

Kohei SAKUMA, Shoh YAMADA, Atsushi FUJISAWA, Yasutaka HONDA

III Discussion and conclusion

1. Excavation at NM7

Kohei SAKUMA, Atsushi FUJISAWA

2. Excavation at NM8

Kohei SAKUMA, Atsushi FUJISAWA

Vol. 5

I General review of excavation in fiscal year 1987

1. Introduction

Kohei SAKUMA

2. Excavations

Kohei SAKUMA

II Excavations on the Kawauchi Campus

1. Review on past excavations

Kohei SAKUMA

2. Excavation at NM4

Kohei SAKUMA, Shoh YAMADA, Atsushi FUJISAWA, Yasutaka HONDA

III Discussion and conclusion

Atsushi FUJISAWA

# THE EXCAVATION OF THE SECONDARY CITADEL OF THE SENDAI CASTLE

This is a report for three locations in the *Ninomaru* (the secondary citadel of Sendai Castle) excavated by the Commission of Buried Cultural Properties on Campus from 1985 to 1987.

# The History of Ninomaru

The primary citadel of Sendai Castle was built in A.D. 1600 by *DATE Masamune*, the first *daimyo* of *Sendai-han* (feudal clan) appointed by the *TOKUGAWA* shogunate. It was a strategic location on a hill 120m above sea level, whose eastern and southern boundaries were guarded by cliffs of 70m.

However, when the age of war in Japan was over, the primary citadel on the high hill became inconvenient and in 1638, *DATE Tadamune*, the second *daimyo*, built a secondary citadel on a lower terrace where the faculties of liberal arts of Tohoku University is now located. Before *Ninomaru*, the area was occupied by the residence of *DATE Muneyasu*, the fourth son of *Masamune*, and on the north side of *Muneyasu*'s residence, the *Nishiyashiki* (The West Residence) of *Iroha-hime*, the first daughter of *Masamune* was built in 1620. *Ninomaru* was built at the site of *Muneyasu*'s residence, while *Nishiyashiki* survived the 17 century until *Ninomaru* was extended to the north side. *Ninomaru* had practically been the center of the government of *Sendai-han* as well as the residence of the *daimyo* for some 250 years until the *Meiji* Restoration. Although it was destroyed by earthquakes and fires a couple of times, it was quickly reconstructed each time.

In 1886, the Tokugawa shogunate was replaced by the new government of the Emperor (the *Edo* period was over and the *Meiji* period had begun). Japan put an end to 200 years of national isolation, and Western culture was imported rapidly.

Prefectures were established instead of feudal clans, and the *DATE* family rule was over. In 1871, the *Ninomaru* was occupied by the Japanese imperial army which had been newly organized in Western style. In 1882, almost all of the structures of *Ninomaru* were lost in a fire, and its brillant history was over.

The site continued to be occupied by the imperial army, until the American army occupied it after World War II. The site area became the Tohoku University campus in

1957 and an organized excavation began in 1983.

# VOL. 4

### NM7

This location corresponds to the area of the Sendai Castle storehouses found on the the historical illustrations of Sendai Castle. Since this was the rescue excavation for planting trees, only 12 of small area were excavated. No eminent structures were found except two ditches, pit holes of a building, and a pit in which roof tiles were disposed. The building may corresponds to a part of an arms magazine found on the historical illustrations. Most of the artifacts excavated were ceramic roof tiles. Several units of roof tile disposal were detected. Infered from associated ceramics and western nails, these were disposed at about the *Meiji* restoration. Round roof tiles and flat roof tiles are the most abundant. There are also ridge decoration tiles, filler tiles, round eaves tiles, flat eaves tiles and ridge tiles, which makes the restoration of a roof possible.

#### NM8

NM8 is located on the northern bank of a small swamp. At this location, depending on which historical illustrations of Sendai Castle, a moat, a pond, or a swamp which consitituted the northern boundary between *Nishiyashiki/Ninomaru* and *Samurai* residences can be found.

At the excavation, northern edge of the moat/pond, a well, pits and a ditch-all belonging to the *Edo* period-were discovered. In the *Meiji* period (1868-), the moat/pond became shallow, being buried by natural sediments and earth fill, and at the final stage, trash of the imperial army are dumped there: including a number of ceramics and glass containers. The ceramics are important specimens of the *Meiji* period which has not been well investigated. Most glass container shards are those of beer bottles which represented the diffusion of western liquors in those days. The shape of the bottle rim indicate that they had corks. Association of the bottles and the ceramics at the site is not contradictory to the known fact that the change from a cork to a metal stopper in beer bottles in Japan began in 1940.

VOL. 5

NM4

Three phases of features were detected.

The Oldest phase includes ditches, and ceramics belonging to the beginning of the 17 century, non-lacqueed chopsticks, a wooden tablet and so on. The habitation surface was covered with earth fill from *Ninomaru* construction. The ditches are inferred to be the boundary of *DATE Muneyasu*'s residence and *Nishiyashiki*, based on their location and the dates of ceramics. This is the first archaeological discovery of constructions related *to the Muneyasu*'s residence which had few written records. The direction of ditches (N-60° -W) coincides with that of post hole rows found on the same habitation surface at Loc. 9 in 1990. A number of earthernware dishes and chopstics are inferred to have been dumped after only one time of use at a ceremony/banquet, according to the custom of those days.

The second phase includes a ditch and three rows of pit holes. The precise date cannot be determined because of the few artifacts yielded, but they are inferred to be parts of the *Ninomaru* construction. However, the direction of pit hole rows are N-30°-W which is different from N-24°-W of the *Ninomaru* constructions found at other locations. It is difficult to identify the type of constructions but they are difinetely located near the North Gate of *Ninomaru*.

The final phase of Loc. 4 includes a ditch and pebble fills. They are dated to the *Meiji* period from the associated artifacts.



図 版





1. 第7地点全景 (南から)



2. 第7地点全景 (北から)

図版 1 第7地点全景 Pl. 1 Views of NM7



 1. 1区最終状況 (西から)



2. 2区3層遺物 出土状況 (南から)

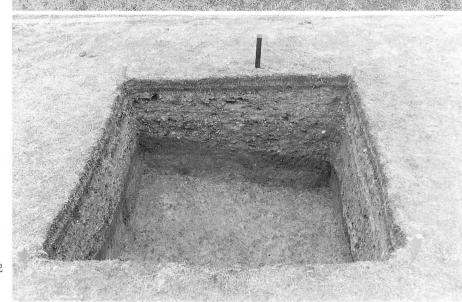


3. 3区3層遺物 出土状況 (南から)

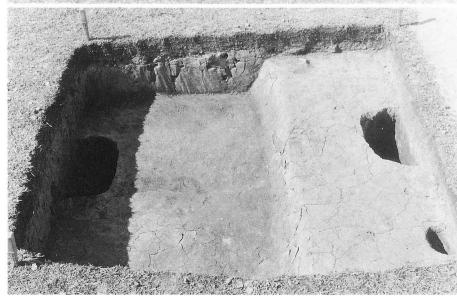
図版 2 第 7 地点発掘区(1 区・2 区・3 区) Pl. 2 Views of Grid 1, 2 and 3



1. 4区最終状況 (南から)

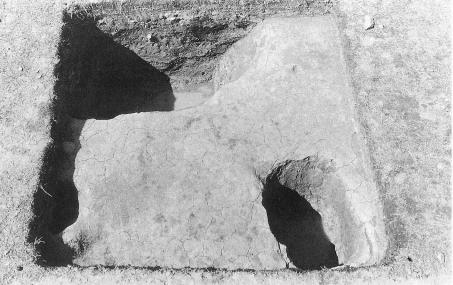


 5 区最終状況 (西から)

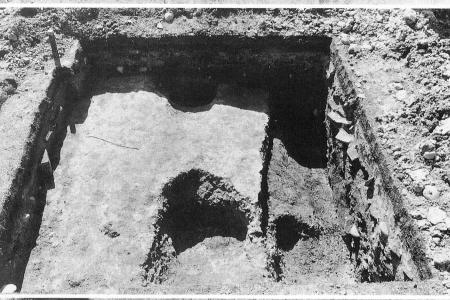


3. 6区最終状況 (南から)

図版3 第7地点発掘区(4区・5区・6区) Pl. 3 Views of Grid 4, 5 and 6



1. 7区最終状況 (東から)



 8 区最終状況 (東から)

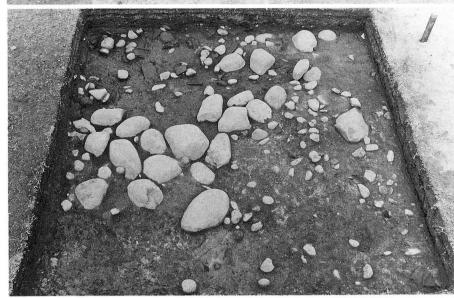


3. 8区ピット1 遺物出土状況 (北から)

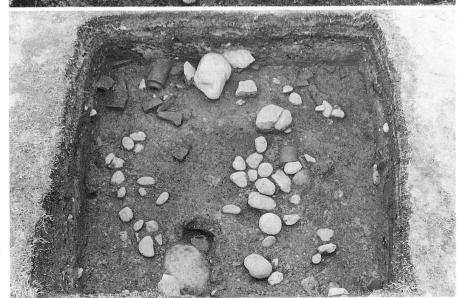
図版 4 第7地点発掘区(7区・8区) Pl. 4 Views of Grid 7 and 8, and a feature at Grid 8



8 区東壁セランタン (西から)

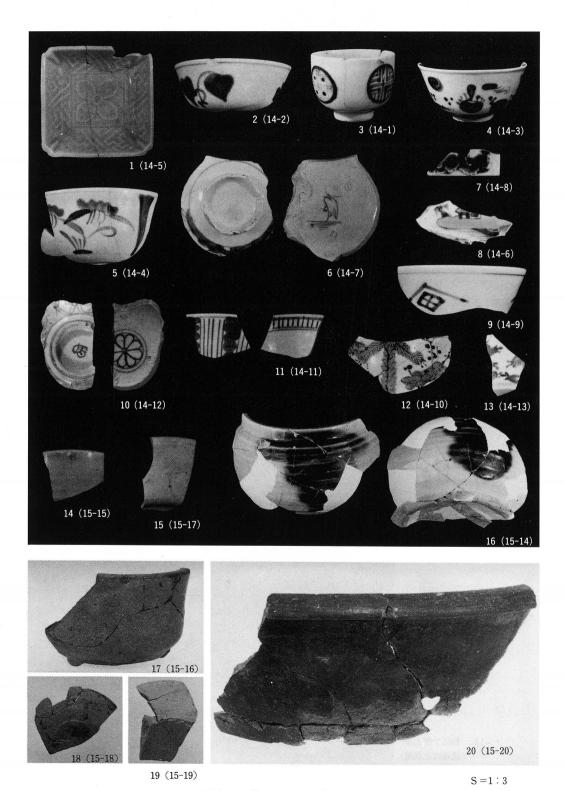


2. 9区IV層遺物 出土状況 (南から)

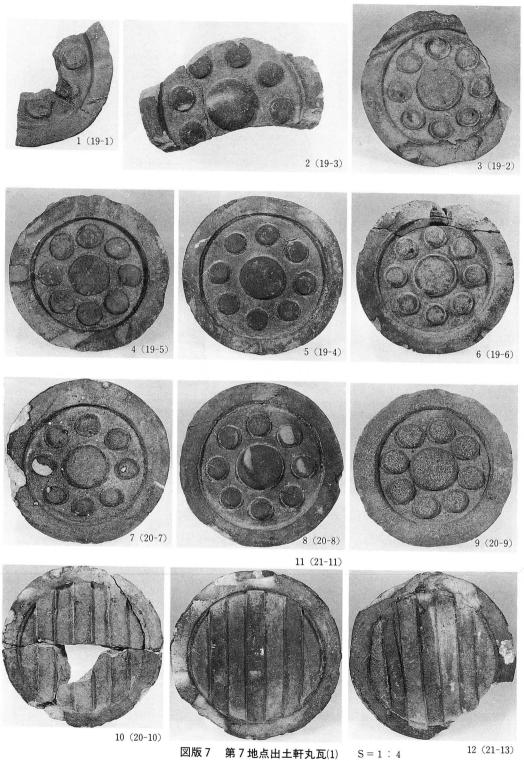


3. 10区V層上面 遺物出土状況 (南から)

図版5 第7地点発掘区(8区・9区・10区) Pl. 5 Features at Grid 8 and views of Grid 9 and 10

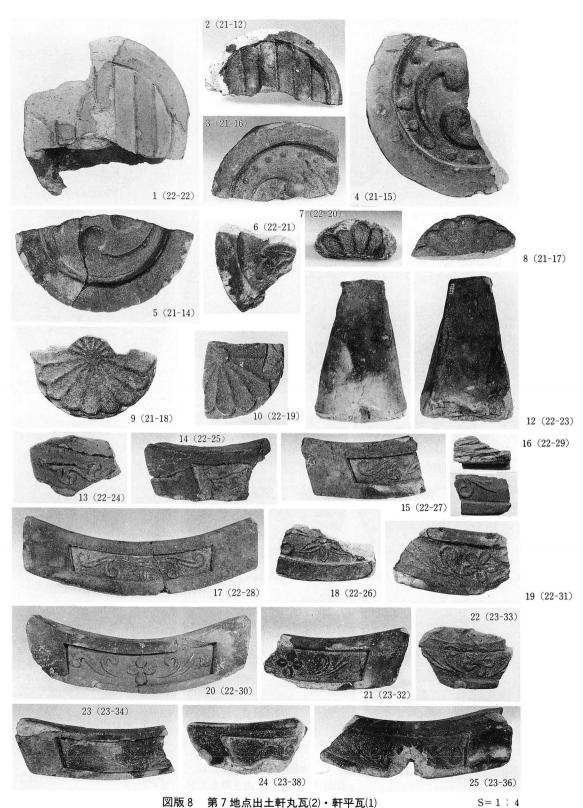


図版 6 第7地点出土陶磁器 P1.6 Ceramics and porcelains from NM7

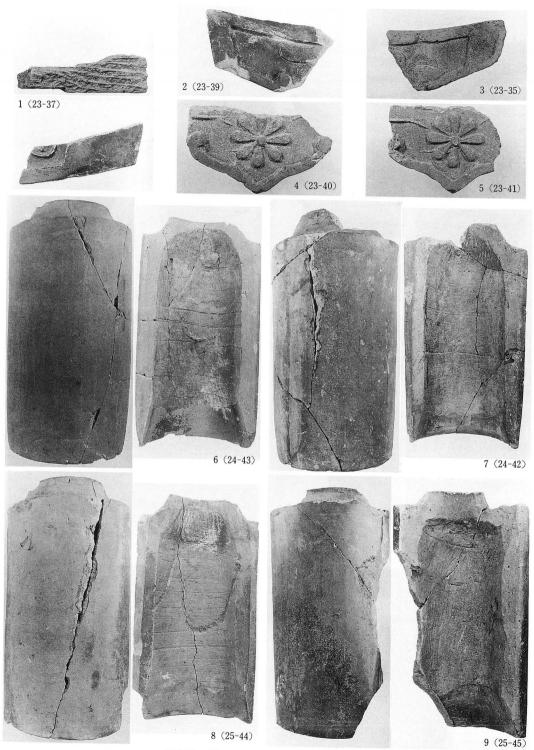


図版7 第7地点出土軒丸瓦(1) Pl. 7 Round eaves tiles from NM 7(1)

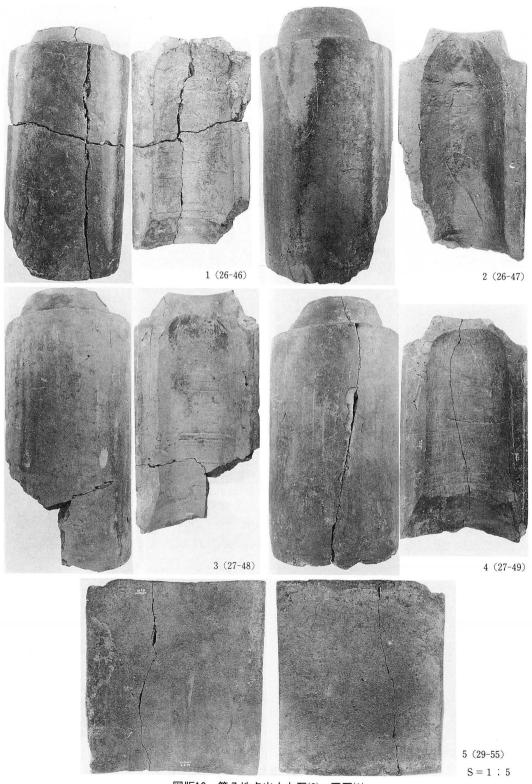
151



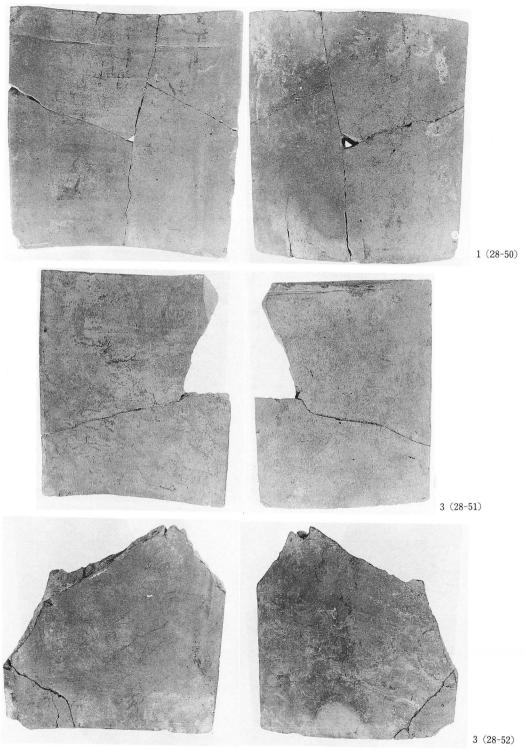
図版 8 第 7 地点出土軒丸瓦(2)•軒平瓦(1) Pl. 8 Round eaves tiles and flat eaves tiles from NM 7



図版 9 第 7 地点出土軒平瓦(2)・丸瓦(1)  $1 \sim 5 \quad S=1:4$  Pl. 9 Flat eaves tiles and round roof tiles from NM 7  $6 \sim 9 \quad S=1:5$ 

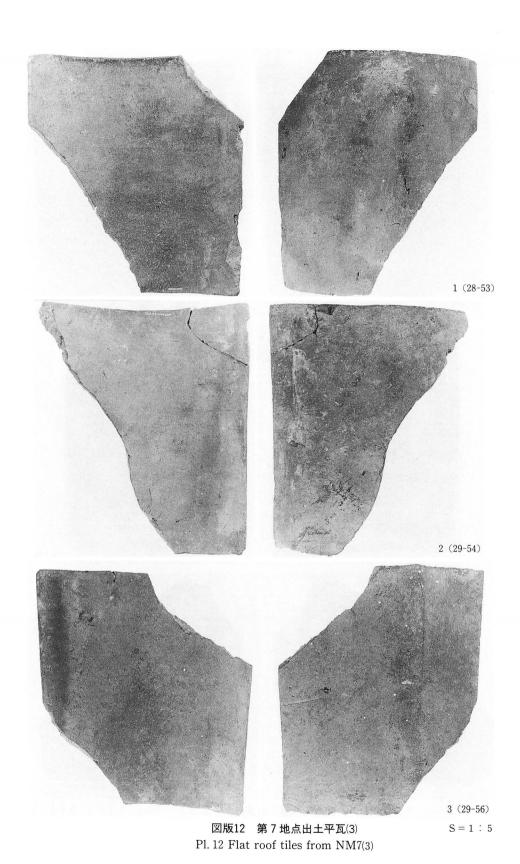


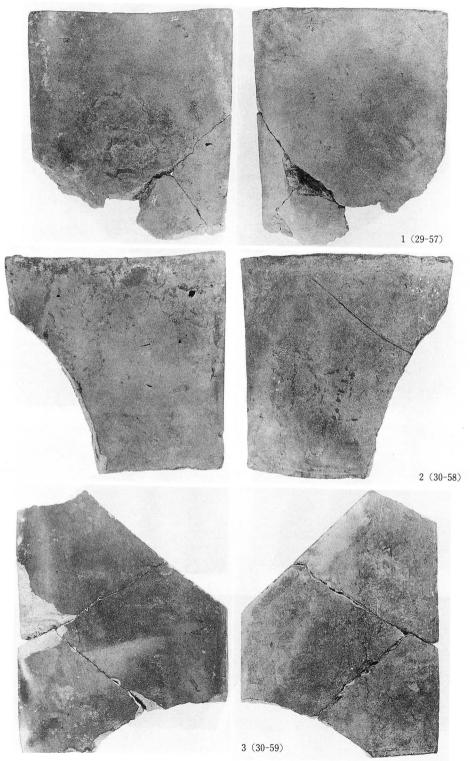
図版10 第7地点出土丸瓦(2)•平瓦(1) Pl. 10 Round roof tiles and flat roof tiles from NM 7



図版11 第7地点出土平瓦(2) Pl.11 Flat roof tiles from NM 7(2)

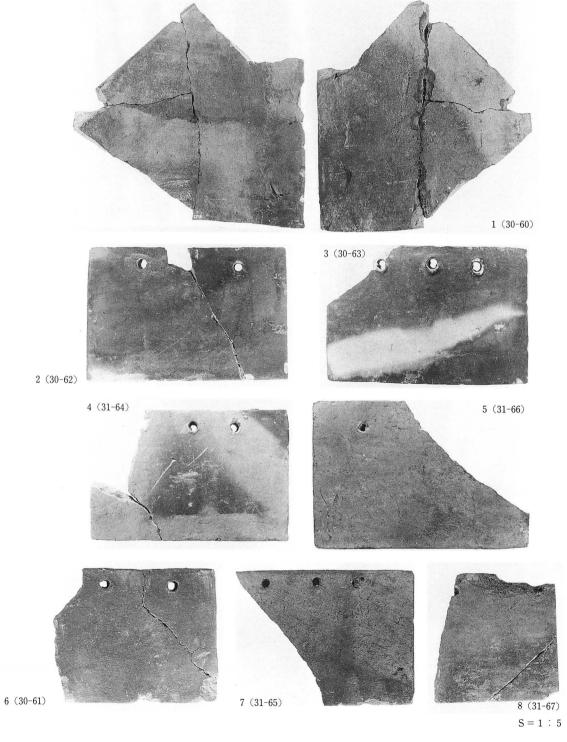
S = 1 : 5



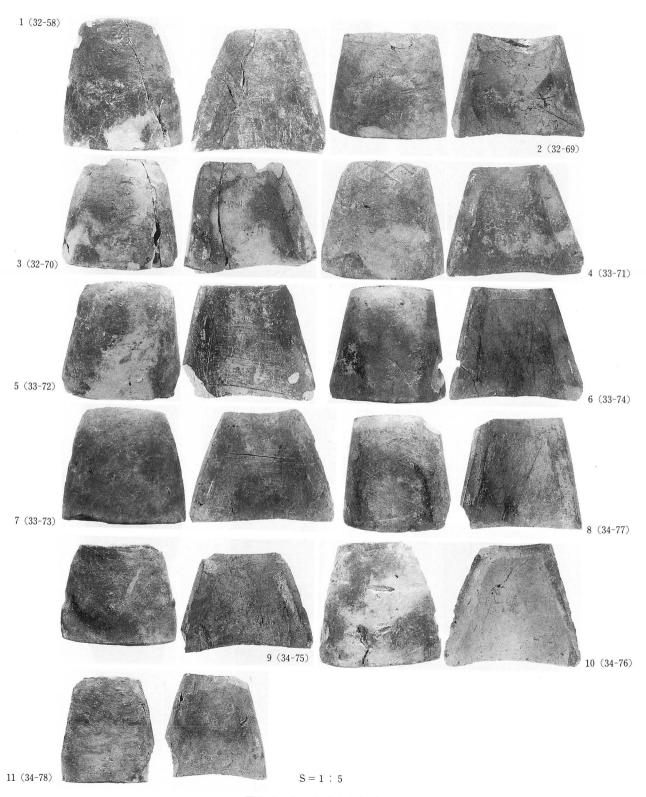


図版13 第7地点出土平瓦(4) Pl. 13 Flat roof tiles from NM7(4)

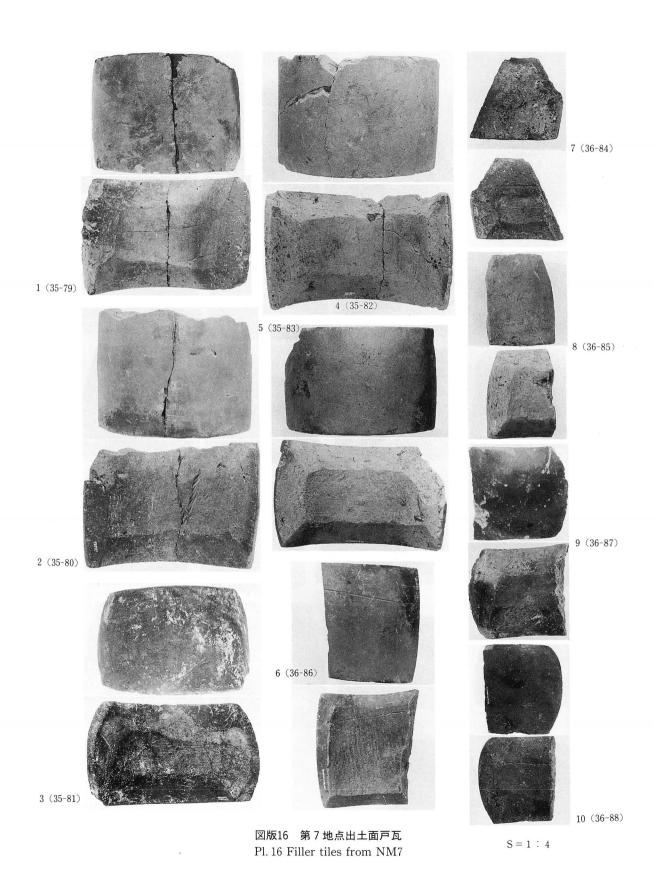
S = 1 : 5

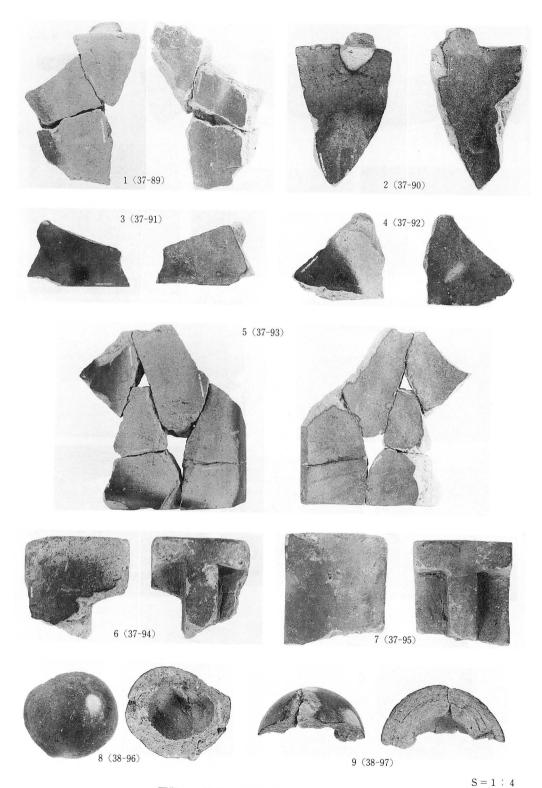


図版14 第7地点出土平瓦(5)・熨斗瓦 Pl. 14 Flat roof tiles and ridge tiles from NM7

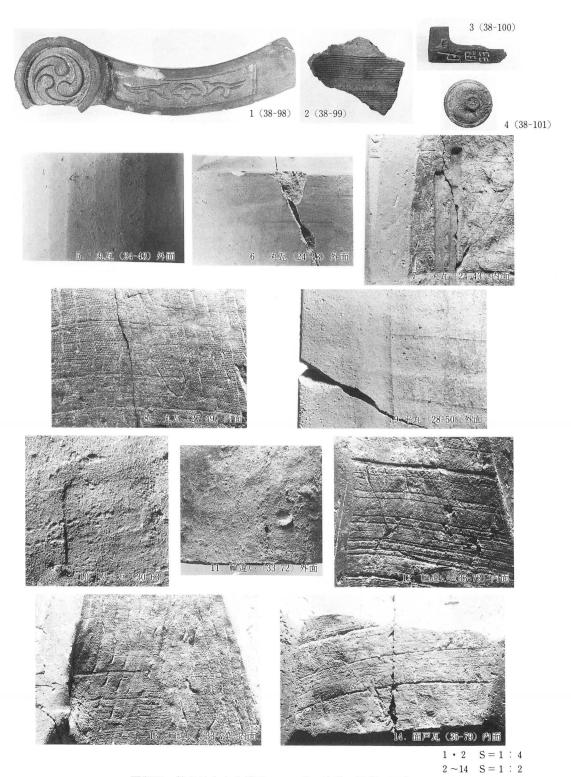


図版15 第7地点出土輪違い Pl. 15 Ridge decoration tiles from NM7





図版17 第7地点出土雁振瓦・道具瓦・桟瓦 Pl. 17 Various roof tiles from NM7



図版18 第7地点出土桟瓦・その他の遺物・瓦器面調整 Pl. 18 Various implements and surface finishing of roof tiles from NM7



1. 第8地点全景 (北から)

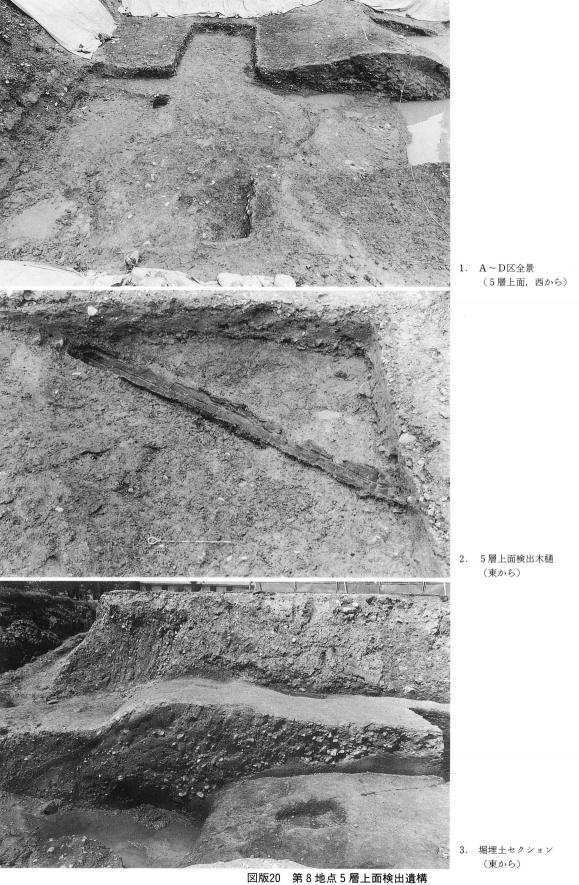


2. A~D区全景 (3層上面,東から)



3. 堀埋土V層 遺物出土状況 (東から)

図版19 第8地点全景・3層上面検出遺構 Pl. 19 View and features on stratum 3 of NM8



Pl. 20 Features on stratum 5 and cross section of NM8



1. A~D区全景 (8層上面, 南から)



2. A~D区全景 (8層上面,西から)



3. 8層上面検出溝 (北から)

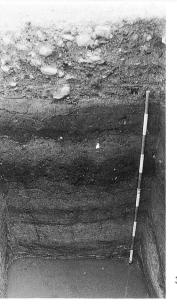
図版21 第8地点8層上面検出遺構 Pl.21 Features on stratum 8 of NM8



 8層上面検出ピット1~3 (東から)

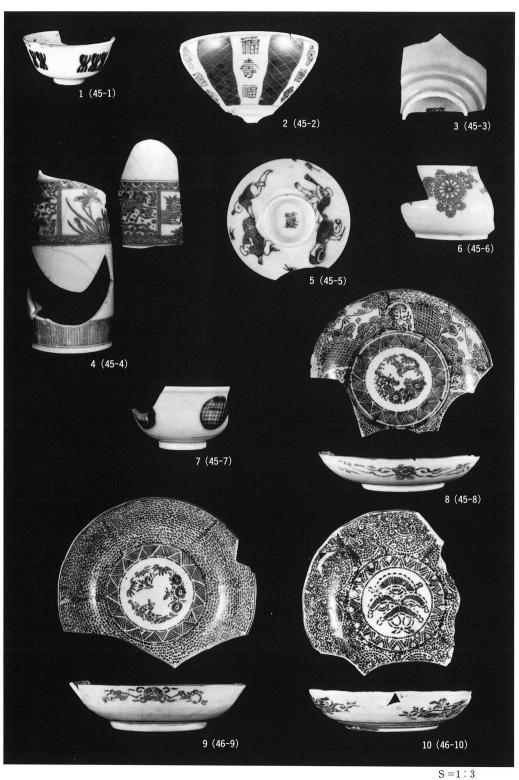


 8 層上面検出井戸 (南から)

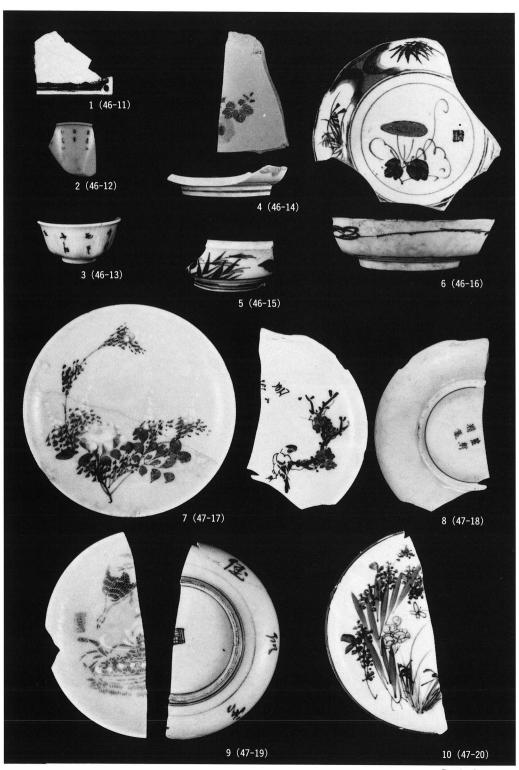


3. B 2 区深掘調査区南壁セクション (北から)

図版22 第8地点8層上面検出遺構・深掘区断面 Pl. 22 Features on stratum 8 and cross section of NM8

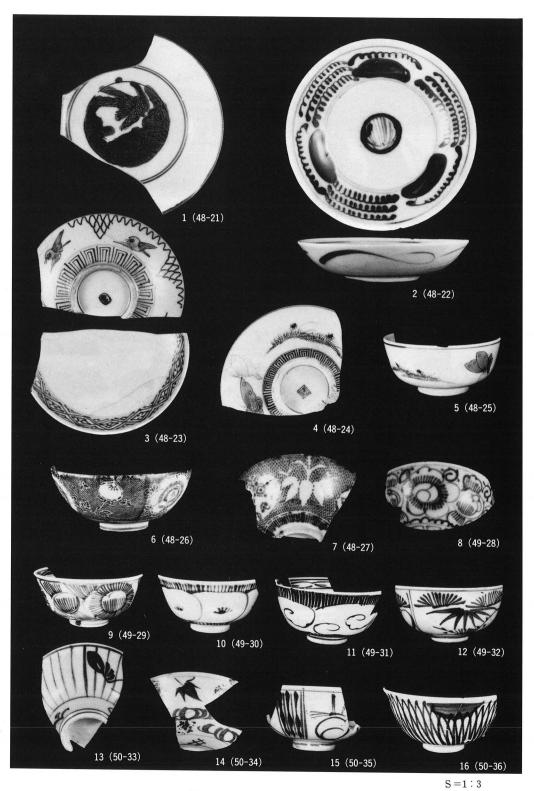


図版23 第8地点出土磁器(1) P1. 23 Porcelains from NM8 (1)

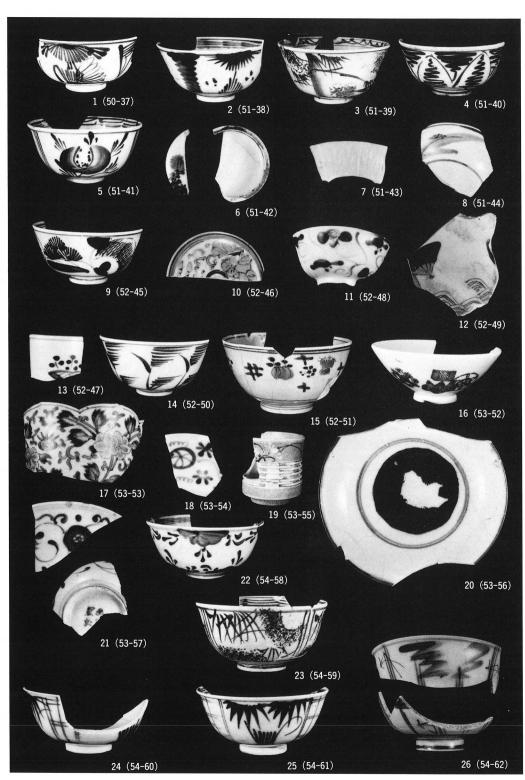


S=1:3

図版24 第 8 地点出土磁器(2) P1. 24 Porcelains from NM8 (2)

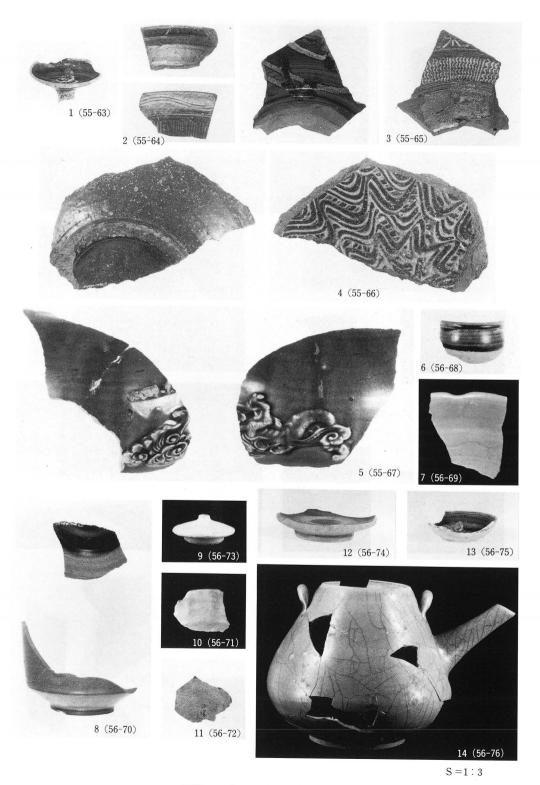


図版25 第 8 地点出土磁器(3) P1. 25 Porcelains from NM8 (3)

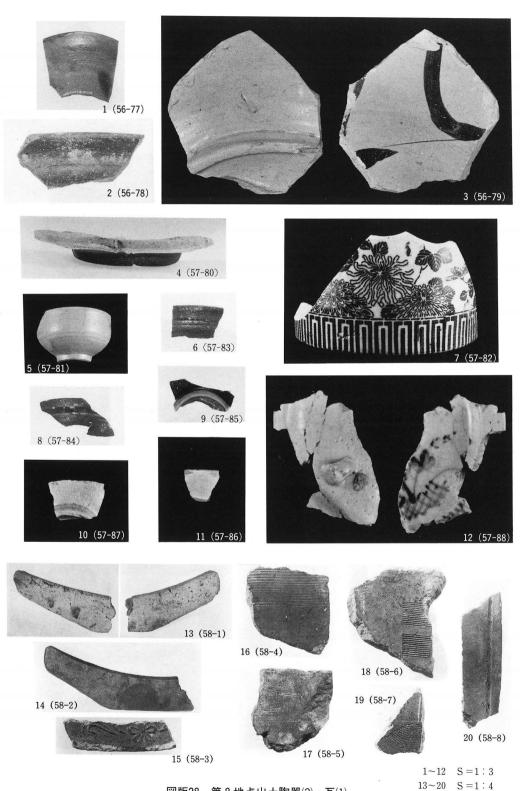


図版26 第 8 地点出土磁器(4) P1. 26 Porcelains from NM8 (4)

S = 1:3

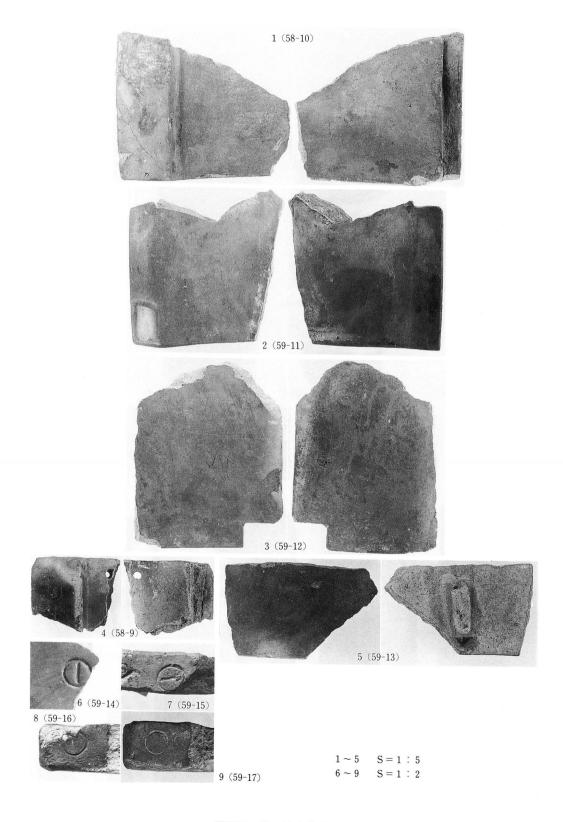


図版27 第8地点出土陶器(1) P1.27 Ceramics from NM8 (1)

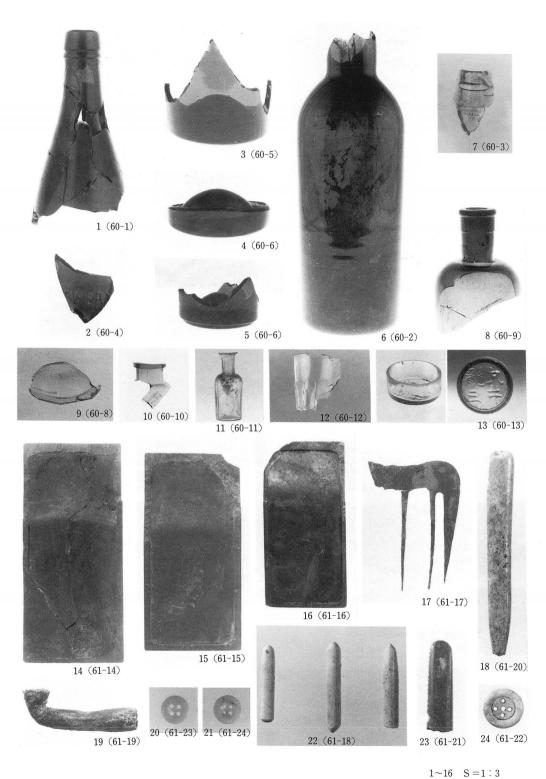


図版28 第8地点出土陶器(2) • 瓦(1) P1. 28 Ceramics and roof tiles from NM8

172

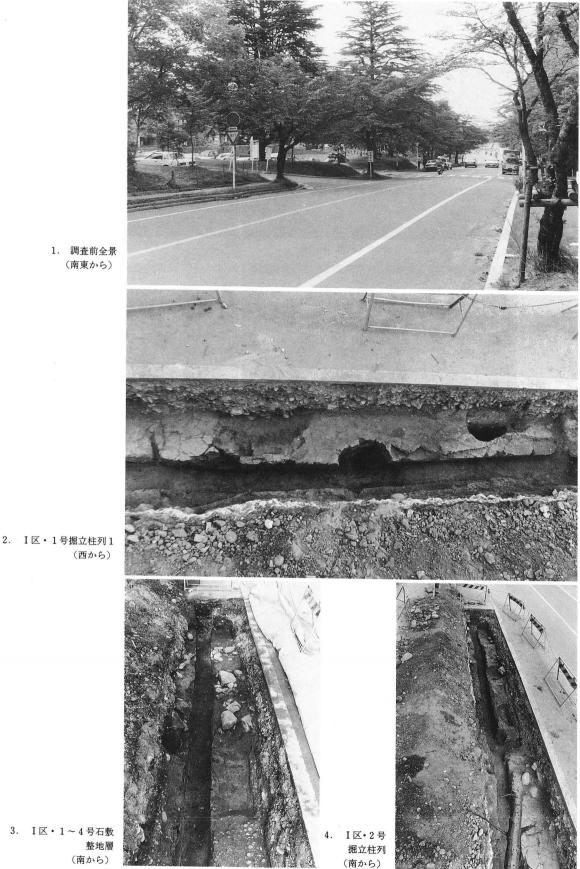


図版29 第8地点出土瓦(2) Pl. 29 Roof tiles from NM 8 (2)



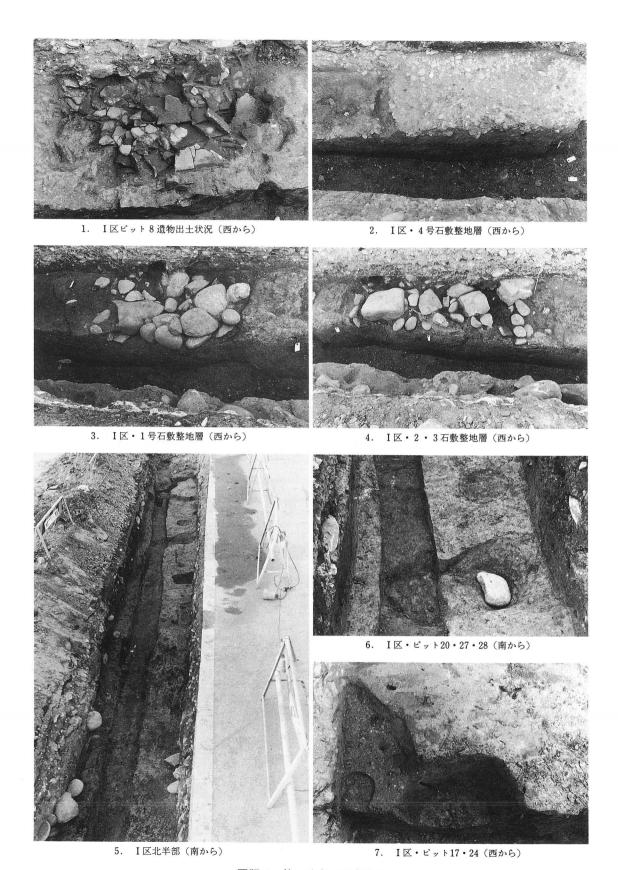
図版30 第8地点出土その他の遺物 P1.30 Various implements from NM8

 $1 \sim 16$  S = 1 · 3  $16 \sim 24$  S = 2 · 3

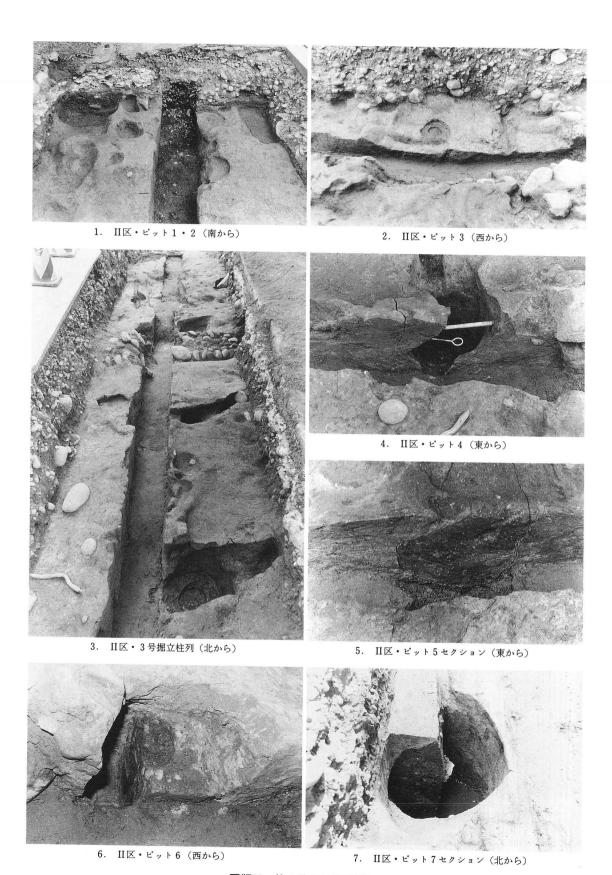


(南から)

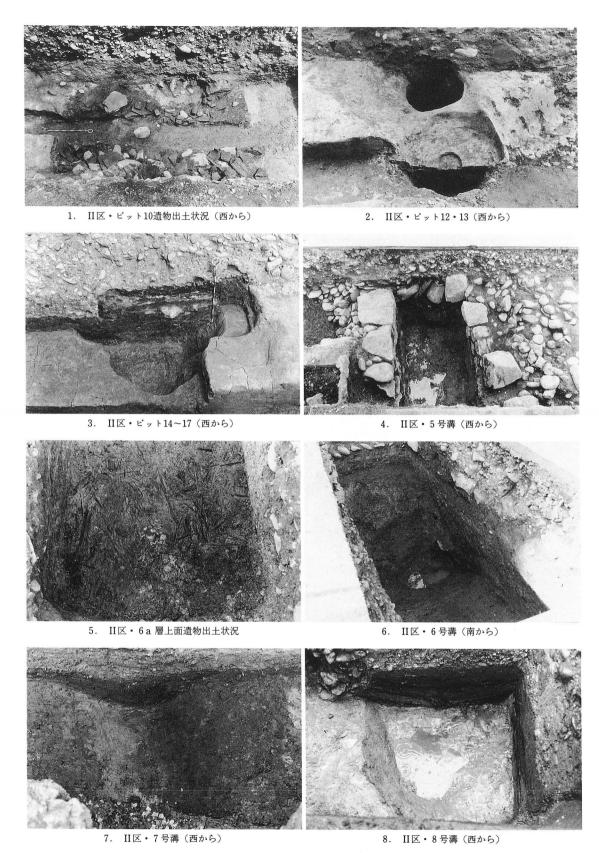
図版31 第4地点全景・I 区遺構(1) Pl. 31 View and features of Loc. I at NM 4(1)



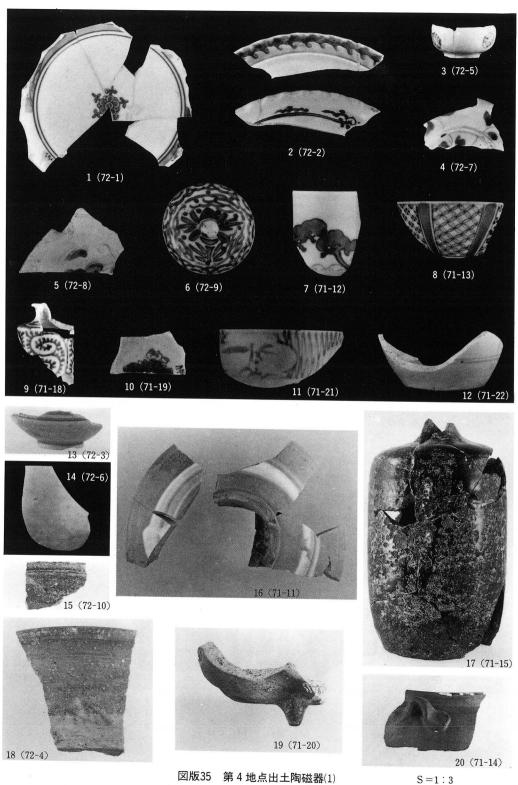
図版32 第4地点 I 区遺構(2) Pl. 32 Features of Loc. I at NM 4(2)



図版33 第4地点II区遺構(1) Pl. 33 Features of Loc. II at NM 4(1)

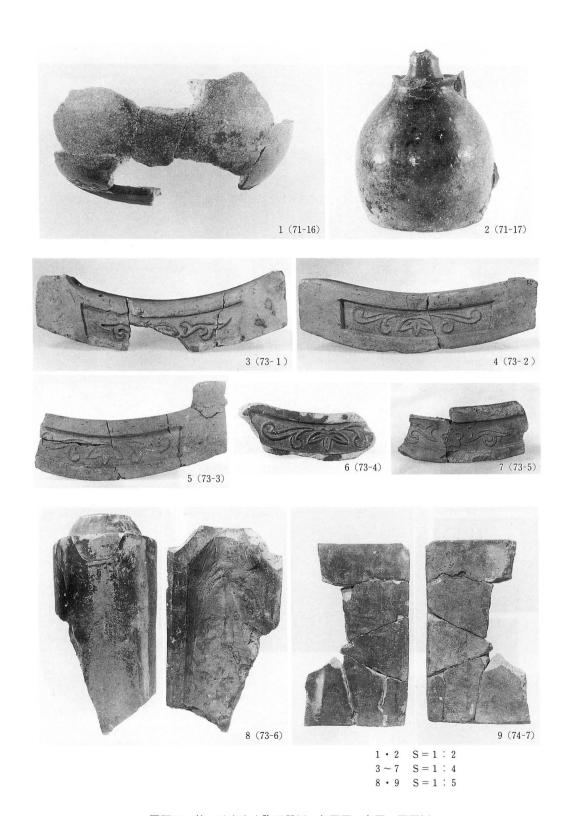


図版34 第4地点II区遺構(2) Pl. 34 Features of Loc. II at NM 4(2)

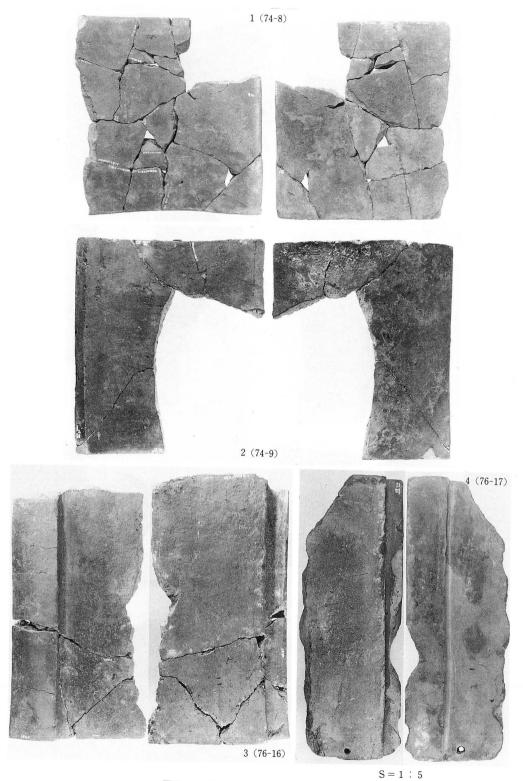


図版35 第4地点出土陶磁器(1) P1.35 Ceramics and porcelains from NM4

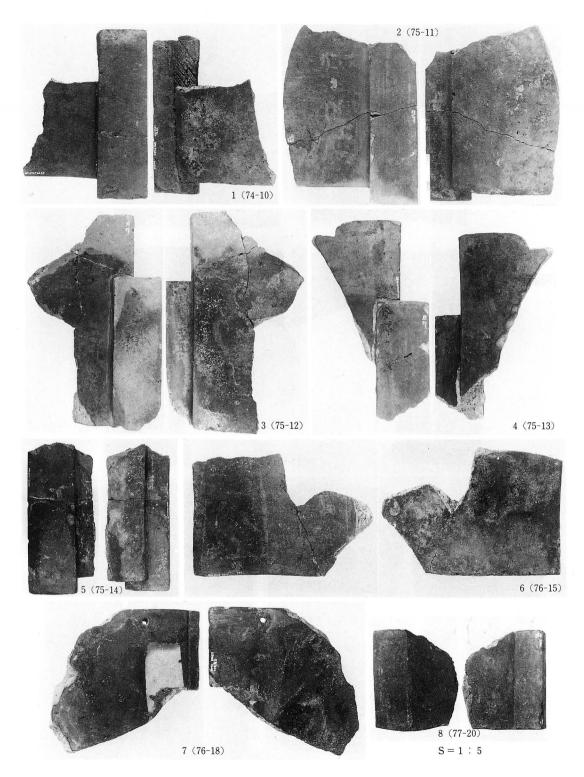
179



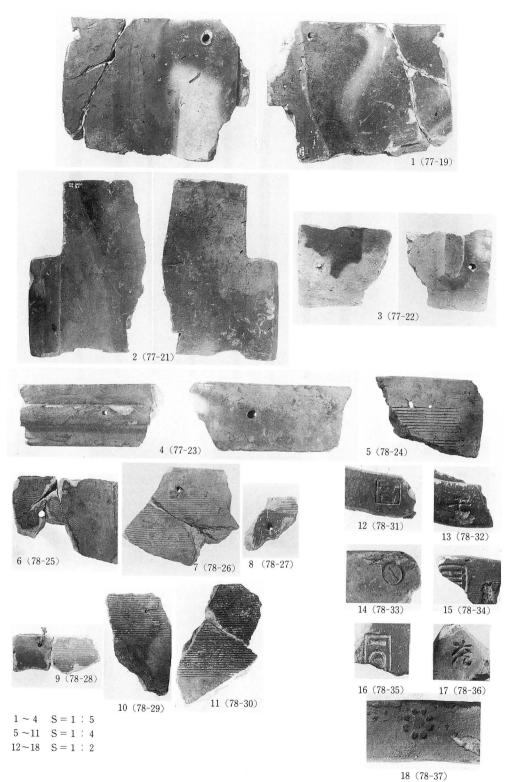
図版36 第4地点出土陶磁器(2)・軒平瓦・丸瓦・平瓦(1) Pl.36 Ceramics and roof tiles from NM4



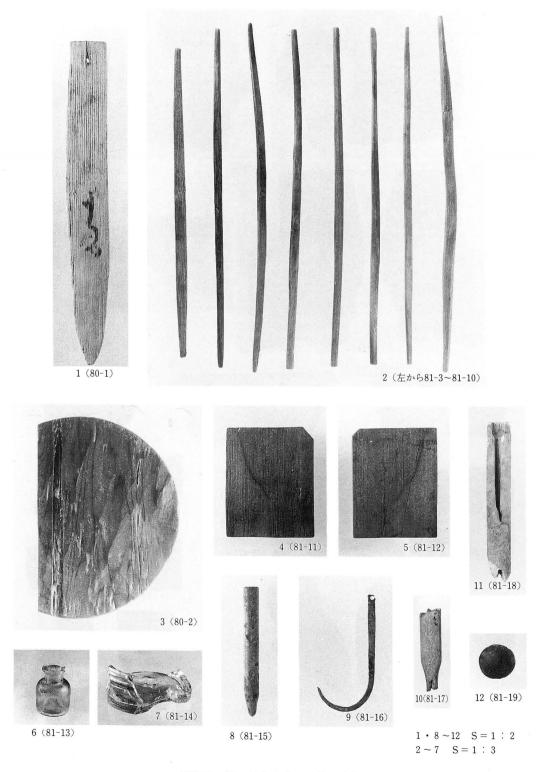
図版37 第4地点出土平瓦(2)・桟瓦(1) Pl.37 Pan tiles from NM4(2)



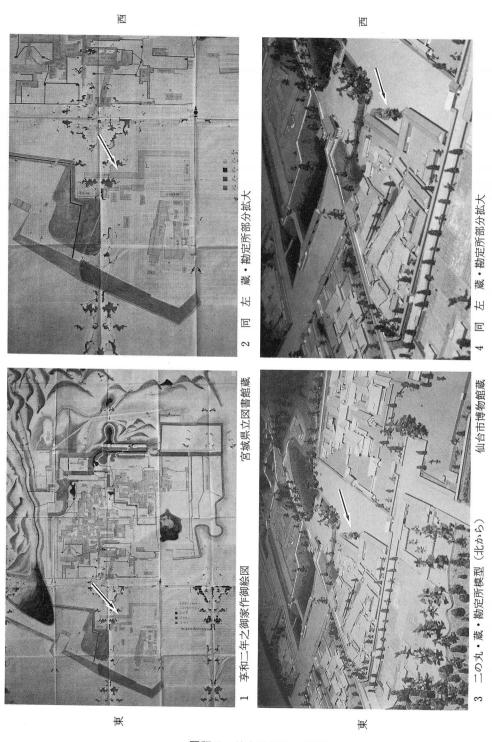
図版38 第 4 地点出土桟瓦(2) Pl.38 Pan tiles from NM4(2)



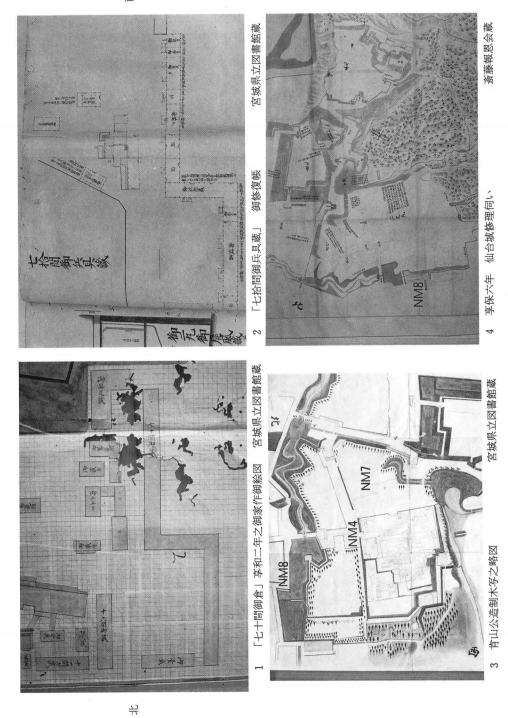
図版39 第4地点出土桟瓦(3)・その他の瓦 Pl39. Pan tiles and other roof tiles from NM4



図版40 第4地点出土その他の遺物 Pl.40 Various implements from NM4



図版41 仙台城絵図・模型 P1.41 Illustrations and restored models of the Sendai Castle



図版42 仙台城絵図 P1.42 Illustrations of the Sendai Castle

## 東北大学埋蔵文化財調査年報4.5

平成 4 年 3 月25日

発行 東北大学埋蔵文化財調査委員会 委員長 西 澤 潤 一 〒980 仙台市青葉区片平2丁目1-1 東北大学遺伝生熊研究センター内 TEL 022(227)6200(内)3311 印刷 今 野 印 刷 株 式 会 社

TEL 022(288)6123